

鏡繪歌

卷



詩句洋々ふ内よりのつと
様燈笑めさう如く一巻を
きく趣一連綿と一巻の
ことく自を 照らすとさう今うと
いにしへをかんぬぬる人く
おかしき一巻一夕の白雲

奇ぬる人くしとあやかし
在世より一巻き一巻の癖
句の物精入る句林句
人情は句その句の語前句の
一巻新糟粒の句新古を
若くその句をく一巻抄一厚

あいの柱もあつゝあつゝあつゝ
様高仙よ 孫ふ 新古の巻紙
椿よりかゝとくちと引持
るりきりりり

豆草

子化ハ末のし

あつゝあつゝ

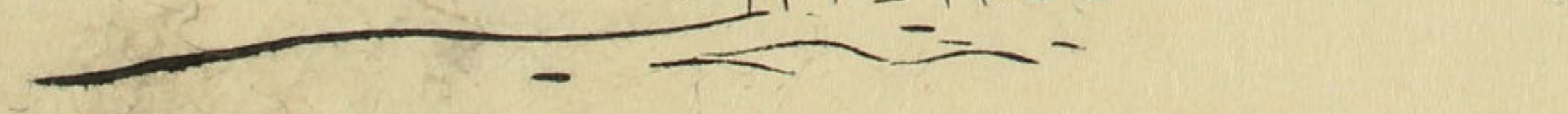
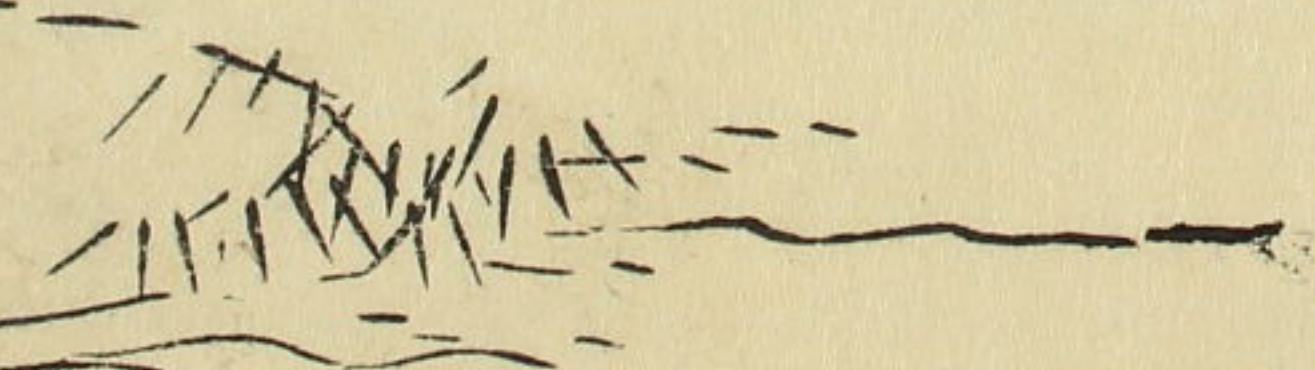
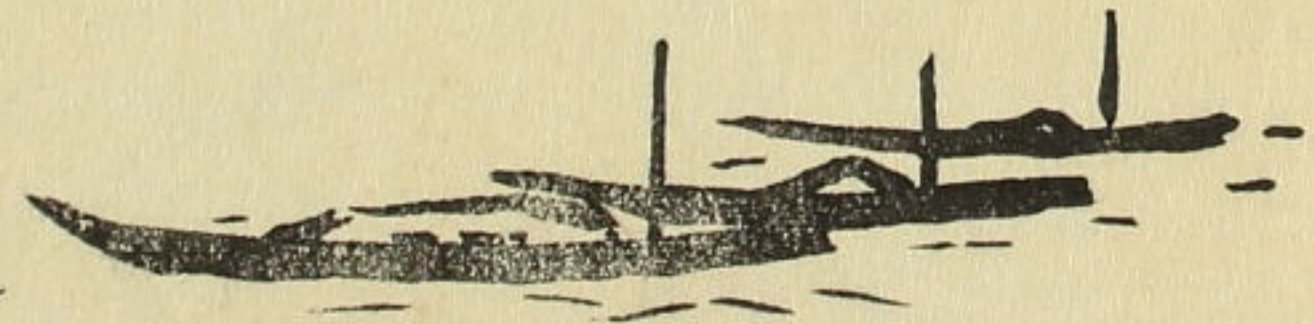
二二二月の巻



昭赤伝

あつゝあつゝ

二二二月の巻



十三一轉新

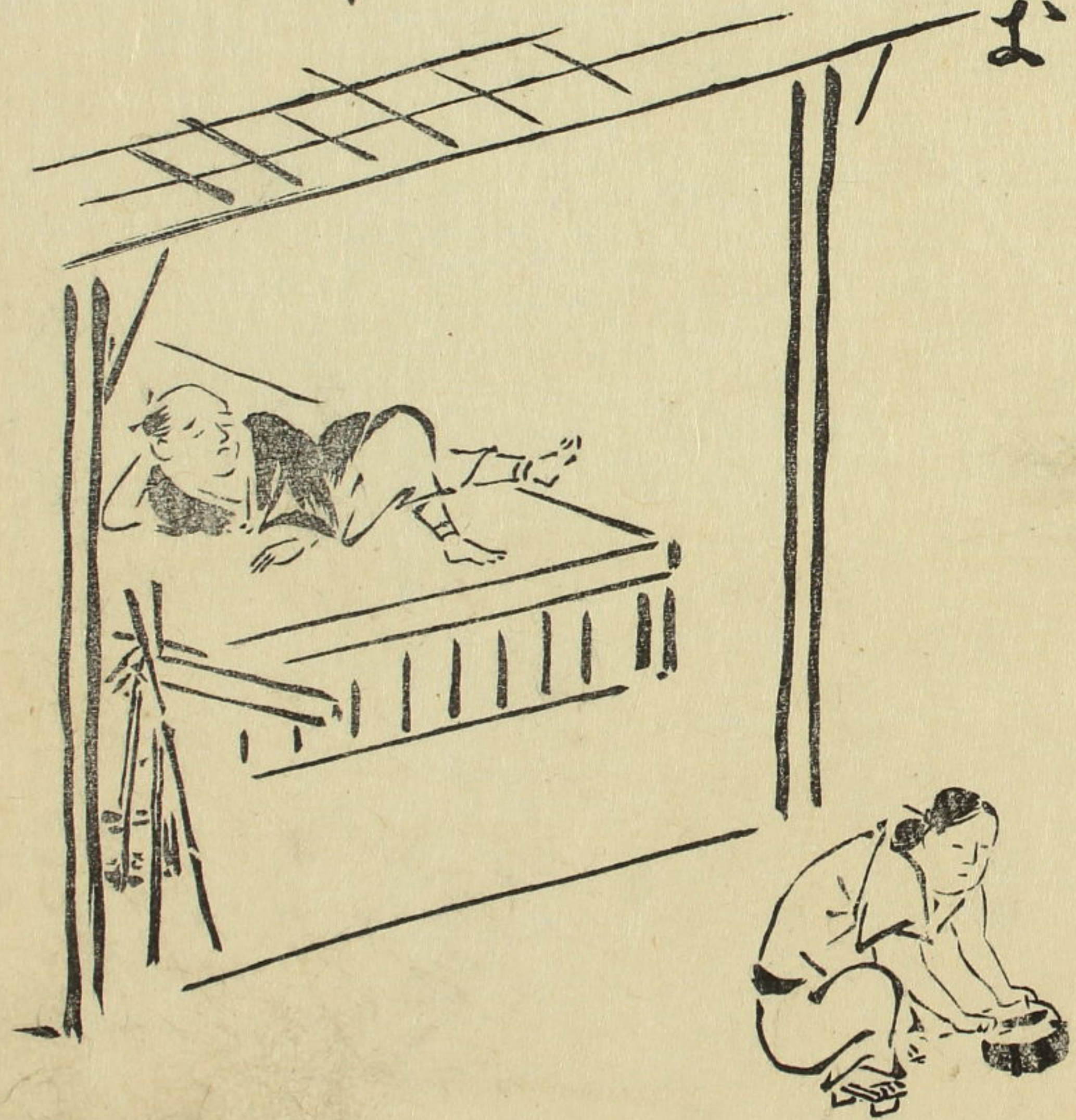
いづれもていづれも
おひらきのたより



場ノ用

油
こもけ
あせをいよ

あま化立場
とろく
眠をを
かすの酔



子孫

坊カヲ定メタル所

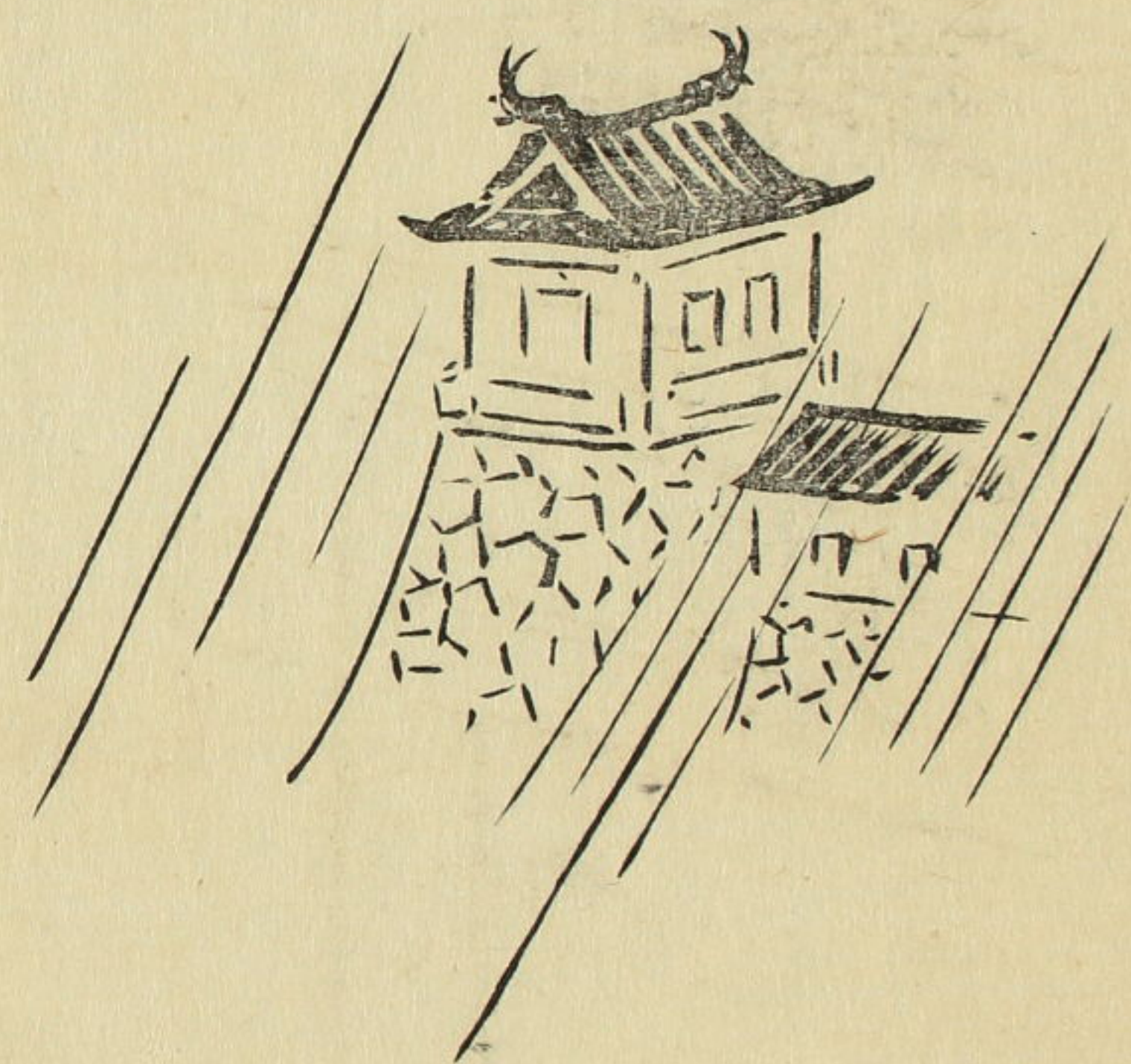
塔瓦口

夕之影

起情ノ用

我力ノ小

御ヤム



坊カノ亦存化

石ノ多クみ

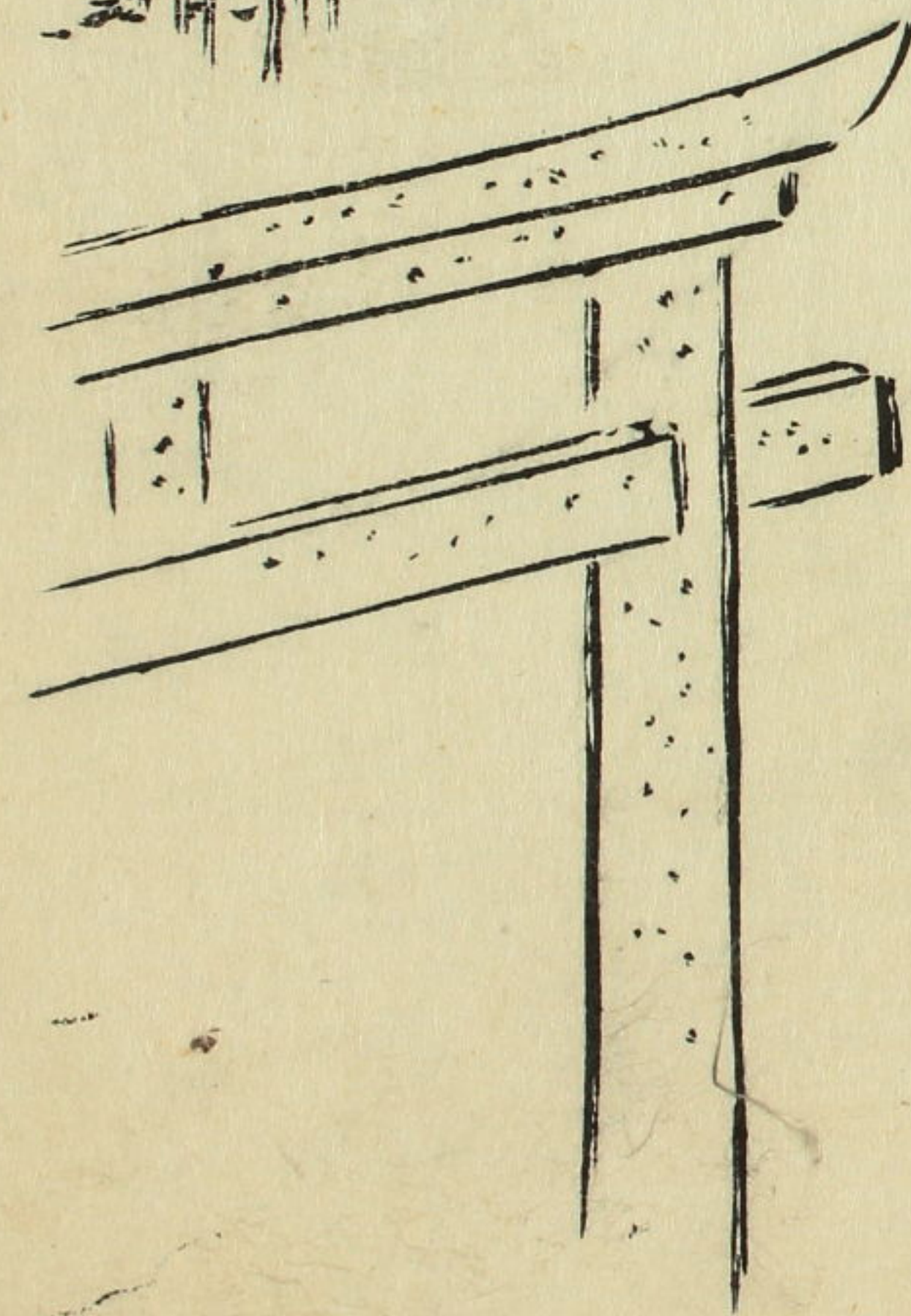
古身とよむ

三原色

藪草此

木をたてて

まわいり



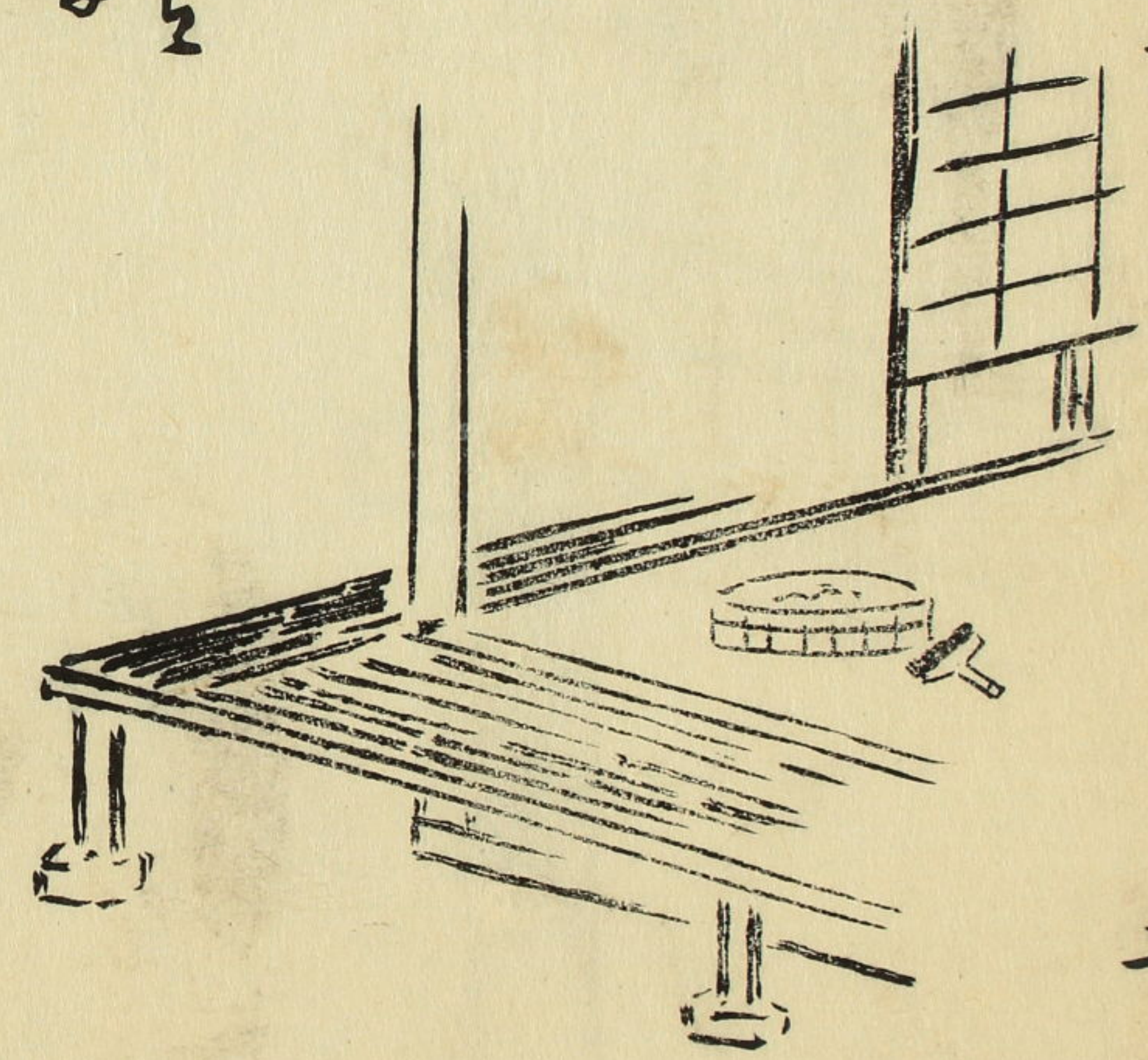
長

2

子子

起
用、所

金
一、れ、り、字

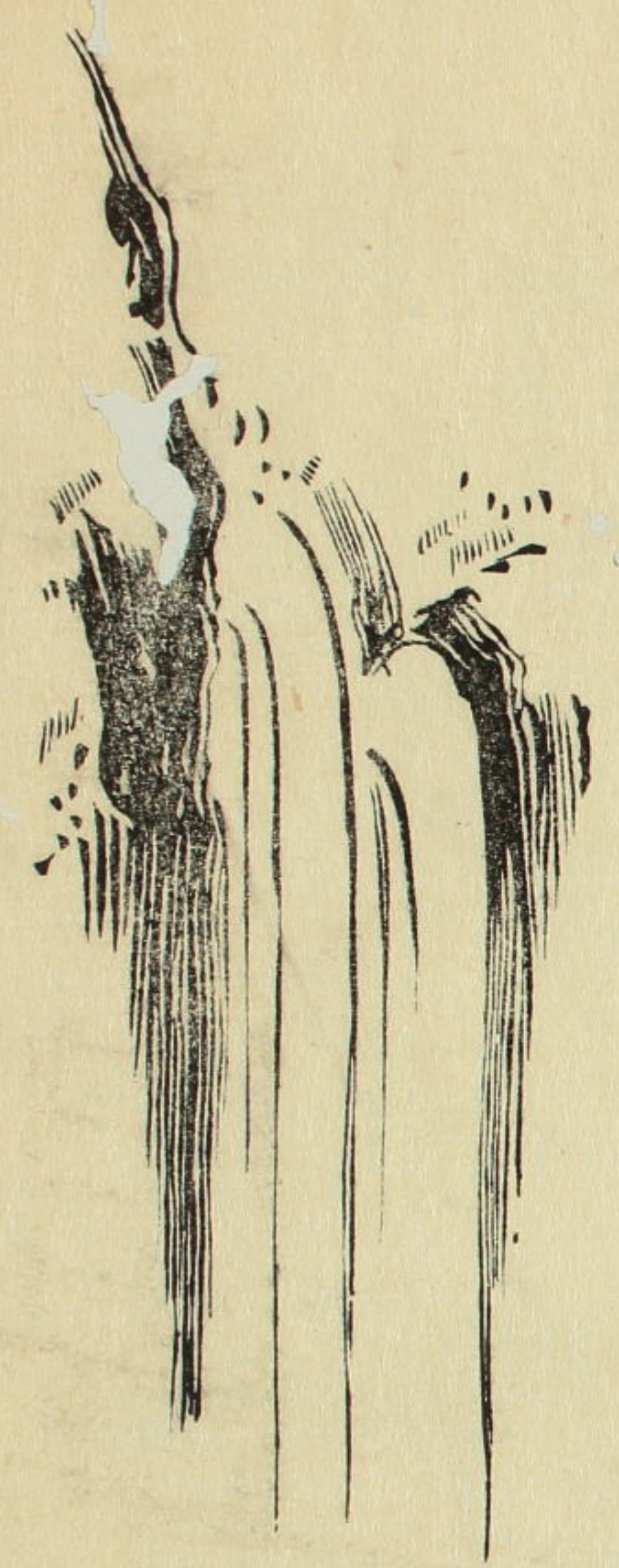


亦、に、学、寮、所

柏、子、本、よ、物、吃、ふ
信、の、赤、連、て

系、名

階、と、隔、る、谷、の、大、木



山、の、木、

おひらき

起す日家

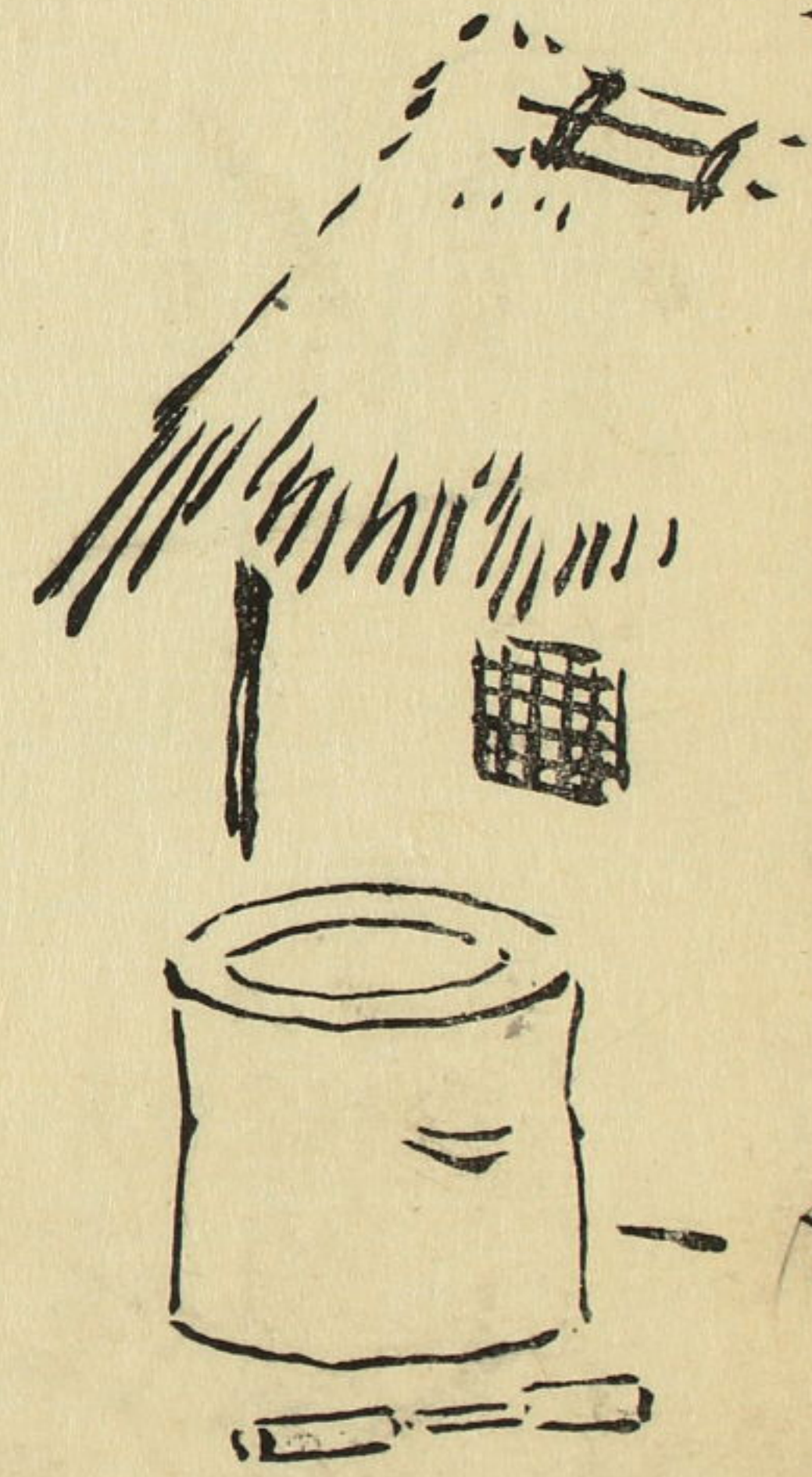
月影よこすし
むらさきの上

伸じり所

只ちりくくと
まじりく回る

起す

粘こいそ袴子
おとあう



まゝ人の上

娘の白髪を今新

あま化ノ姿

年くたをい

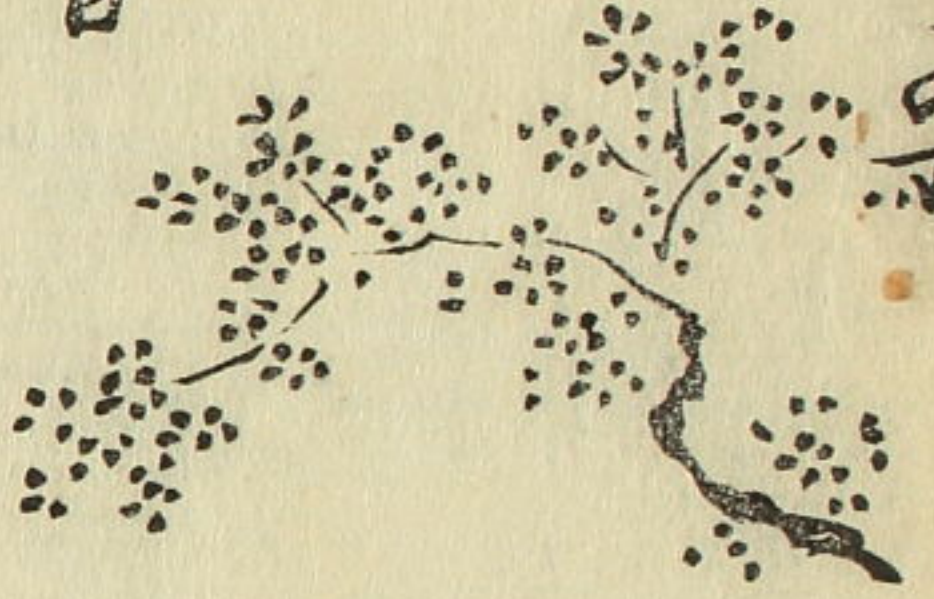
い并いー有の家



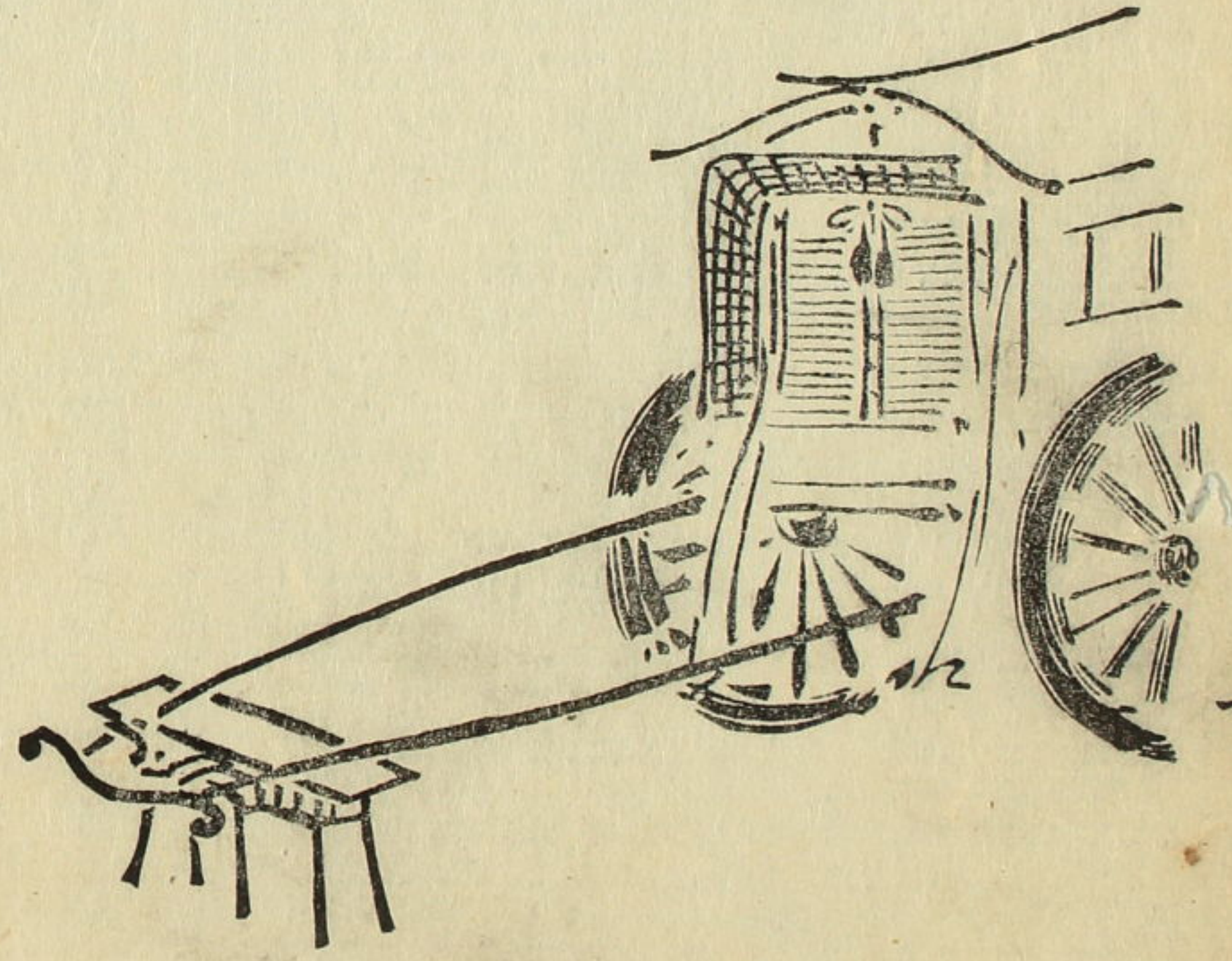
猿蓑の奇

雲上、伸

こゝろ車も
せうぬす夫の日



こゝろの降方
さうぬすの下
芥を吹雪



叫
起情

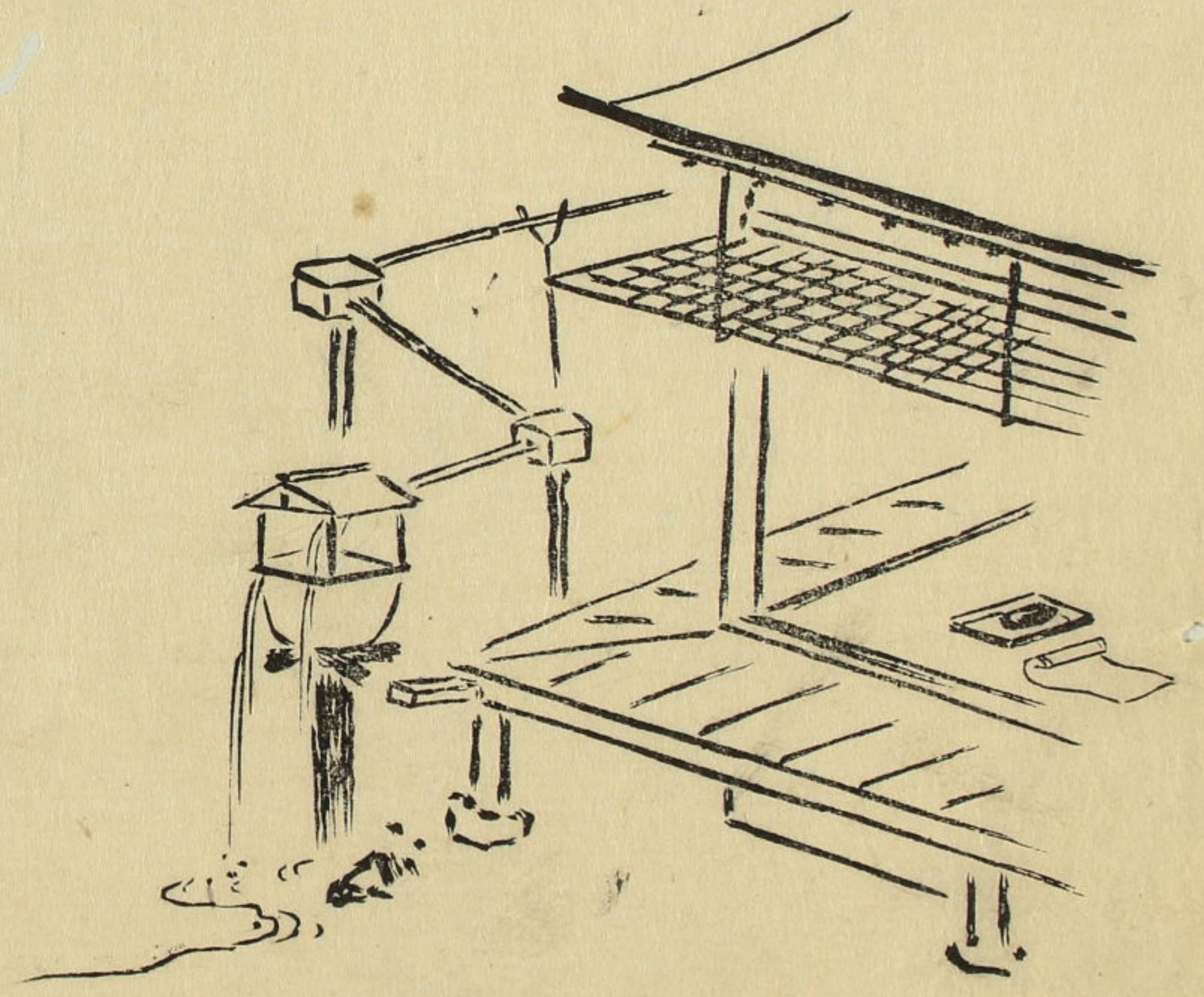
こゝろ此
こゝろをまわす



猿蓑の奇

安んずるに用
ちけきや
ふみきうちハ
戸とさしこ

いさ場
いくら山よ
ほめて来る水



起情

行真上人ハ
かゝるに遠く
いさ場
ちけき
ふみき
戸とさしこ



孫子

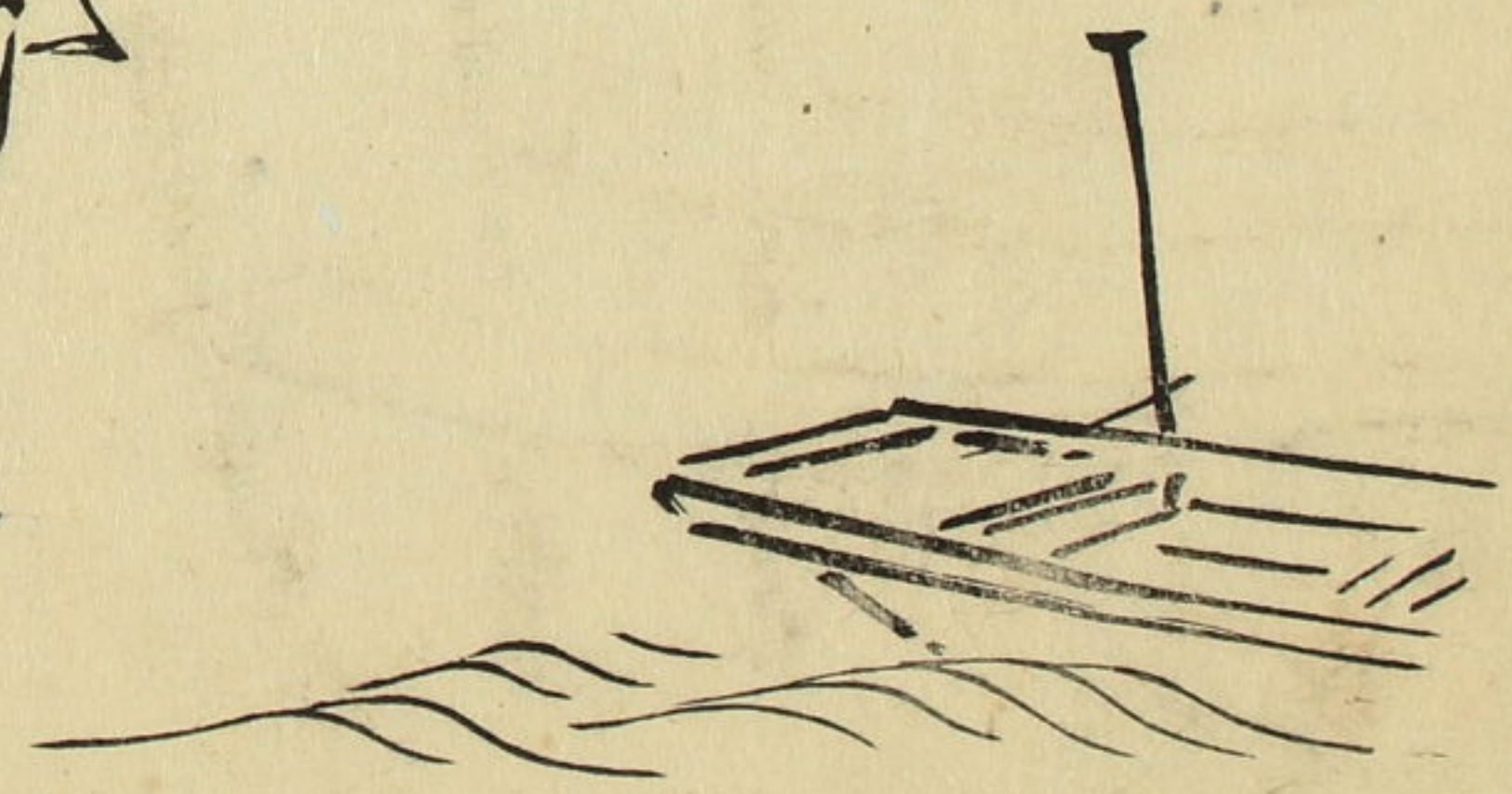
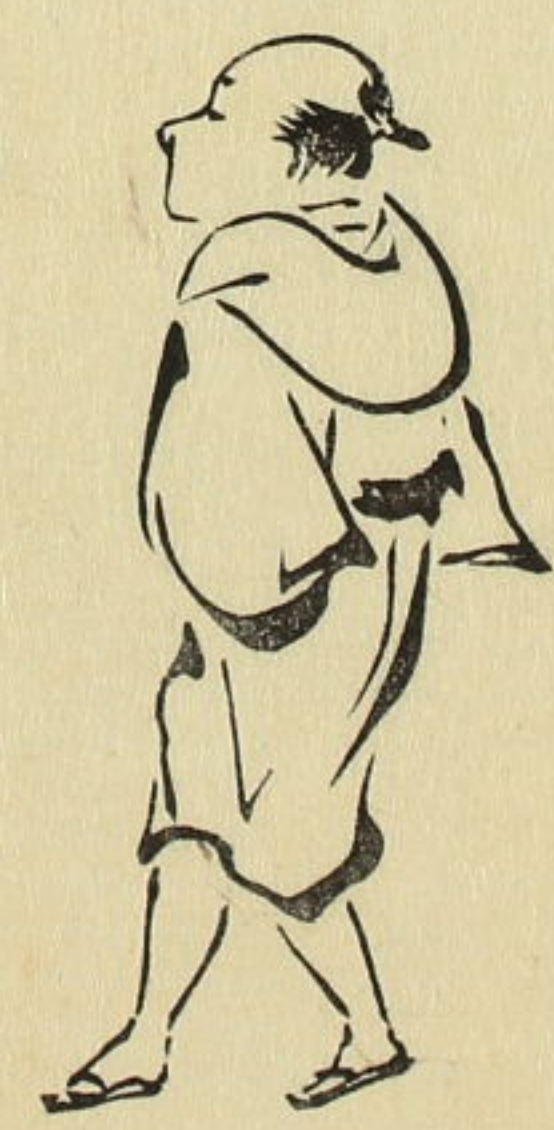
三人ノ季化

風ヤミテ候

舟ノ内ニ舟

用ノ所

只心ニ志不^レ上^レ程モ深^ク有

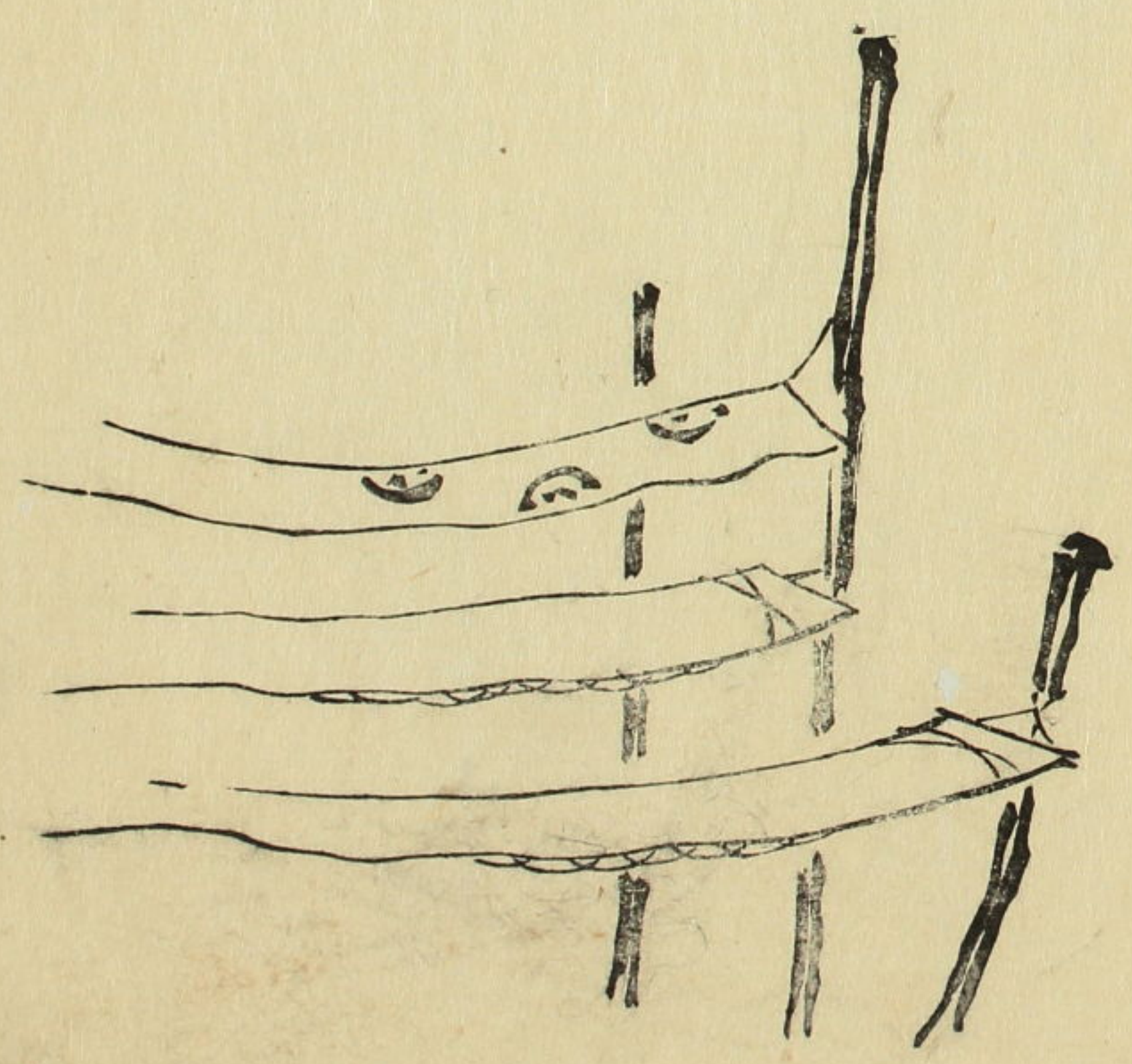
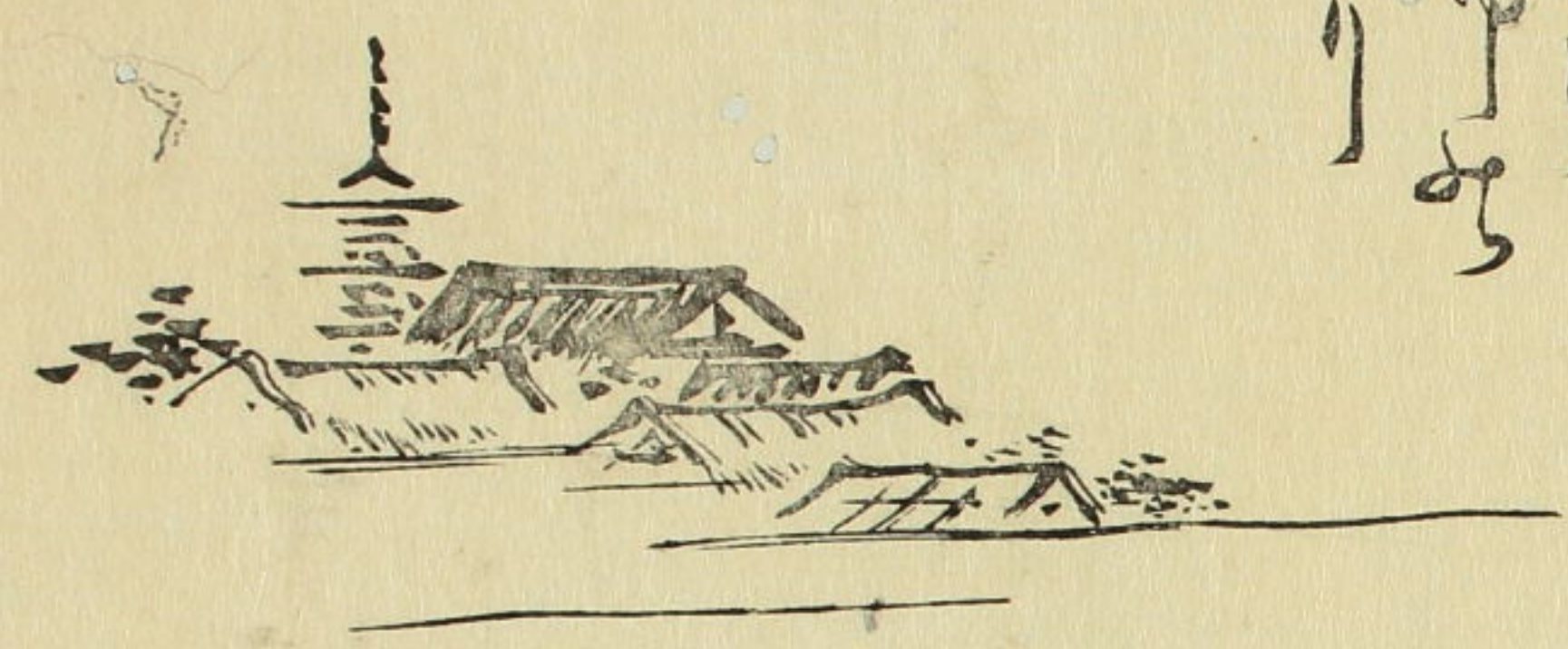


女ノ場ヲ
定メタル所

~~~~~

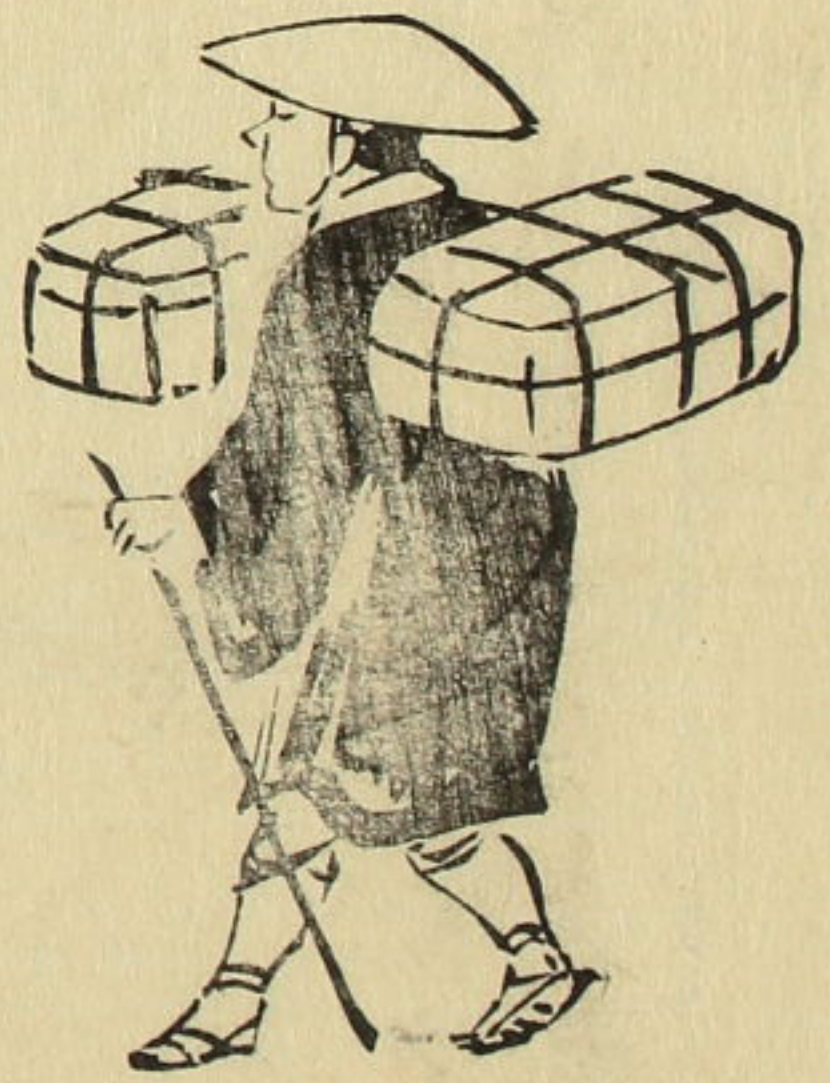
古<sup>き</sup>都<sup>ら</sup>ノ

世<sup>は</sup>終<sup>り</sup>



子子子子

田部ヲ向階ニ  
シタル時方  
月見と尚子  
やうて松と河  
途申ノ安  
林風子細の  
岩やく石北高電



十

あゝの田子  
粟にる糖の  
夕アさりよ  
肉、風情  
行端る  
子ハあゝの田子  
松、松



十

孫子兵法

軍は武門子に對して  
出陣はさあ  
牙細き左刀の  
ささ方とて

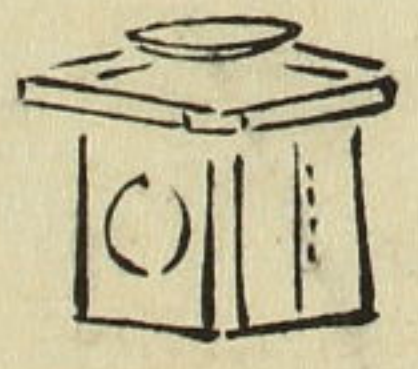


あゝ風情

古様は根土器と

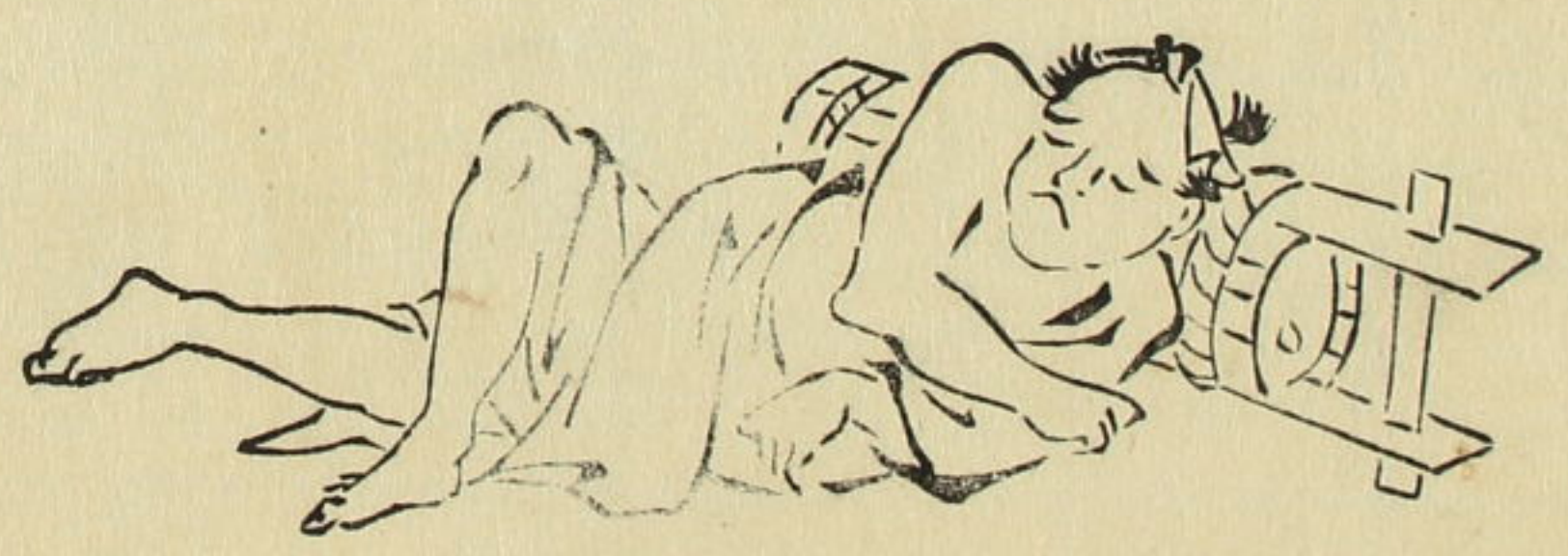
時分

時了時了おとけよ



家北の安  
職人此不あしこまの信

南の  
伸に  
あつたよ  
あつたよ



|      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |
| あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ | あつたよ |

あつたよ

我々のよる川に潮のふき  
 正則  
 石のうら石に水をとよむ  
 楚江  
 都府に水とえりてまがひ  
 勝重  
 金衣にりし日は何より  
 葦香  
 拍子木に拍子ふはれ打連を  
 免苓  
 階を隔る谷の太竹  
 正秀  
 月影よこる影の洞の上  
 則  
 只ちらくとさる頃  
 重氏

粘こいき袴は杖を打りしと  
 重古  
 髪きの白髪と今別ア身より  
 菘  
 年くはをよ并ひ一右の敷  
 孝  
 こころ車せせぬ素日  
 則  
 有る葉の下に花をひき  
 睦  
 啼くよりせもろと色し  
 正幸  
 ちげまのあやうらむ  
 江  
 いくらによほそまら水  
 苓

花子集

三

行噴き人におもひに遠く香  
 せめてあこしむる世に  
 風やこぼれゆくもの涙一舟  
 只いとしかと頼む條物  
 ちしとく吉ふ都此世にあり  
 月見か霜よやうて松うつ  
 枯風は細の糸やく石の電  
 粟むる糠の夕アさひお

香 無 秀 通 菜 草 苔 睡

行瀧あふまゝあふまゝに松海  
 才細お左刀のさる方を記  
 古様は銀土器と赤くよ  
 叶るるまゝあふまゝ  
 職人おあふまゝの信  
 南おひてよあふまゝ

通 成 沓 沓 沓 沓 沓 沓

子子子子

十四

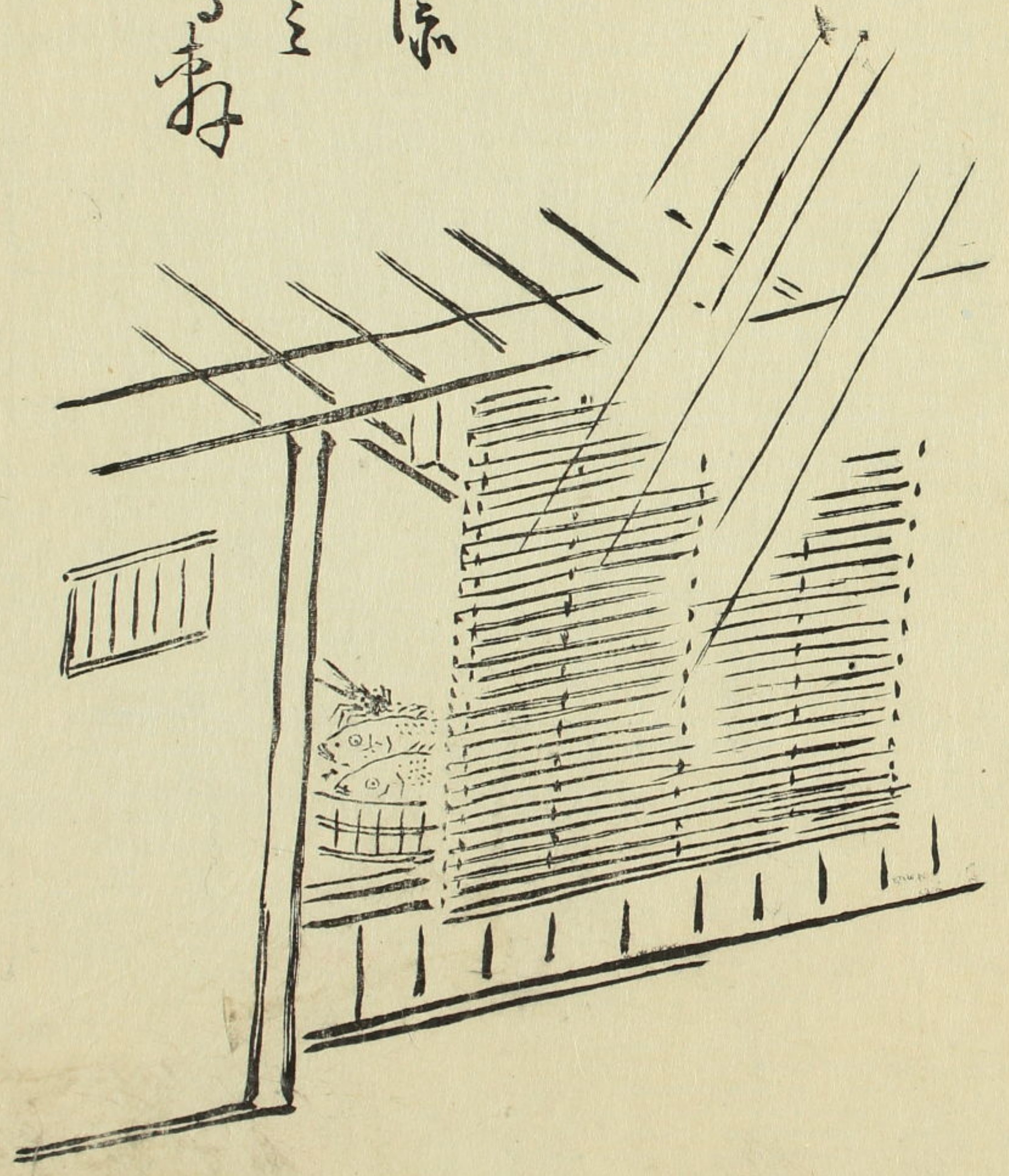


子孫の

下

振賣の  
房あしき  
夷謀

暇居所  
防子ハヤ  
時有る



景

景

為三一精言傳

書道しう極の

小書が引ひて

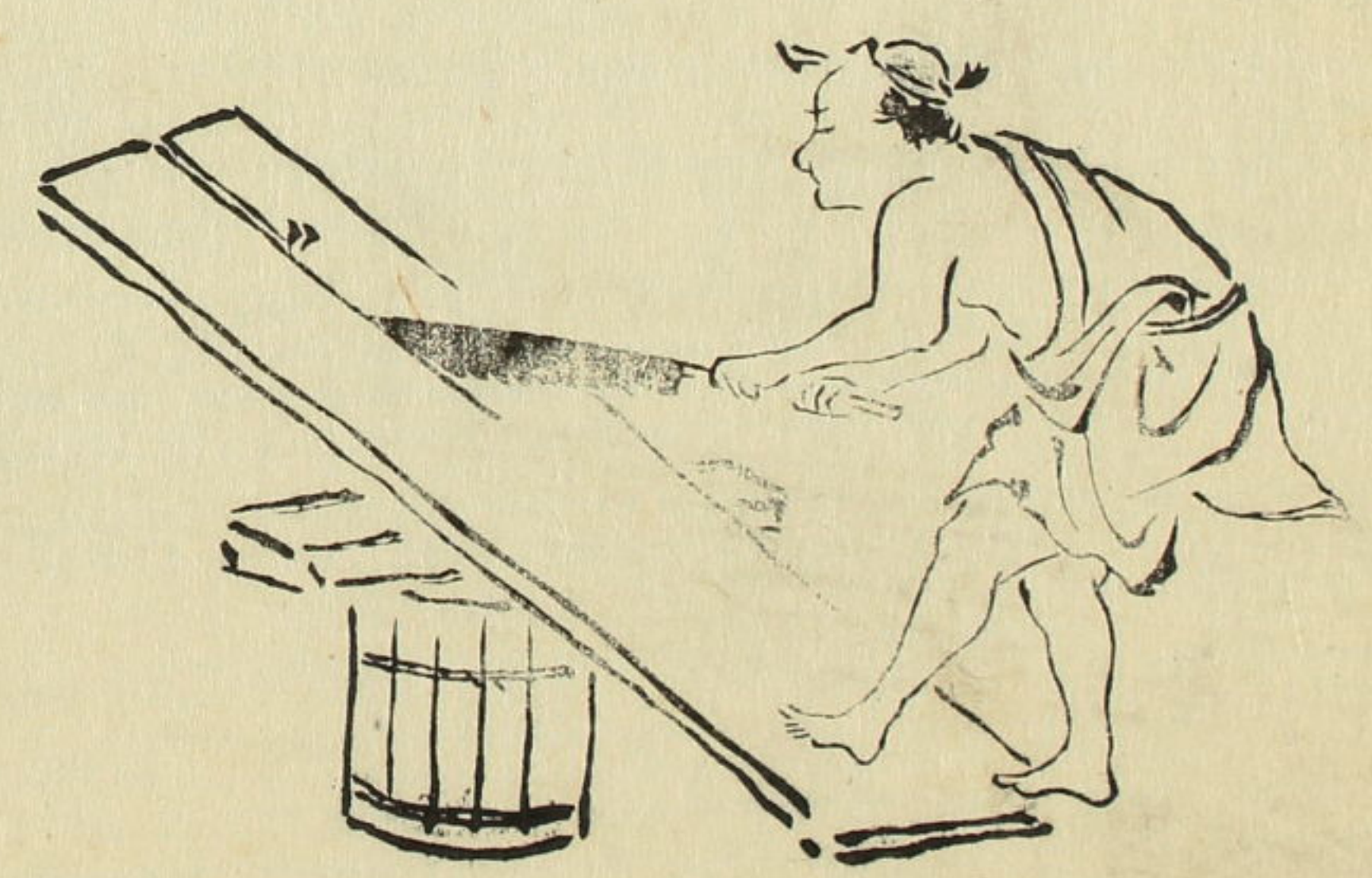
変化山方

書道

斤元山

月と

アミ



人の変化

好物の餅と

孫さめおの風

玉ノ一字変化

武家用ノ降

刻木ノ安お

玉ヒ高き事



子子集

香化草舟獨舩  
堂シタル安

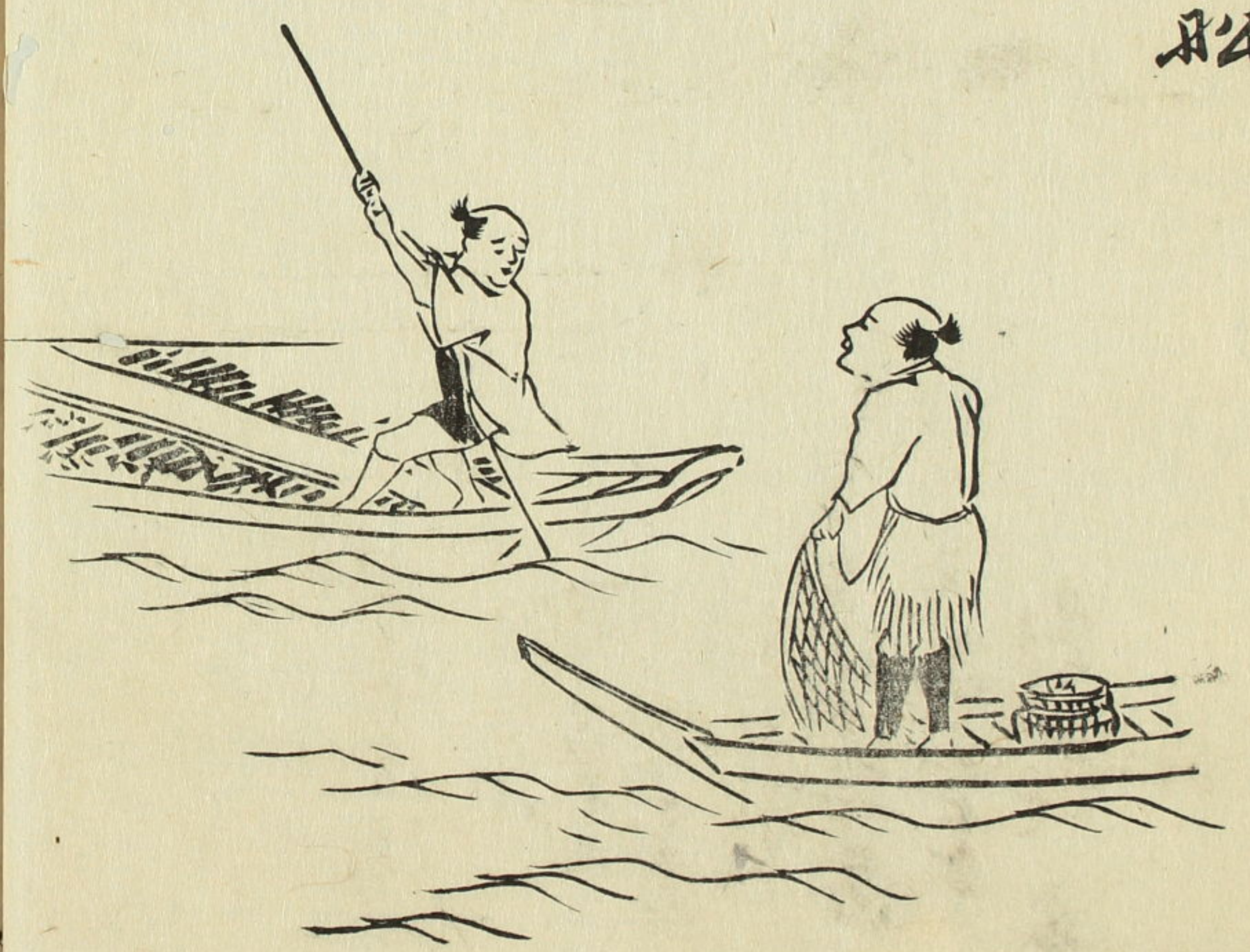
細の者

をつていふ子  
まろかけを

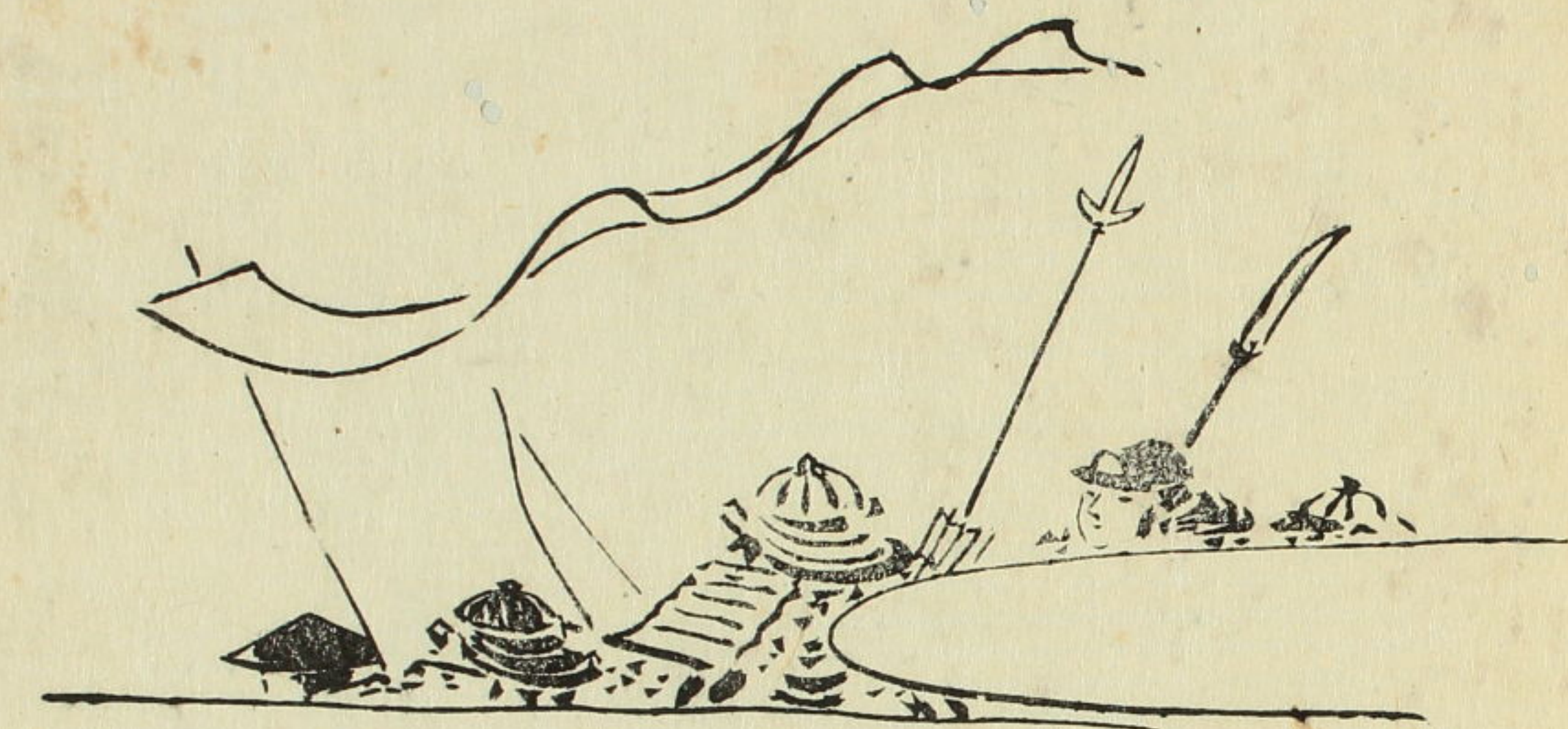
天相ノ所

星さく見えに

廿八日



一七



天相ノ所

見えにノ所

しるるまは

陣軍の

大なるを

こきノ所方

はるるのまを

静とせしめぬ

十八

妻化ノ女

明きくむお

つうちんをいけし

まゝ人ノ上

肩習子とる

湯碗のまゝ茶



人ノ妻化

よおきの千茶

刻むもうハの元

人ヲ近ハセ名妻化

了るよ生ぬ日と

由て悲とる



子孫系

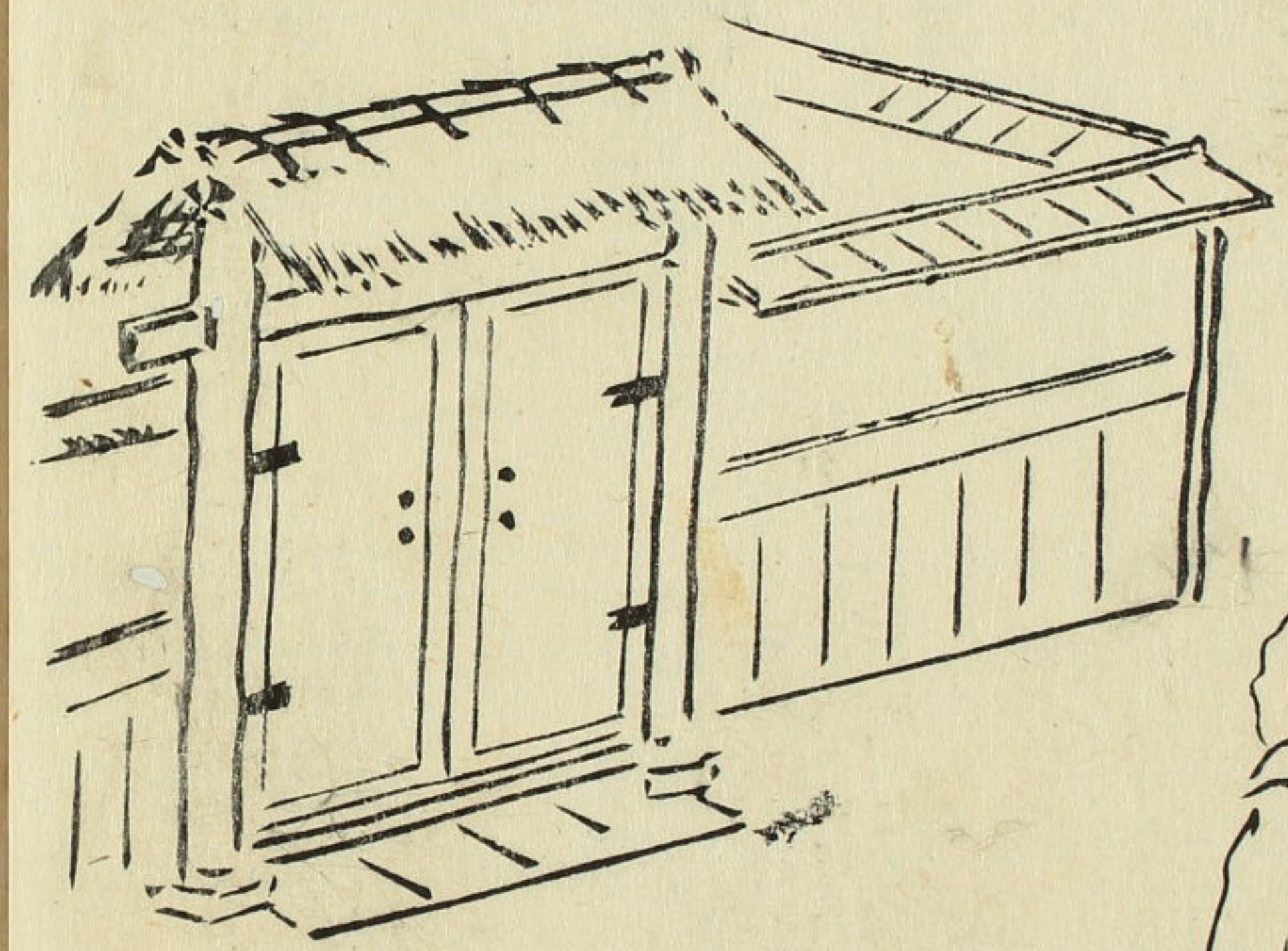
定階

白<sup>カセ</sup>買のセウ  
下り坂多つゝて

居所ノ変化

塀<sup>ヒ</sup>の門ある

五十石迄



一九

坊<sup>ボウ</sup>の<sup>ヲ</sup>定<sup>マシ</sup>メ  
タル所

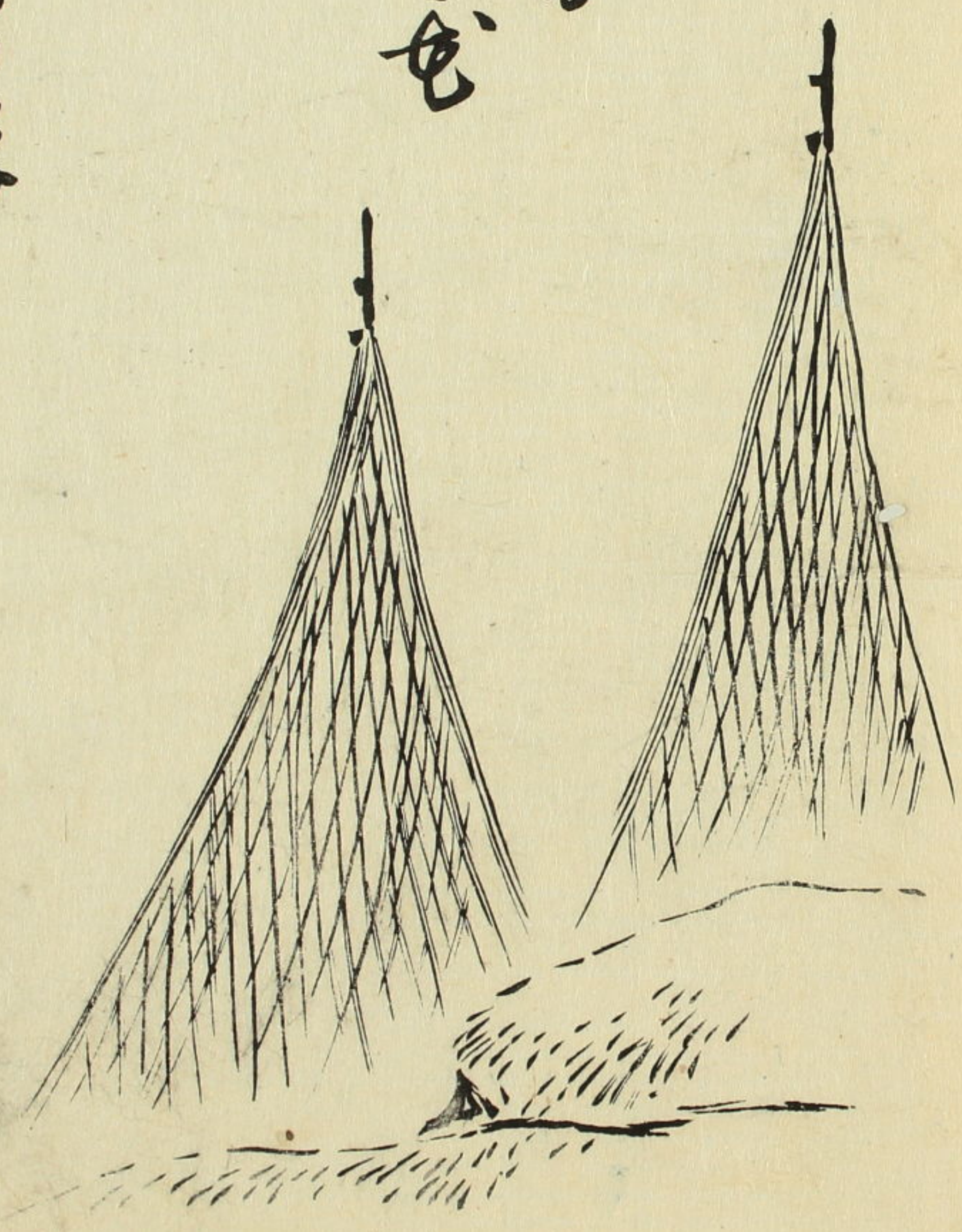
ヶ<sup>ケ</sup>島<sup>シマ</sup>此<sup>ココ</sup>御<sup>ミ</sup>恩<sup>オン</sup>也

子<sup>コ</sup>を<sup>ヲ</sup>招<sup>マツ</sup>月<sup>ツキ</sup>と<sup>ト</sup>也

伸<sup>ノビ</sup>に

袖<sup>スリーブ</sup>子<sup>コ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>の

う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>書<sup>カキ</sup>字<sup>ジ</sup>



書<sup>カキ</sup>字<sup>ジ</sup>

二十

子と鳥

坊ノ喜化

新白田の

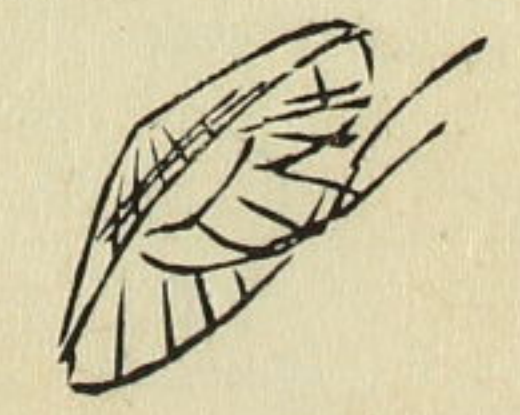
米異七おちつく

雪の上

坊ノ人ノ安

以とれ

心とれ



三

心とれ喜化ノ坊

川越の草の

水とれ



坊ノ喜化

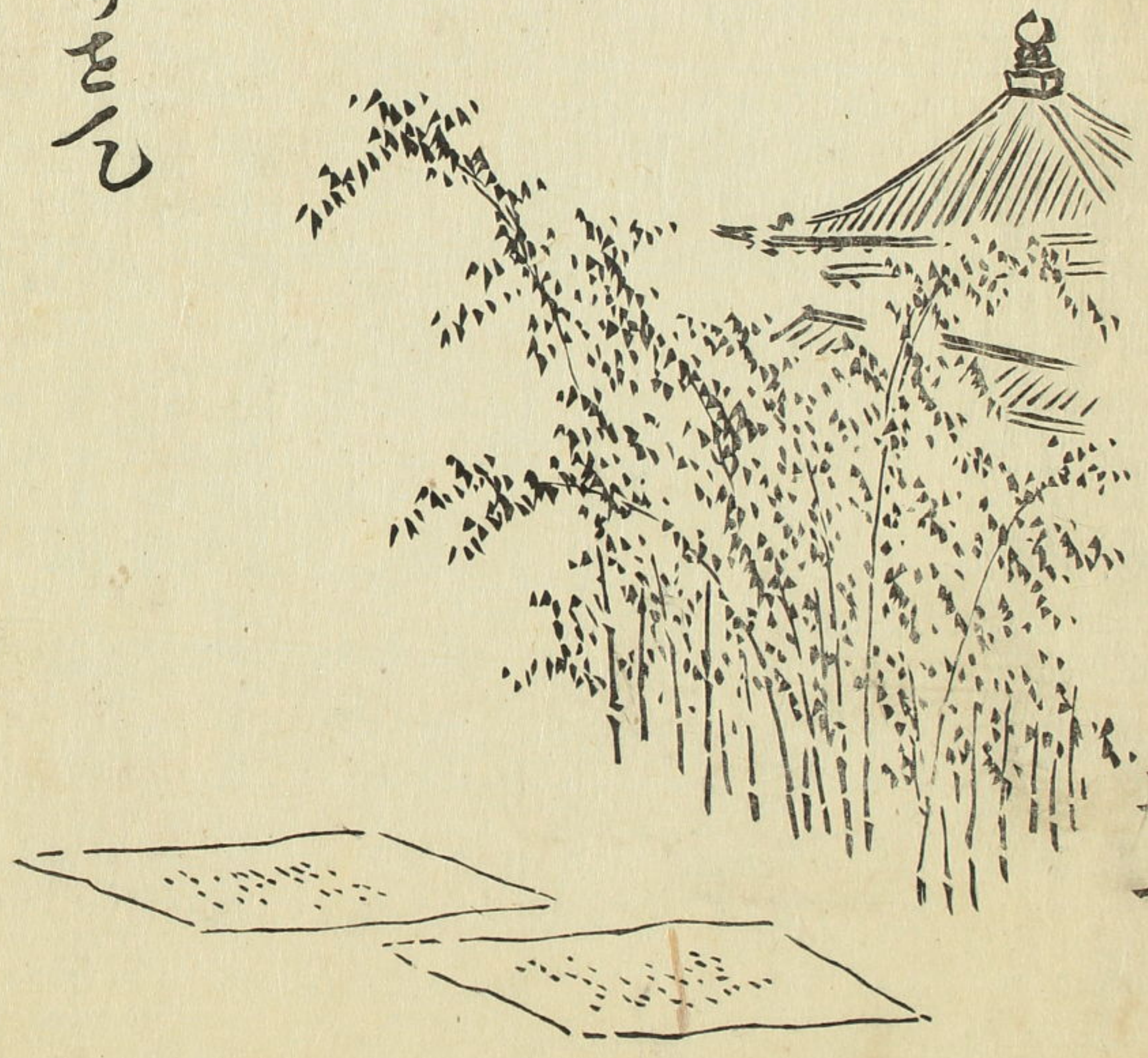
三

子... 祭

あ...  
三ノ六生田  
平地ノ坊ト  
室ノタル所

平地ノ寺也  
寺ノ名ナカ

用ノ所  
千物を日向の  
方にいさらせし



寺ノ変化  
用ノ所

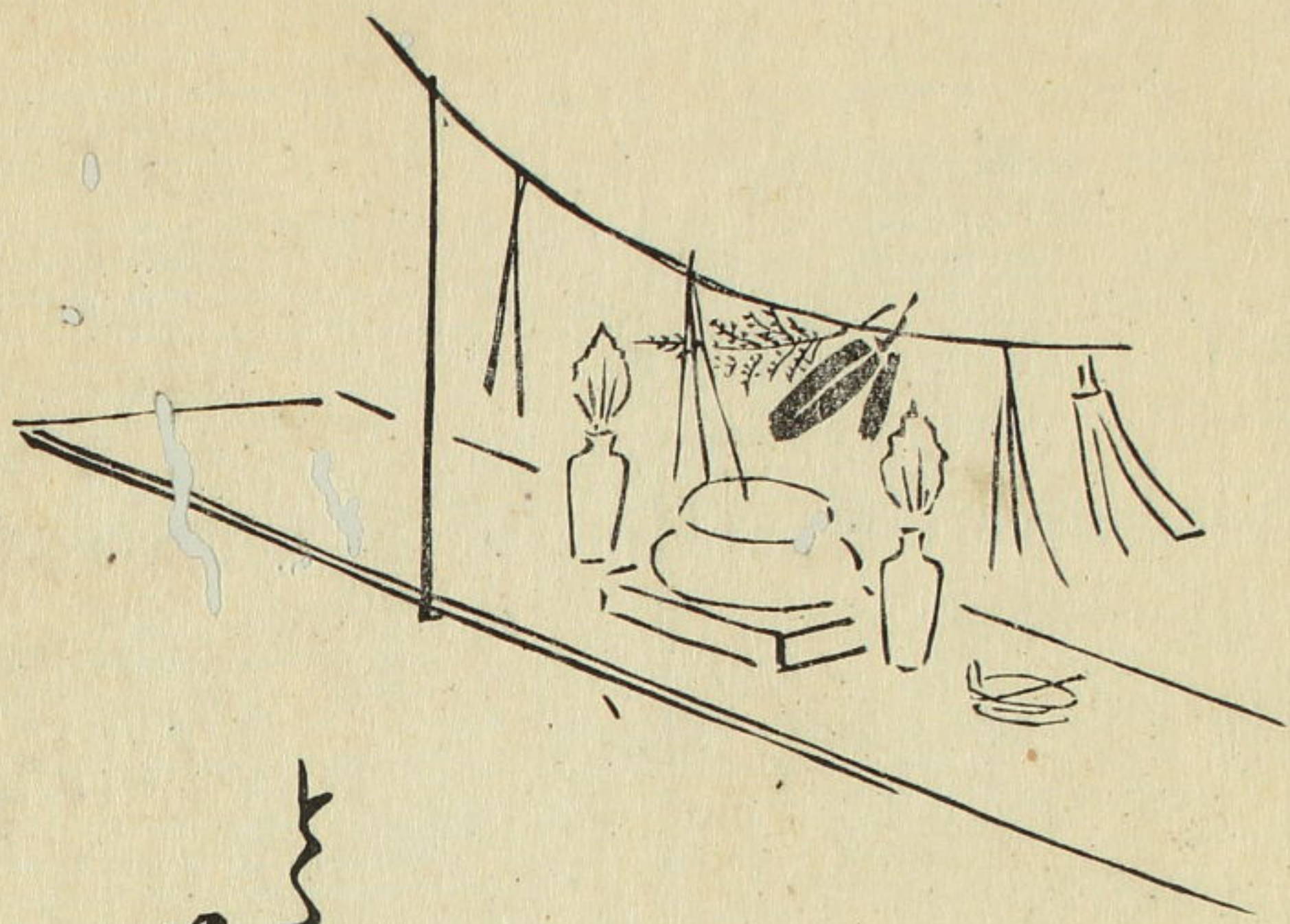
寺  
寺ノ野の  
芭蕉かとし

寺ヲ京地ニ  
室ノタル所  
公孫用子字世と  
寺ノ京住居



寺ノ京住居

子子子



肉ノ風情  
白ノ意多座

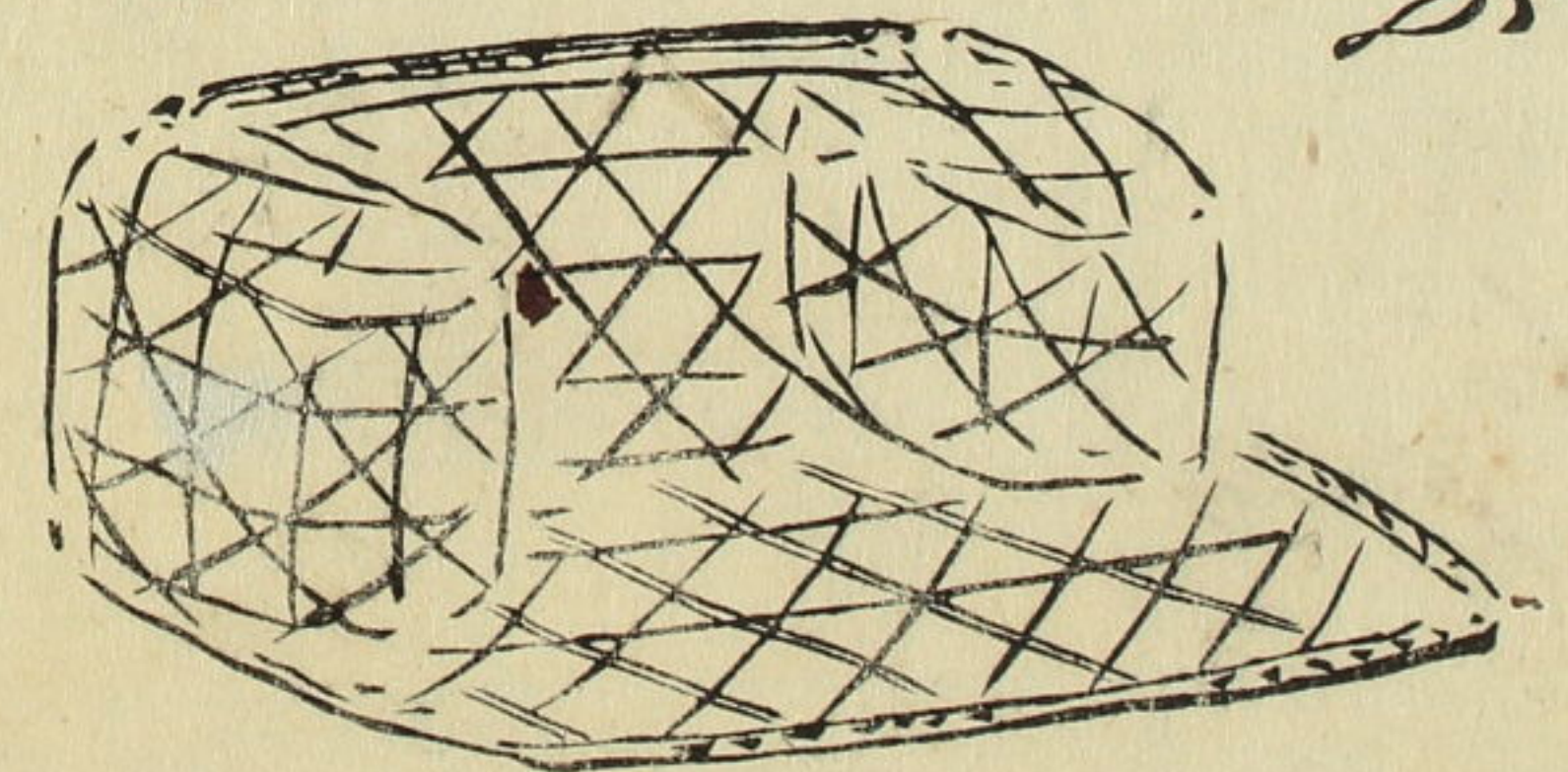
みほちぢる

娘よろこぶ

河原

とくくと  
たは日七

四ツのう



二二

武家町家  
世話ノ所

まごの好む  
状此流先

用ノ要化

中よそ  
借りの



子子子

二二



子孫

聖仁の

聖王と

森を

夕日



あまの

まよこて

たけの

坊

知

子



子孫

子孫

五子

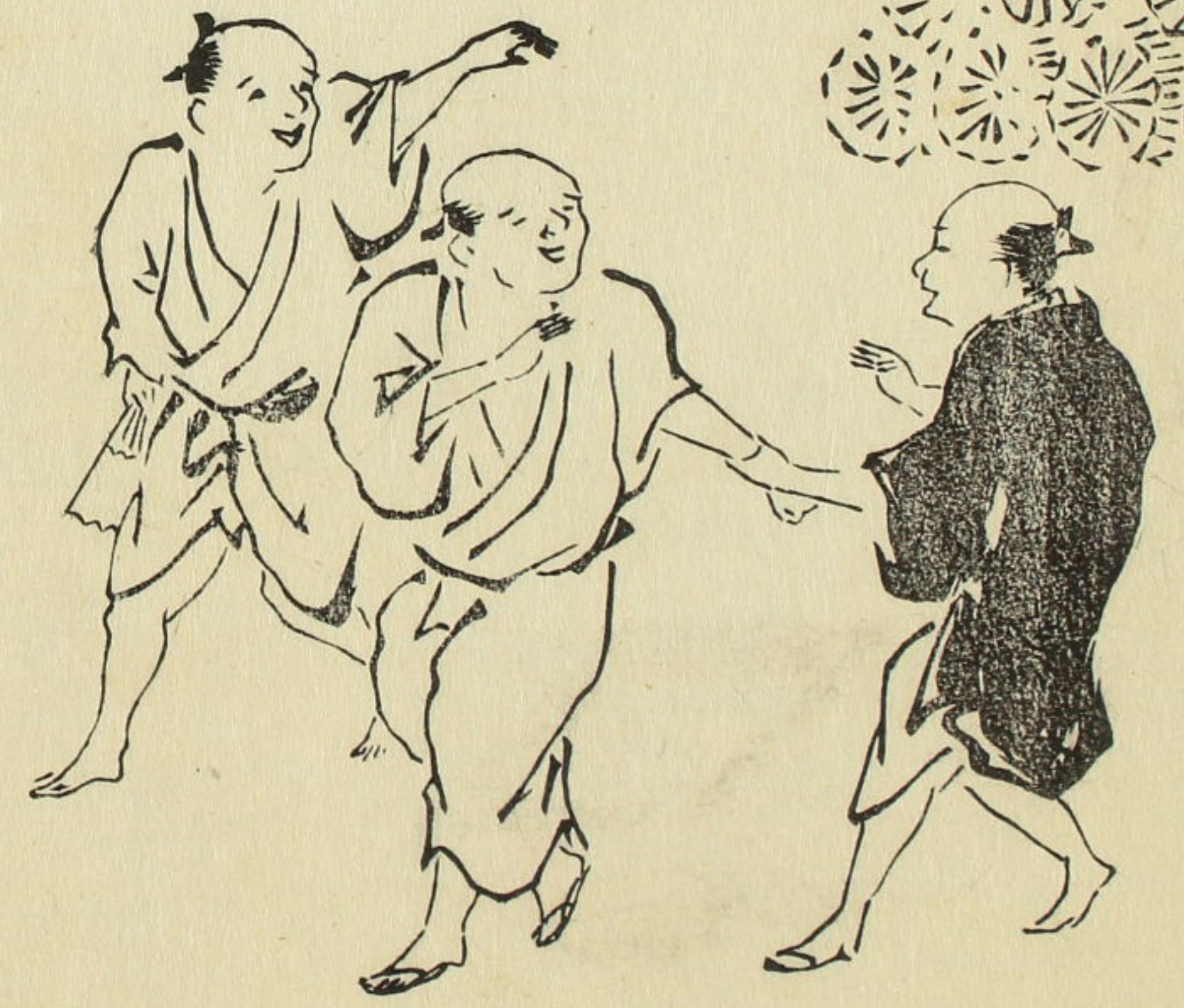
場ノ名

ち〜ち〜

茶の場場の  
川原



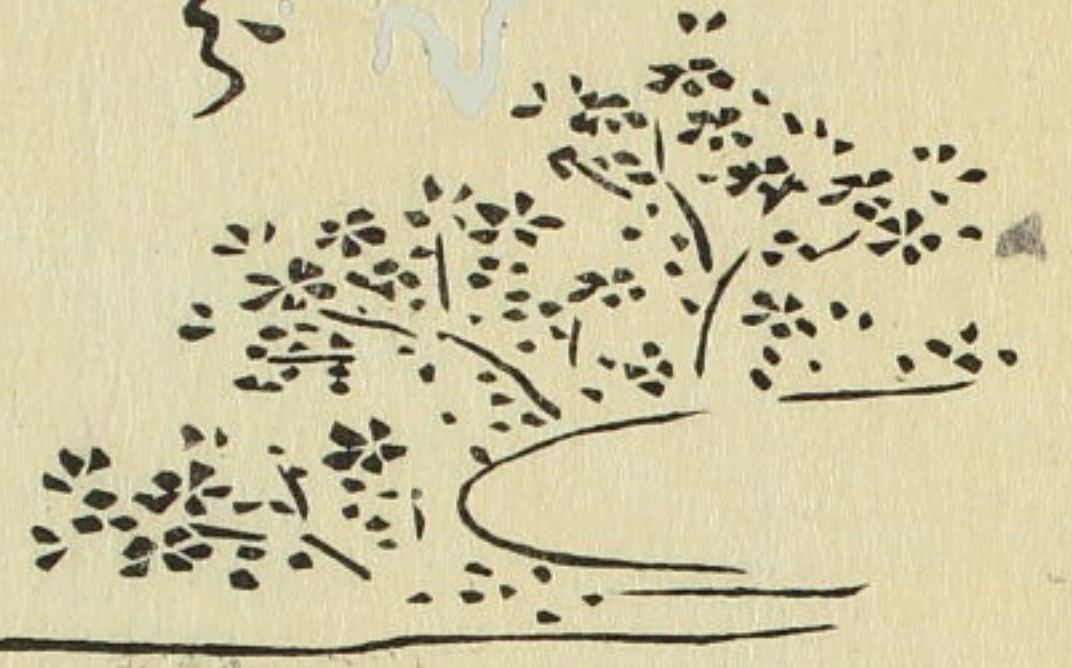
目黒川の  
連ね海流や  
場ノ名  
名所



六

河

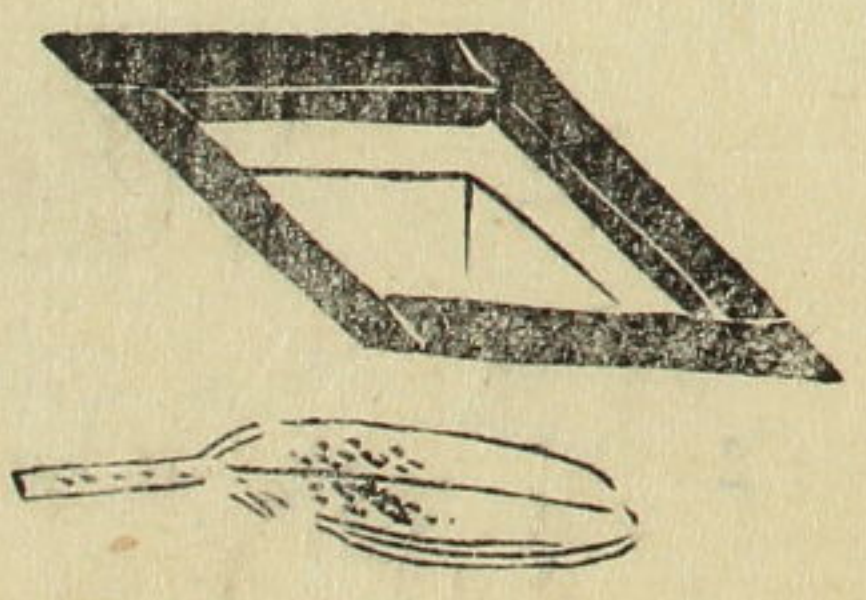
とこ  
か  
もの  
三  
中  
時



起情

揚

ふ



揚

二

振の文の有るあいきし事後梅  
 防ていやまこ時有すお  
 書通し相の小事以列して  
 行元山尔月とるる小  
 好有此餅と絶さぬ好の風  
 刻木のあよ玉のあをお

草葉  
 隆坡  
 紹夜  
 利牛  
 坡  
 葉

孫子集

二六

細の者をつまみ子孫が  
 星さつては寸八日  
 してよハ海軍にちる  
 淡丸のさる種はさめ  
 ぬきとむねとちと  
 肩羽子とる湯衣の  
 上おきの二葉刻むと  
 つるよ生ぬ日ハ内と  
 業

細<sup>カセ</sup>買のセツ下り  
 坪子門ある五十石  
 け山は俄思も手  
 助よぬくのうつ  
 新田の素異におち  
 川<sup>ナ</sup>の草しの水  
 平地の古れ  
 業

長...

予約を日向の方へいささき  
 隨生を野に苞をさくし  
 美其用か海世をさるる衆  
 又ゆほちよ娘 産  
 ときとちありし口の子  
 此守のぬむ林の縁先  
 中よるも胡堂合に借い  
 願をさよして振るる多  
 葉 披 牛 鹿 披 葉

予  
 予をさくし野に苞をさくし  
 隨生を野に苞をさくし  
 美其用か海世をさるる衆  
 又ゆほちよ娘 産  
 ときとちありし口の子  
 此守のぬむ林の縁先  
 中よるも胡堂合に借い  
 願をさよして振るる多  
 葉 披 牛 鹿 披 葉

子子集

子孫

二

芥焼ハ作

すす湯の田井此  
ゆ氷ハ用ノ河シ

芥焼

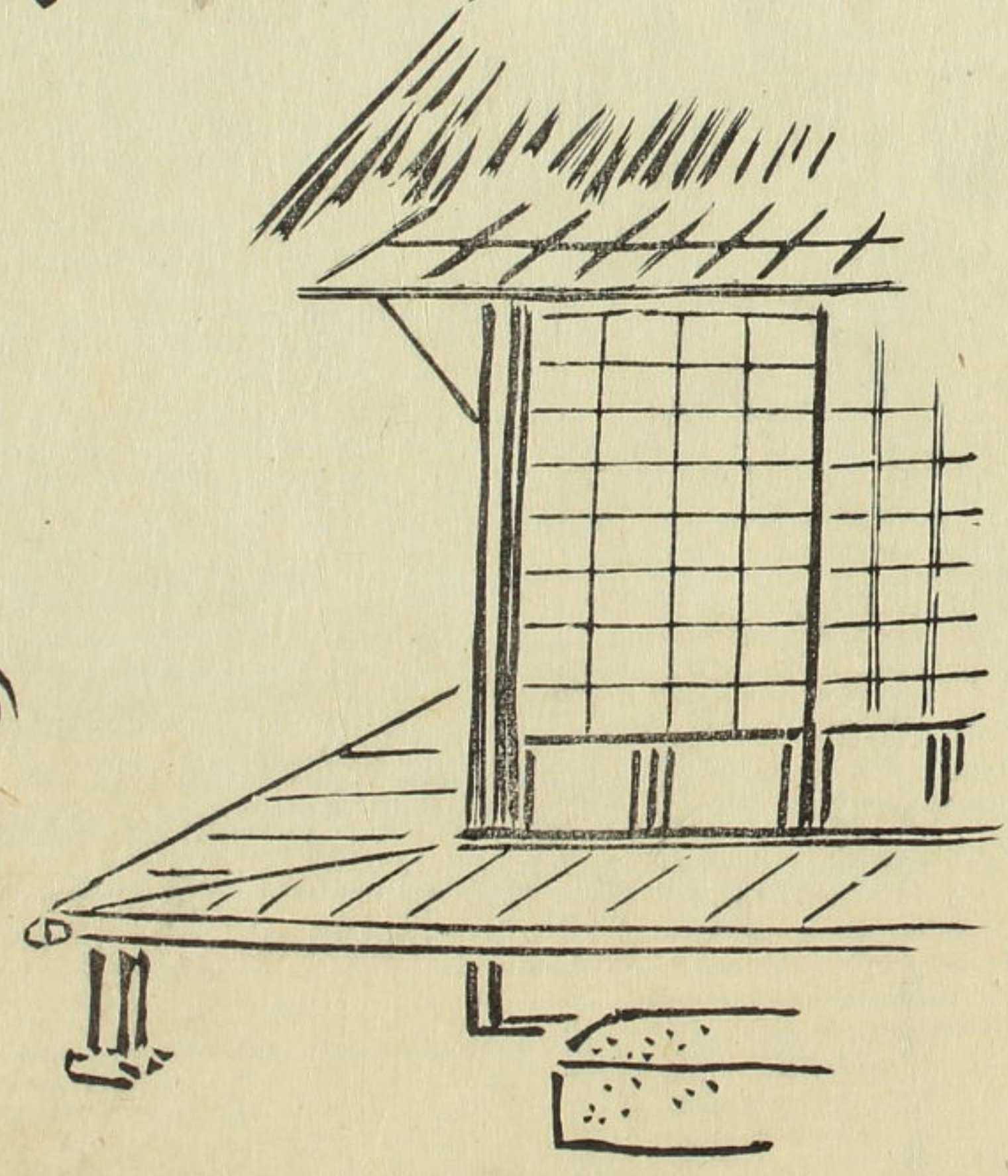
まを湯の田井此

ゆ氷

腰弁原屋書

心大平も

卯うむ



二五

孫 孫 哥

才三 一 轉 様

穢 下 と 紛 と 古 子

し ろ 五 五

唐 衣 の 変 化

お け 涼 甚 重 衣 の

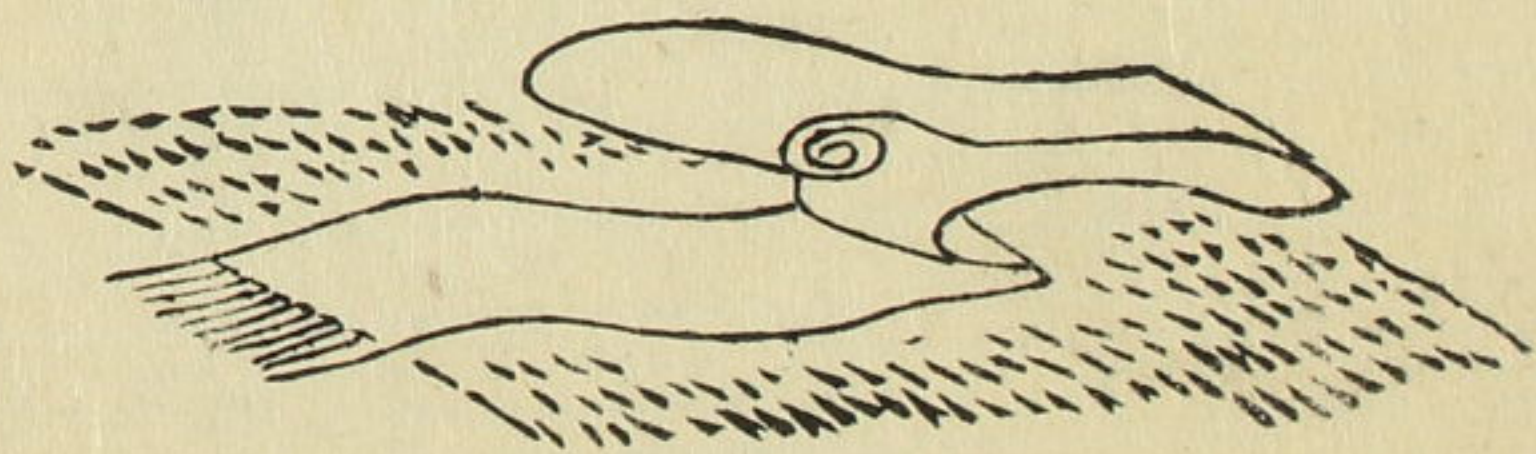
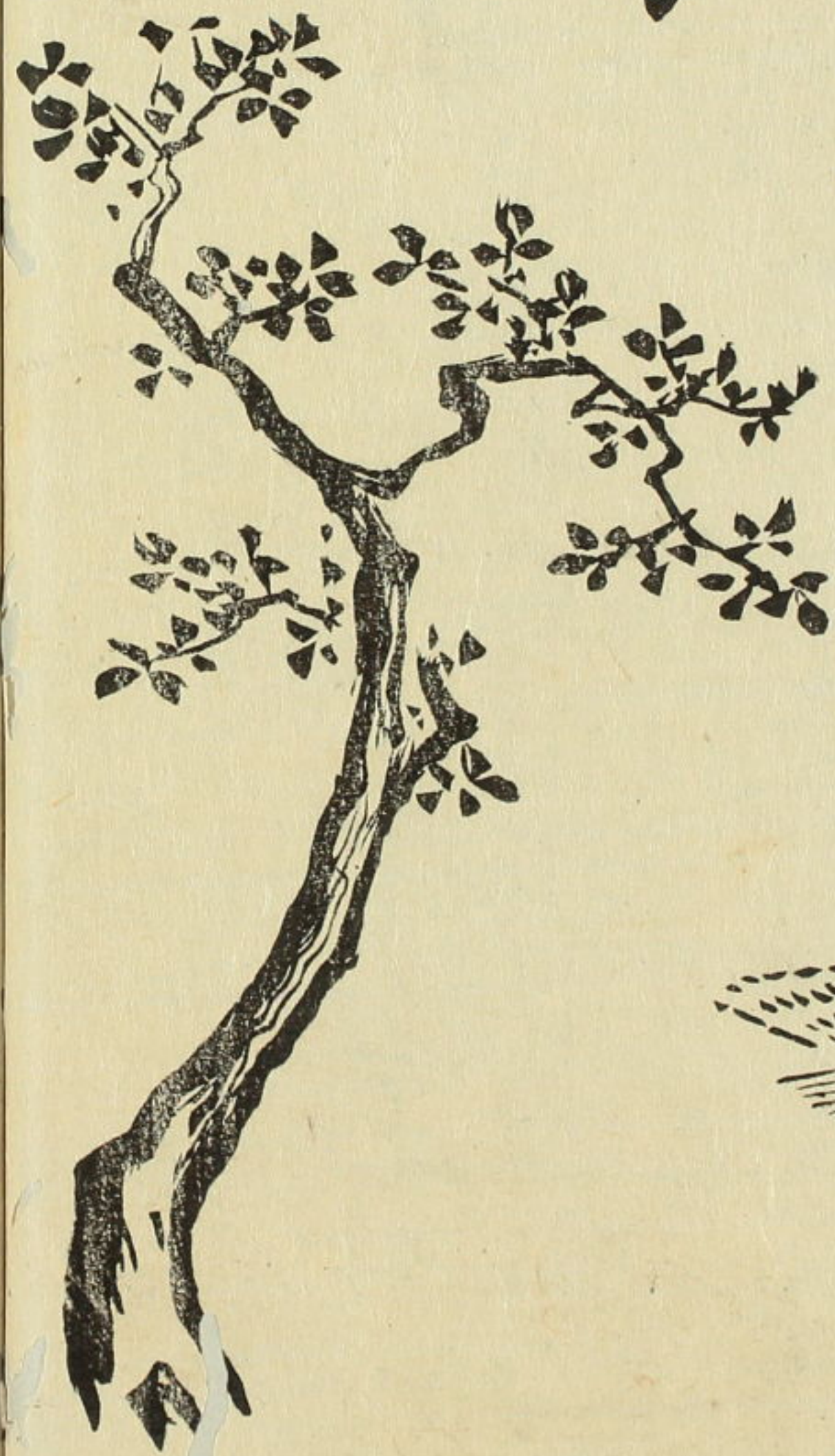
柿 如 木

あ ぐ の 風 情

月 夜

縮 懐 此

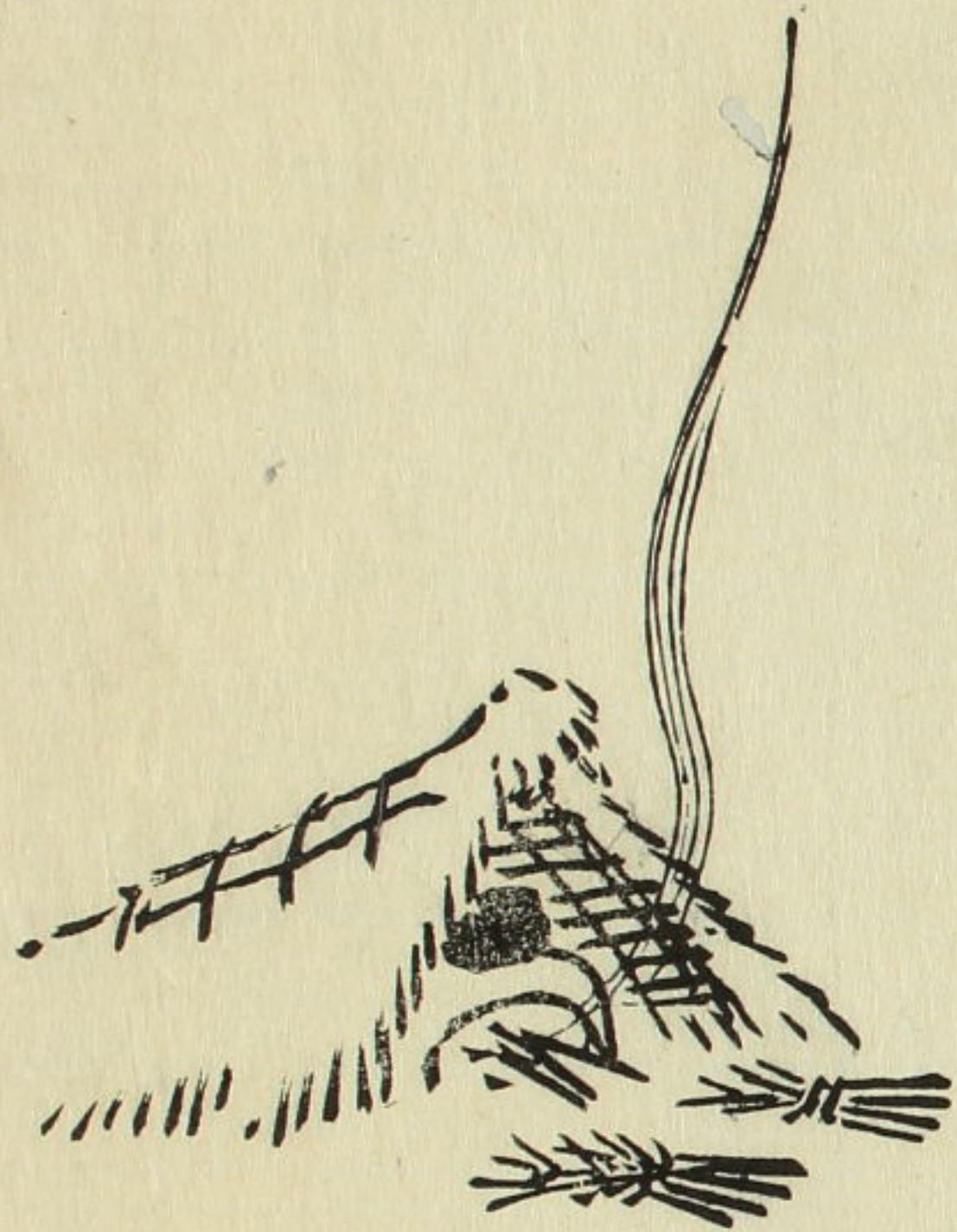
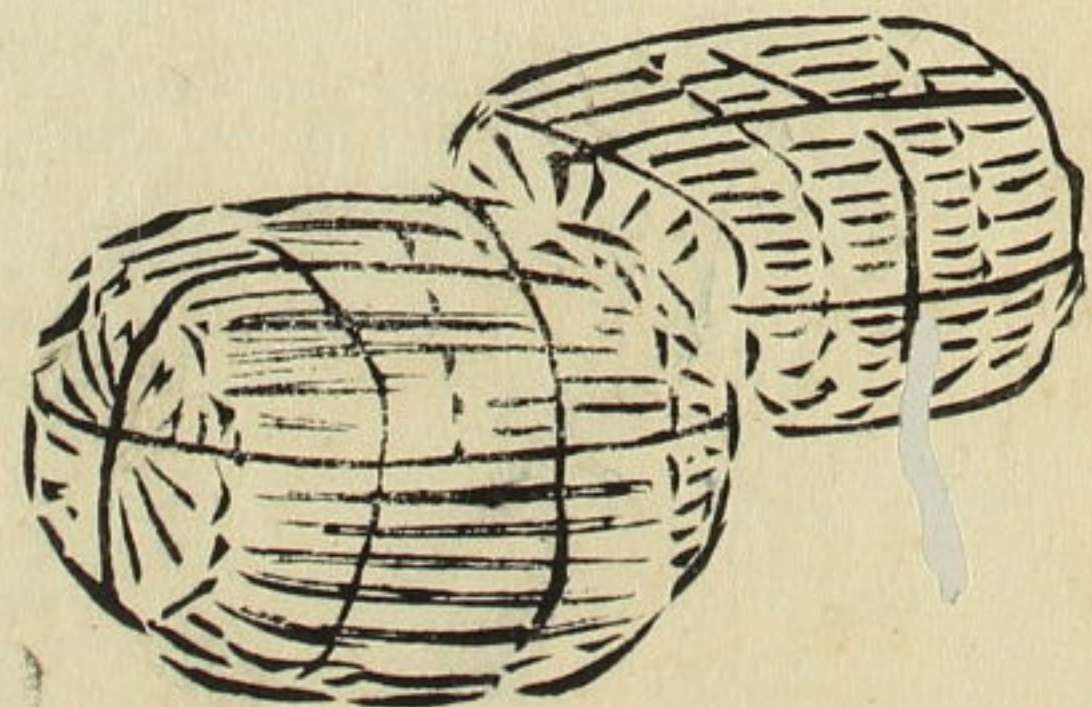
醒 々



竹 田 の 変 化

け 心 半 七

又 々 ぬ ぬ 方



孫 孫 哥

才 三 一 轉 様

記情

かあまおの小村  
証をとよみ入

まま化

場

梅の山

末子

住連

三原

あま

おくれ旭の

娘



坊ノ  
閑

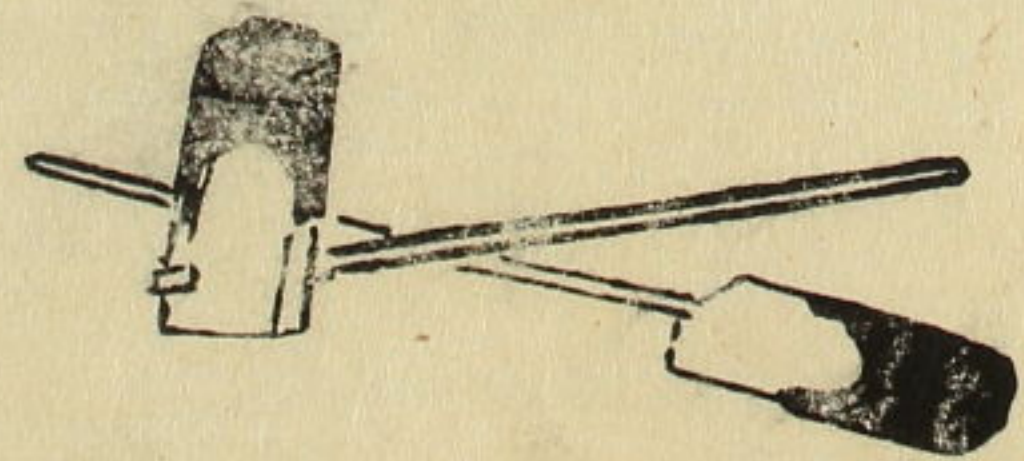
娘  
閑

なめ

坊ノ

日

吸

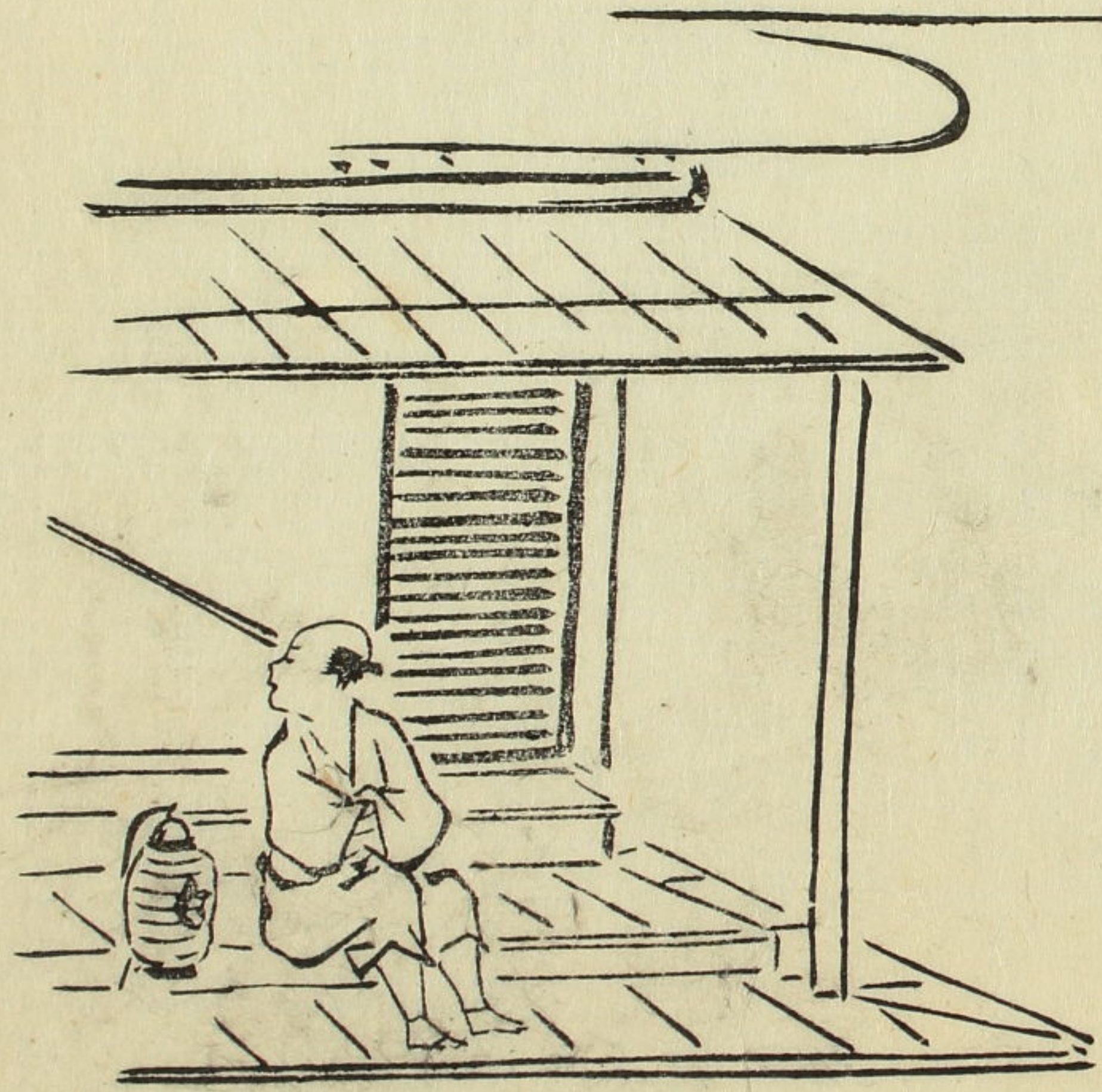




和代ノ家化  
和田秩父也  
正ノリ 若葉



内ニ入タル家化  
掛  
詞とある



疎疎

掛乞ノ夢化

余不より暗き

月此枝お戸

昔ノ人

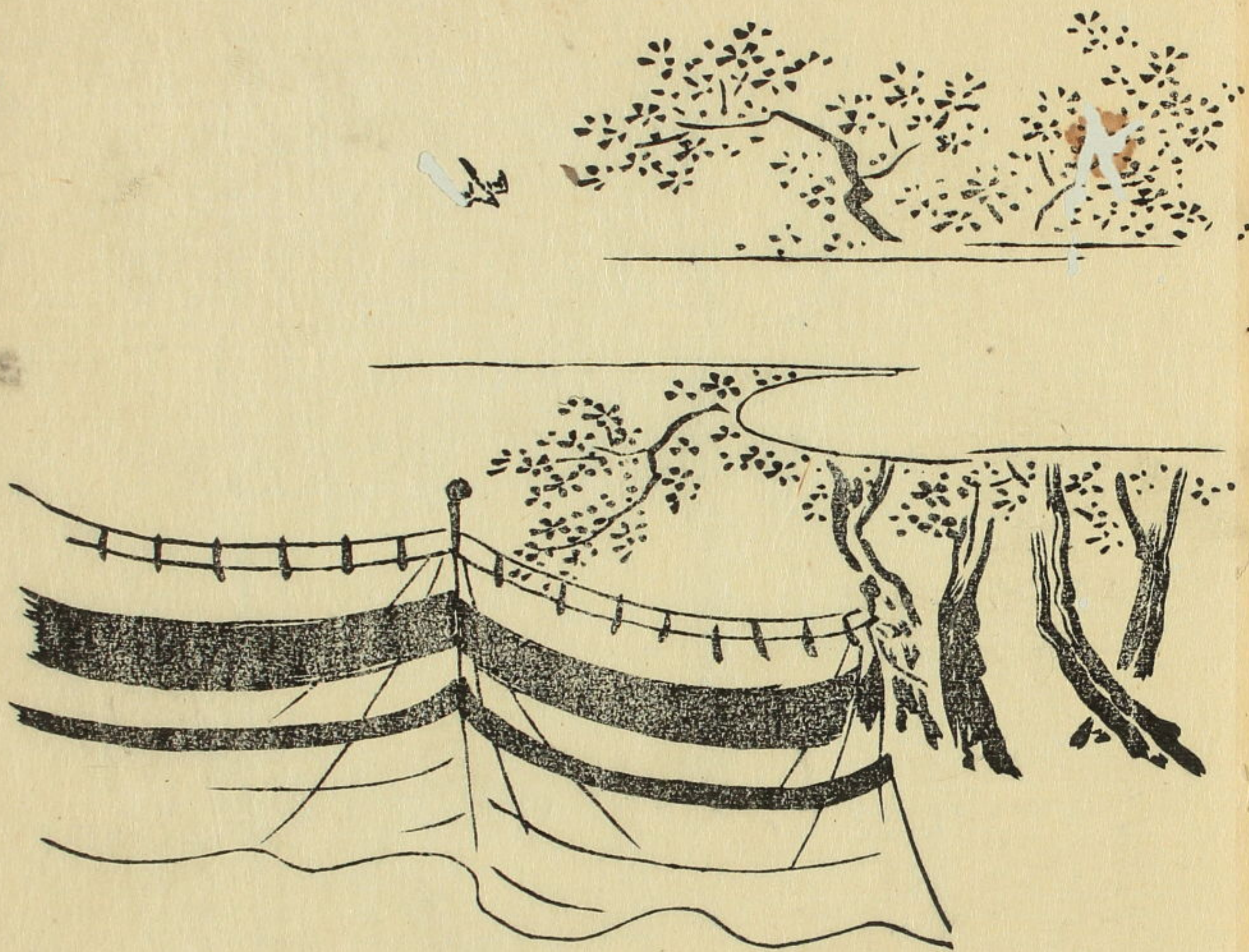
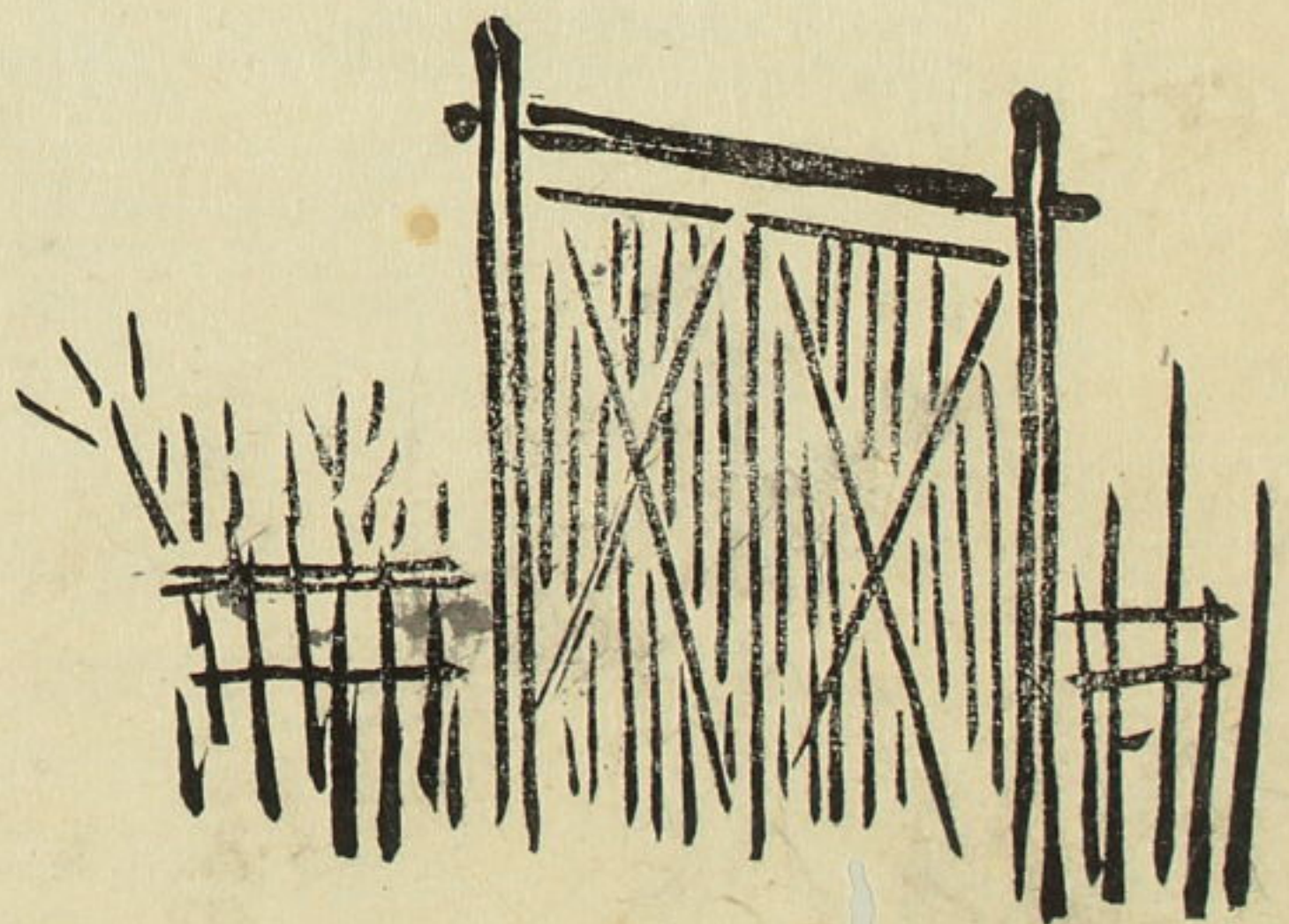
虫とりとまゝ

結年の唐草

坊勿

松心若心

念仏此



坊勿

用ノ所

破筆電片

くめぬ

さるの書

三三

三三

三三

三三

破るまで、変化

さきまら

まをこころと

根束をこ

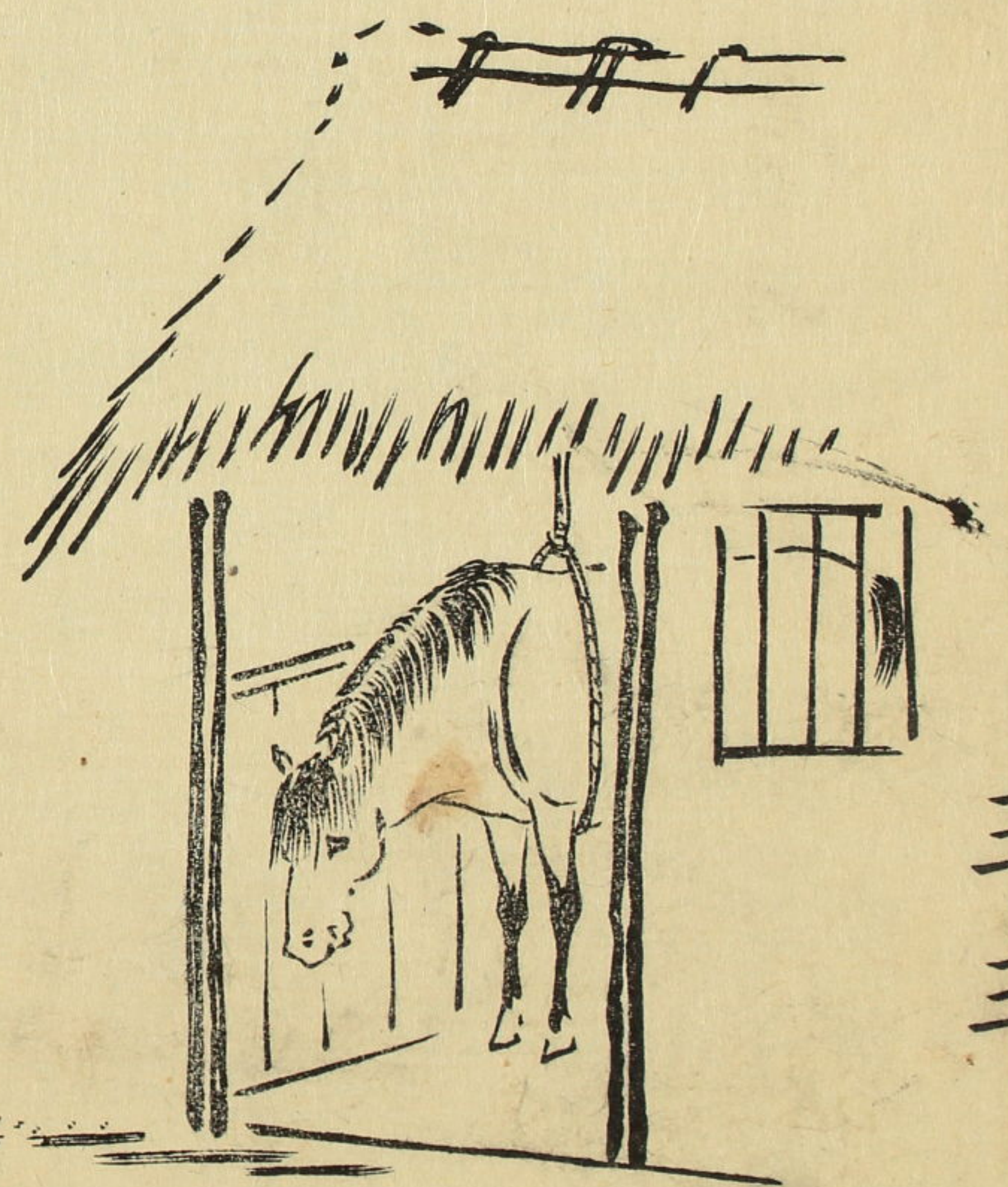
、ま内ノ用ノ侍

日記つまじし

一帖の紙

子子

三三



日記、変化

根束をこ

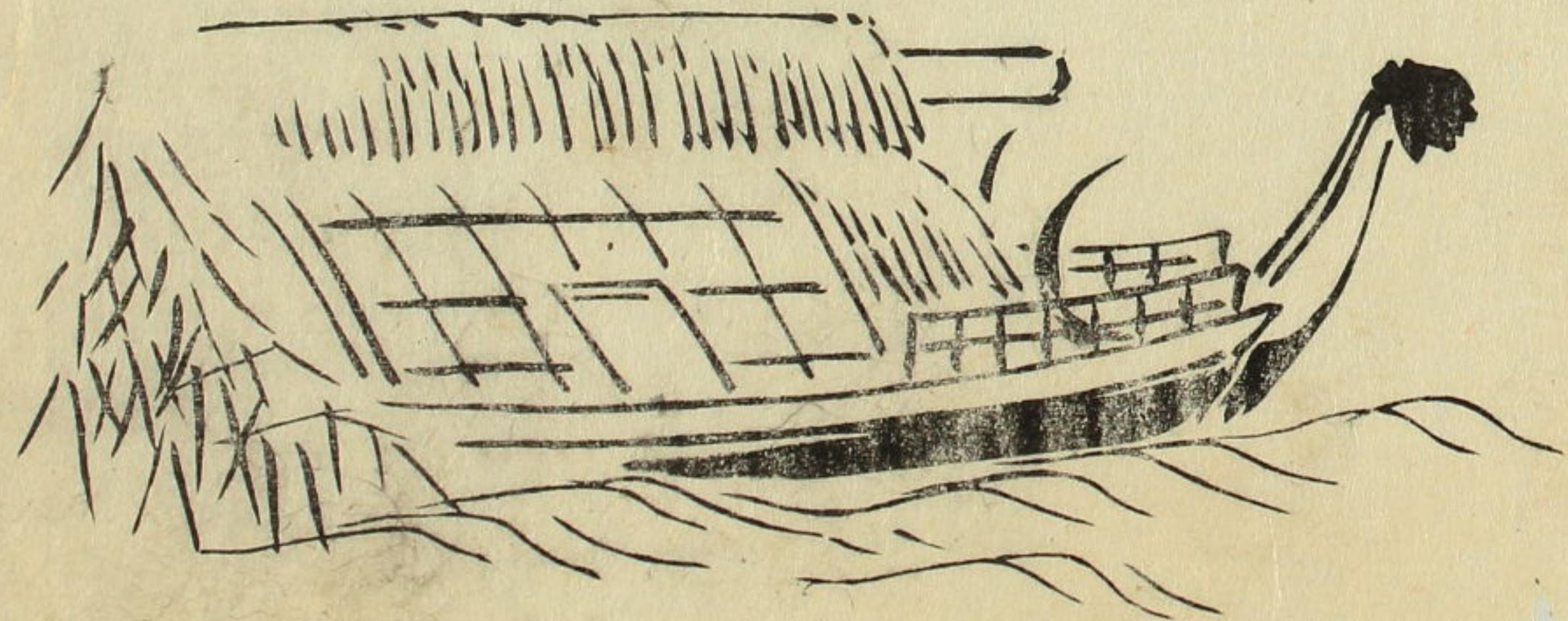
まをこころと

船白

まの商人トエテ向侍

名張とかせく

あまの廣山



船白

三三

廣島山ノ赤化  
世話ノ所

音信ト

アトモ

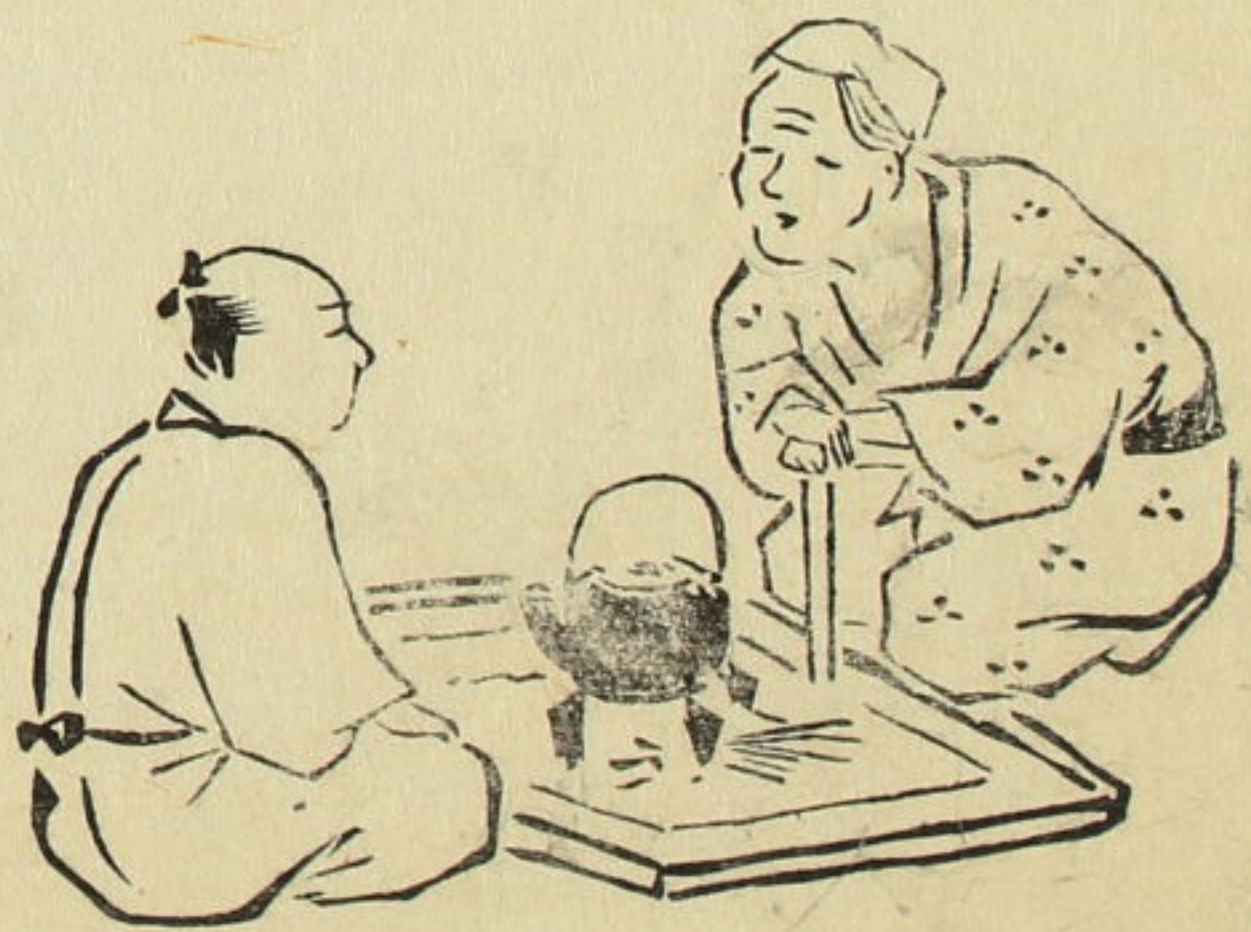
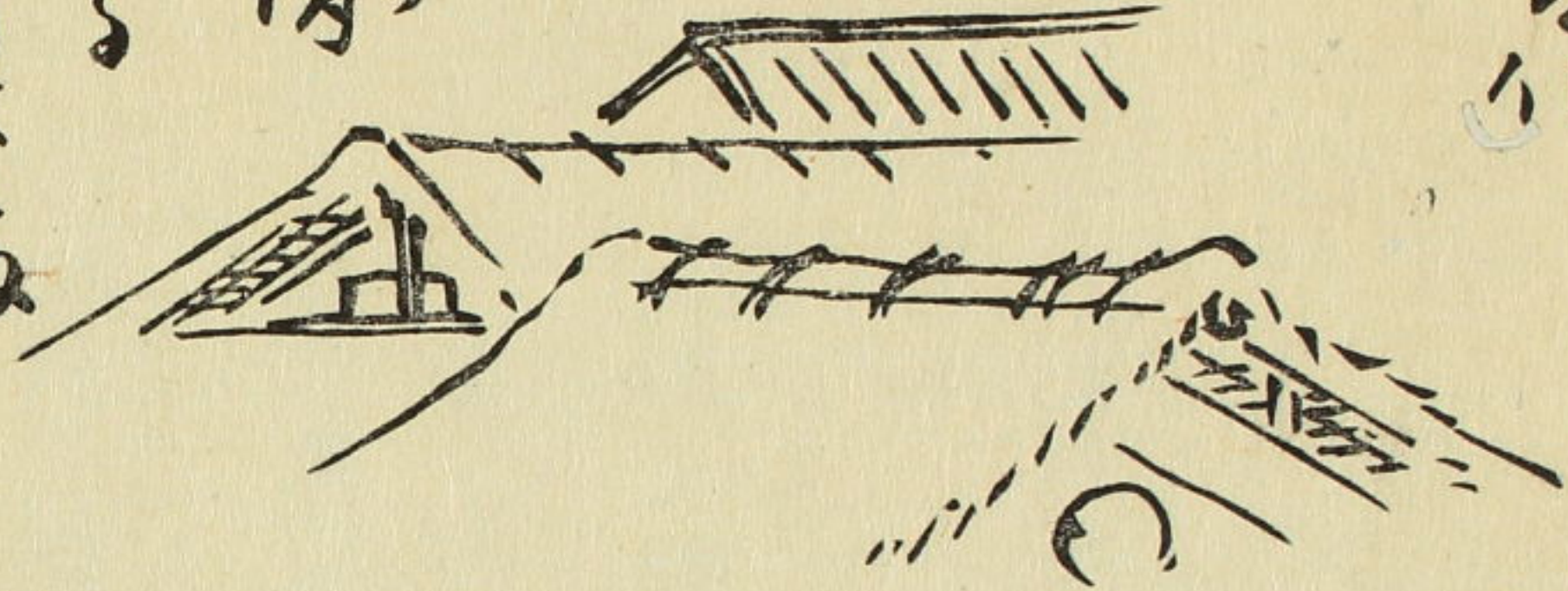
伯母

懐

アノ又出シノ  
所

元来

酒の奥



アノ世話ノ所  
シキ  
懐

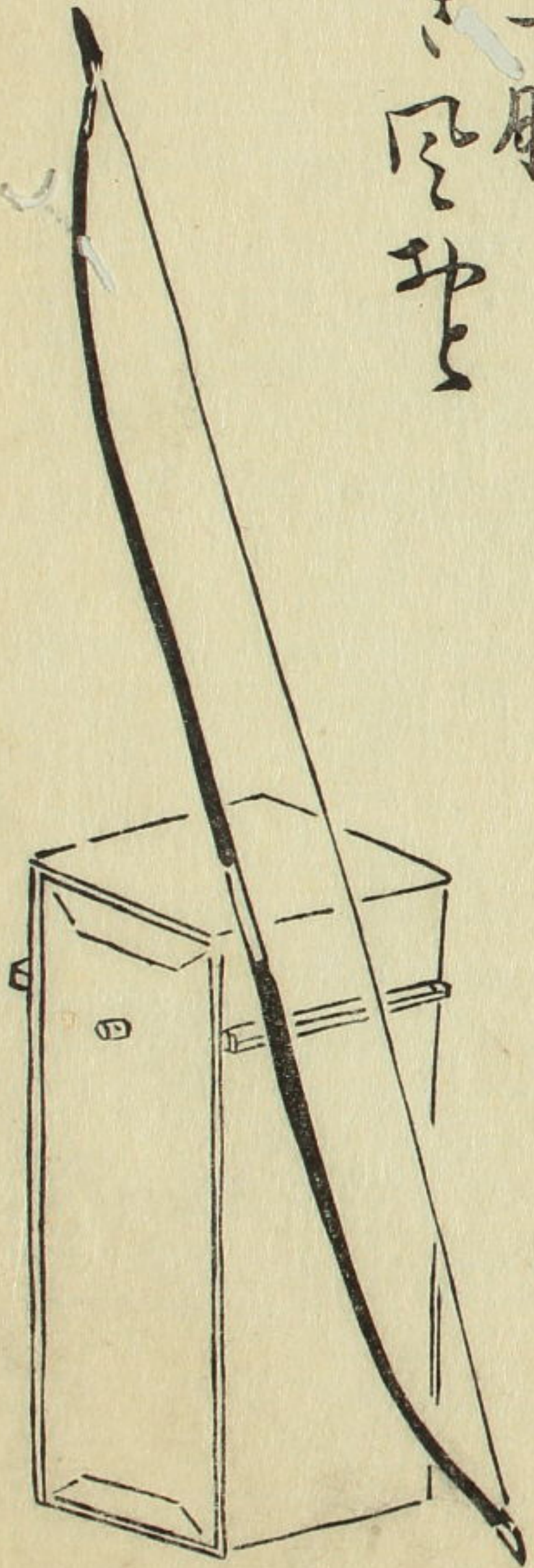
結



赤化武家

赤化武家

赤化武家



赤化武家

三二

子子

世の知身ハ男ハ始テ  
来タルヲ云

世の知身ト  
何法ニまよ  
よまかいと

古代ニ流る一  
際方

うき名と  
辰のちて  
悪

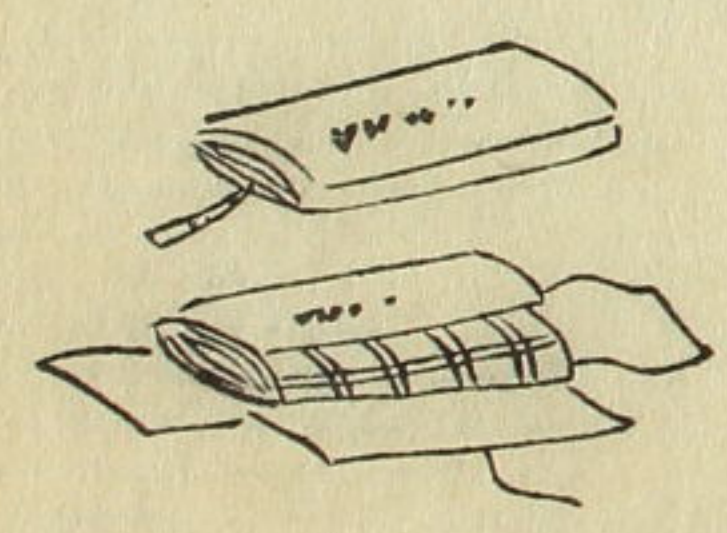
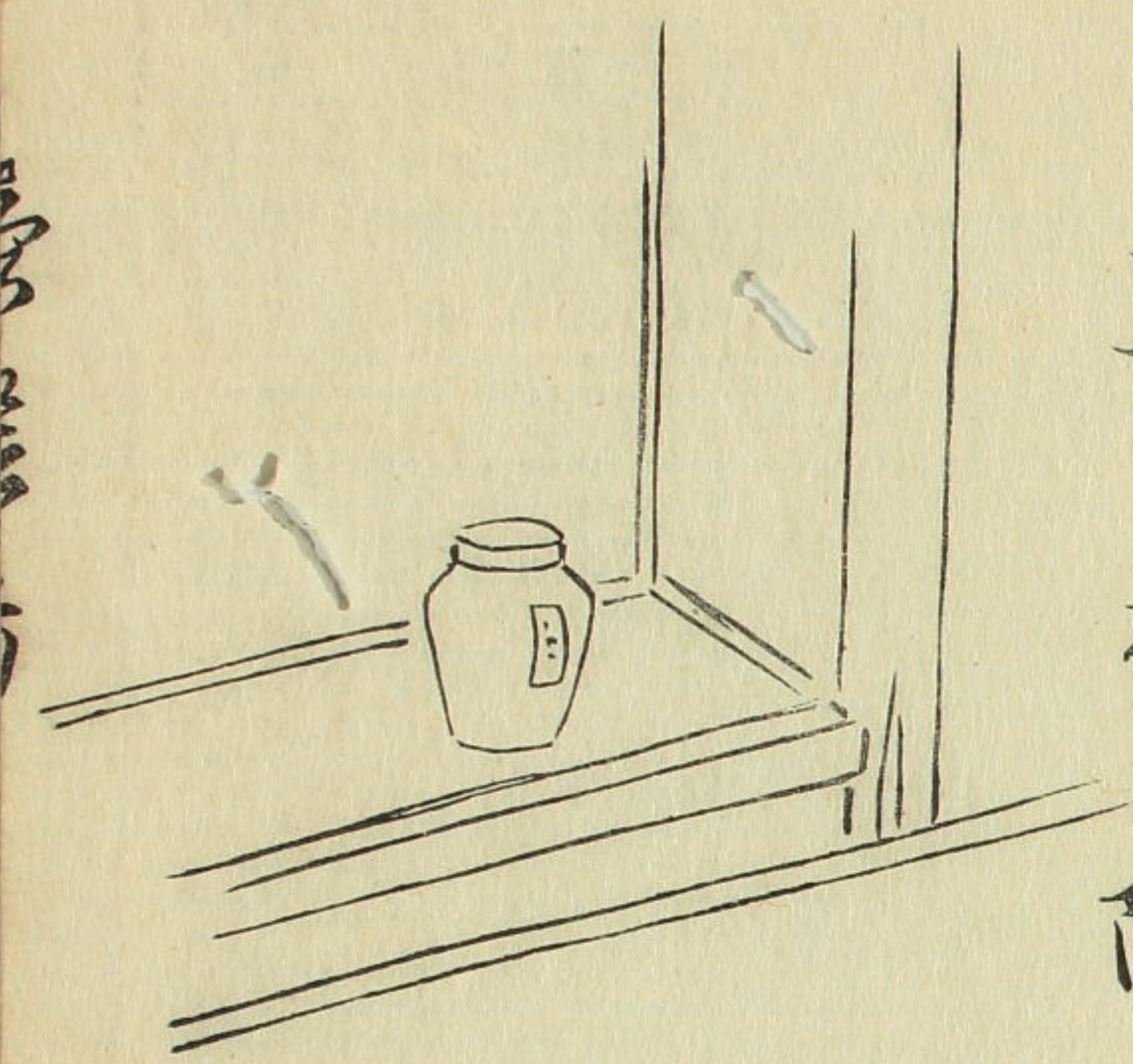


三十一

変化市ノ風情

よハ行と樽瓶と  
笑うて後や

内ノ風情  
茶茶茶ととと茶の片隅



茶茶茶

三十二

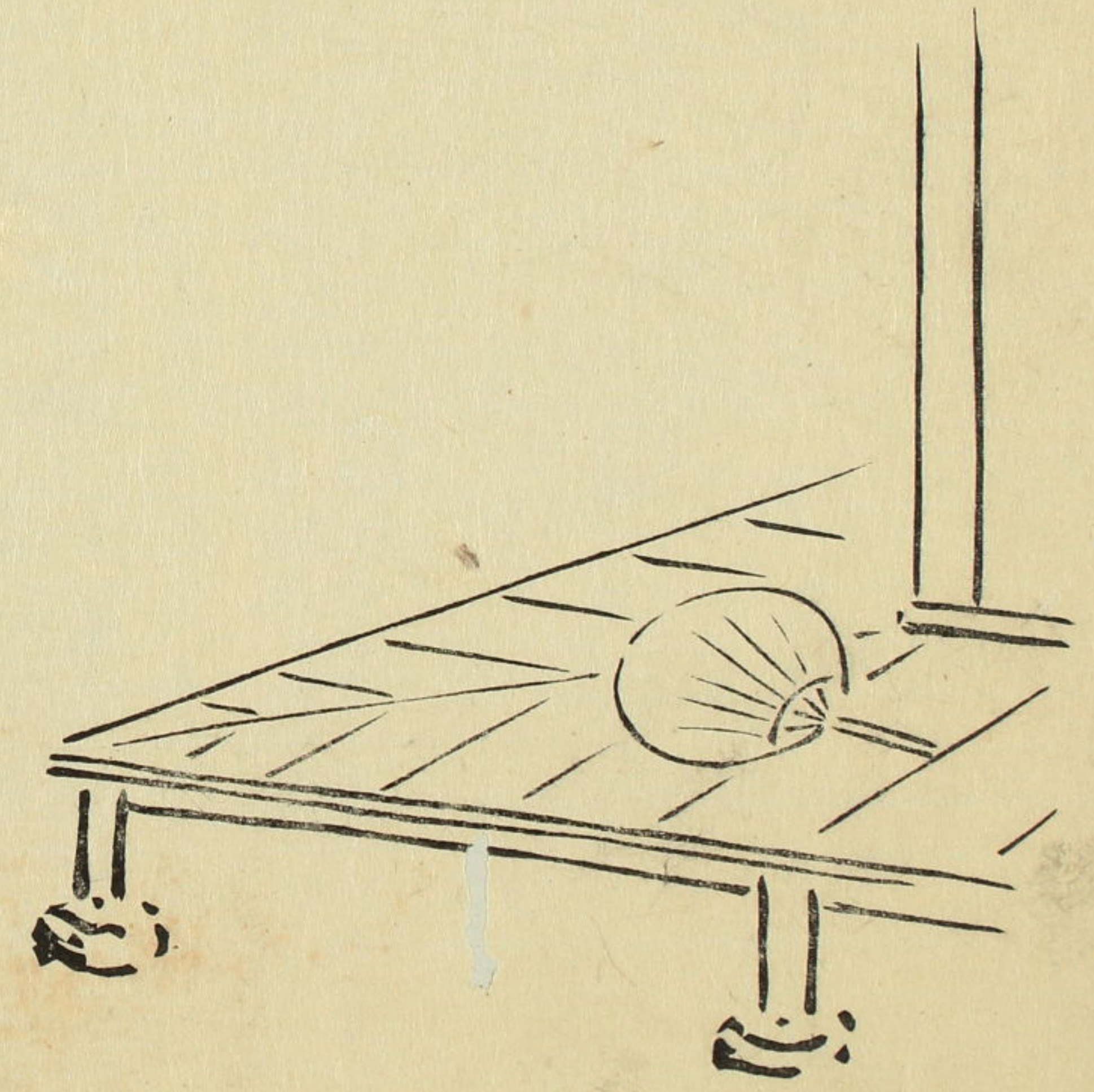
子孫

用ノ侍

ほろあは

すゝまよと好おと

初かけと



志家化四馬様

湖水も志らむ

瀬田の船かゝる

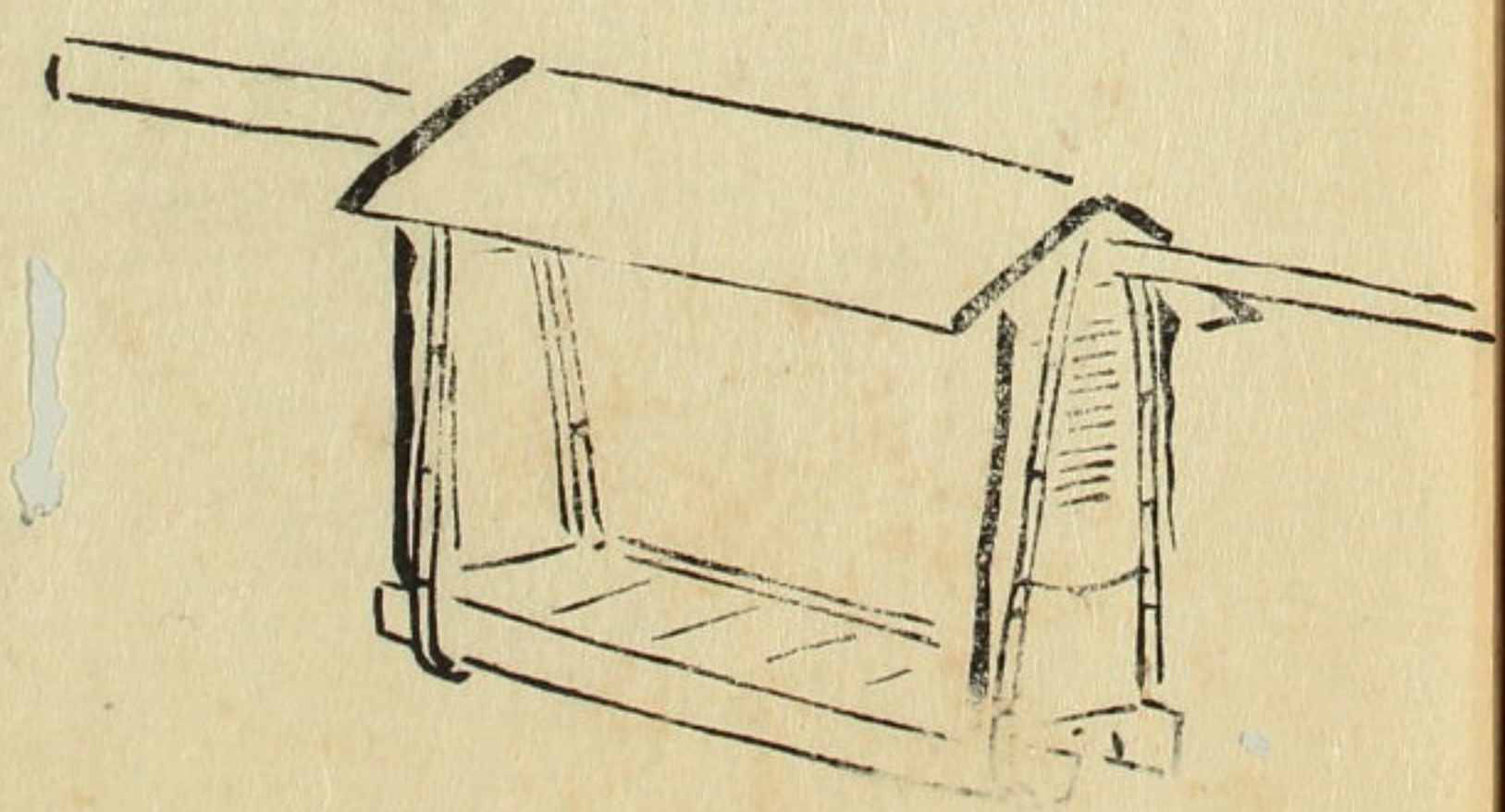
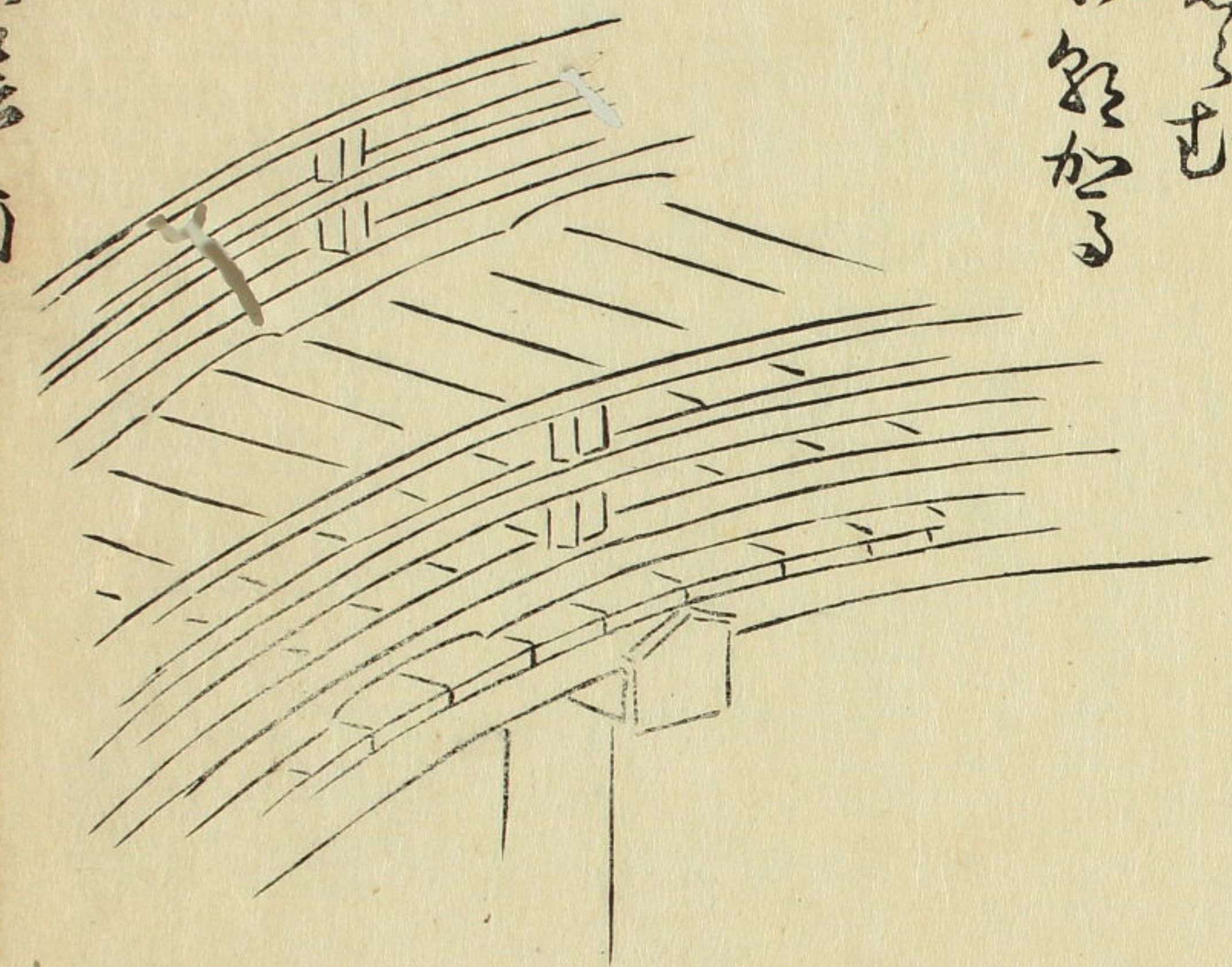
伸に

志家の

上子

志家の

こゝろくと



志家の

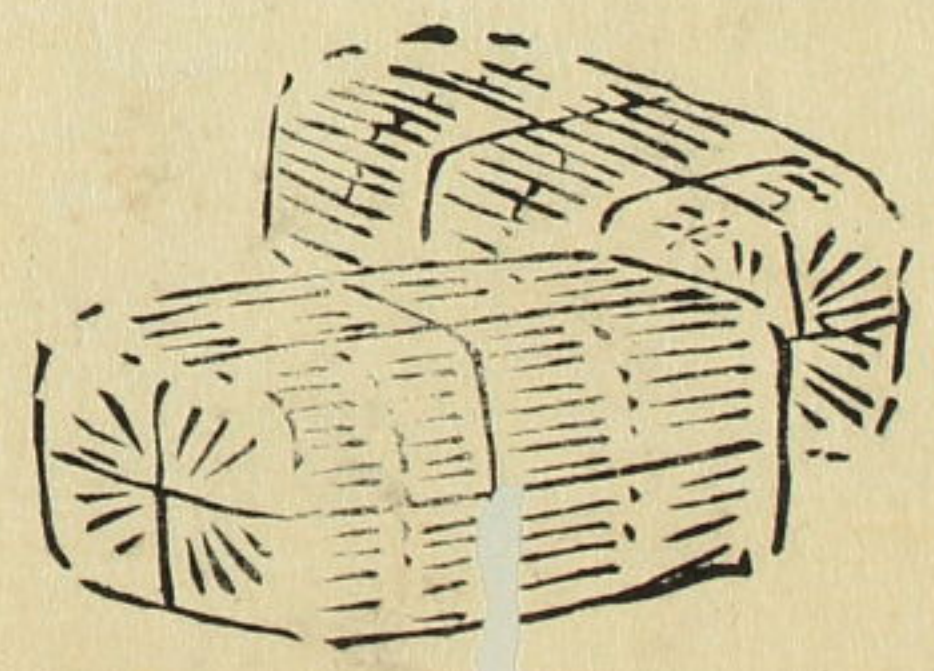
志家の

子孫

起博商人

儀北

草掛



坊、安

杉木子孫

町



子孫の



あまの  
きり  
若松極る  
天神の  
ま

芥焼くまを輪の田井の神水 芭蕉  
笑ふもまきし 卯うむ 権 留子  
獄下も緒と芭蕉のしるをを 涼葉  
朽く涼むまの柿如木 葉  
清月お頼儀此醒く 子  
山くま 牛も及ぬる者 葉

漢書

三五



高野お此小村に証とくふ入 葉  
松の木に末お跡に連飛 子  
あさきお土くろの塚の娘く 葉  
塚を洞きよなる石原 葉  
日笠と跡子叫留松さきえ 子  
和田孫父とくしりる若葉 葉  
樹乞に來ては門をあゝはさ 葉  
余心より暗さる此村の戸 子

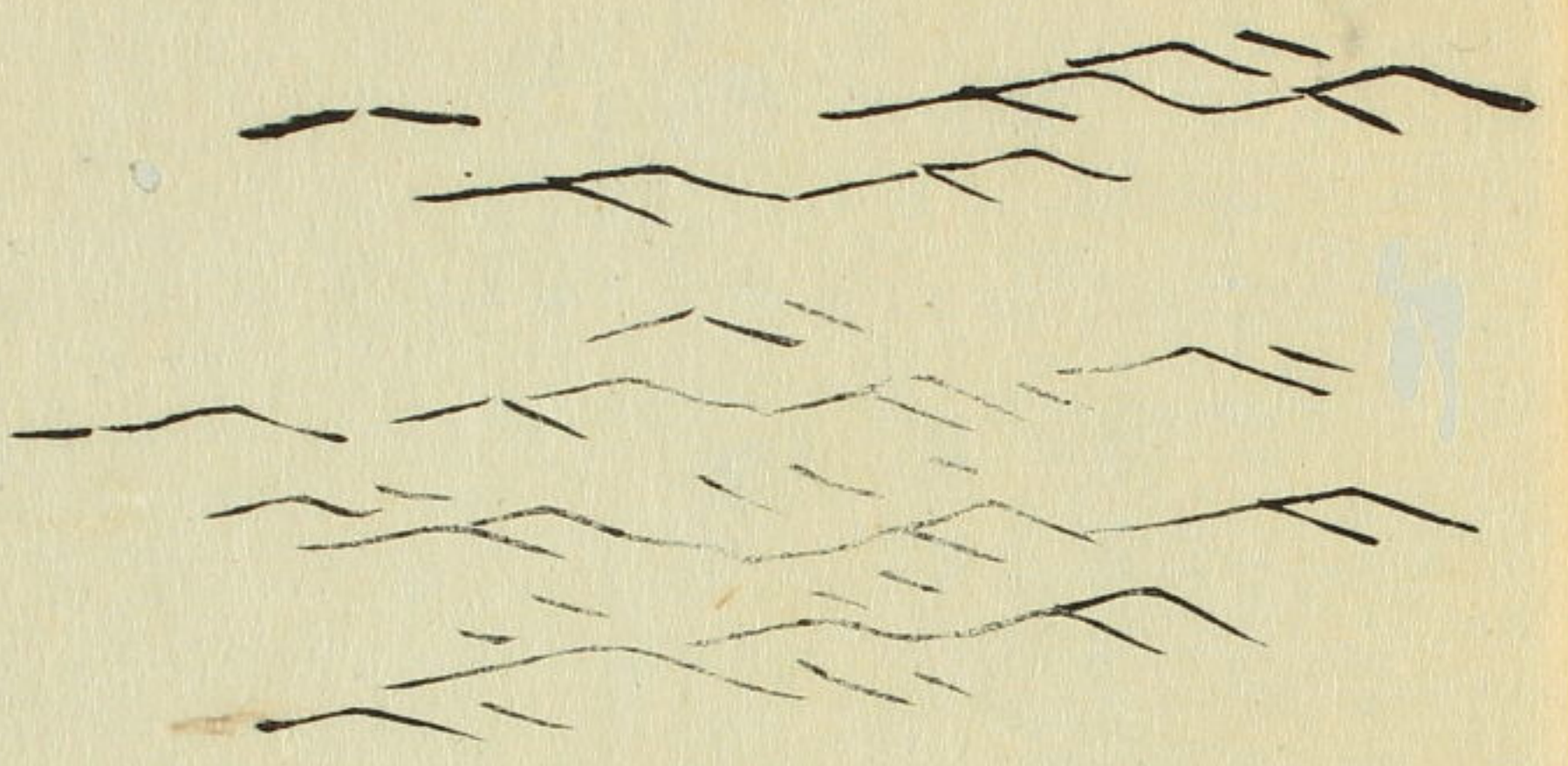
虫とりとくしそは野の屋をて 葉  
松も竹も七念佛にきこ 葉  
角めを松今しきと女の傍 子  
破筆とらさめいする此の 葉  
雪と玉の森をへるに後葉を 葉  
日記つよきり一帖の余 葉  
松拾やもよむ此松伯 子  
公孫とかせくお龍に若葉 葉

高野お此小村に証とくふ入 葉  
四十一



子孫

四



其尔  
山  
君



昭  
北下

...

...

子子

才三一持

いりのを

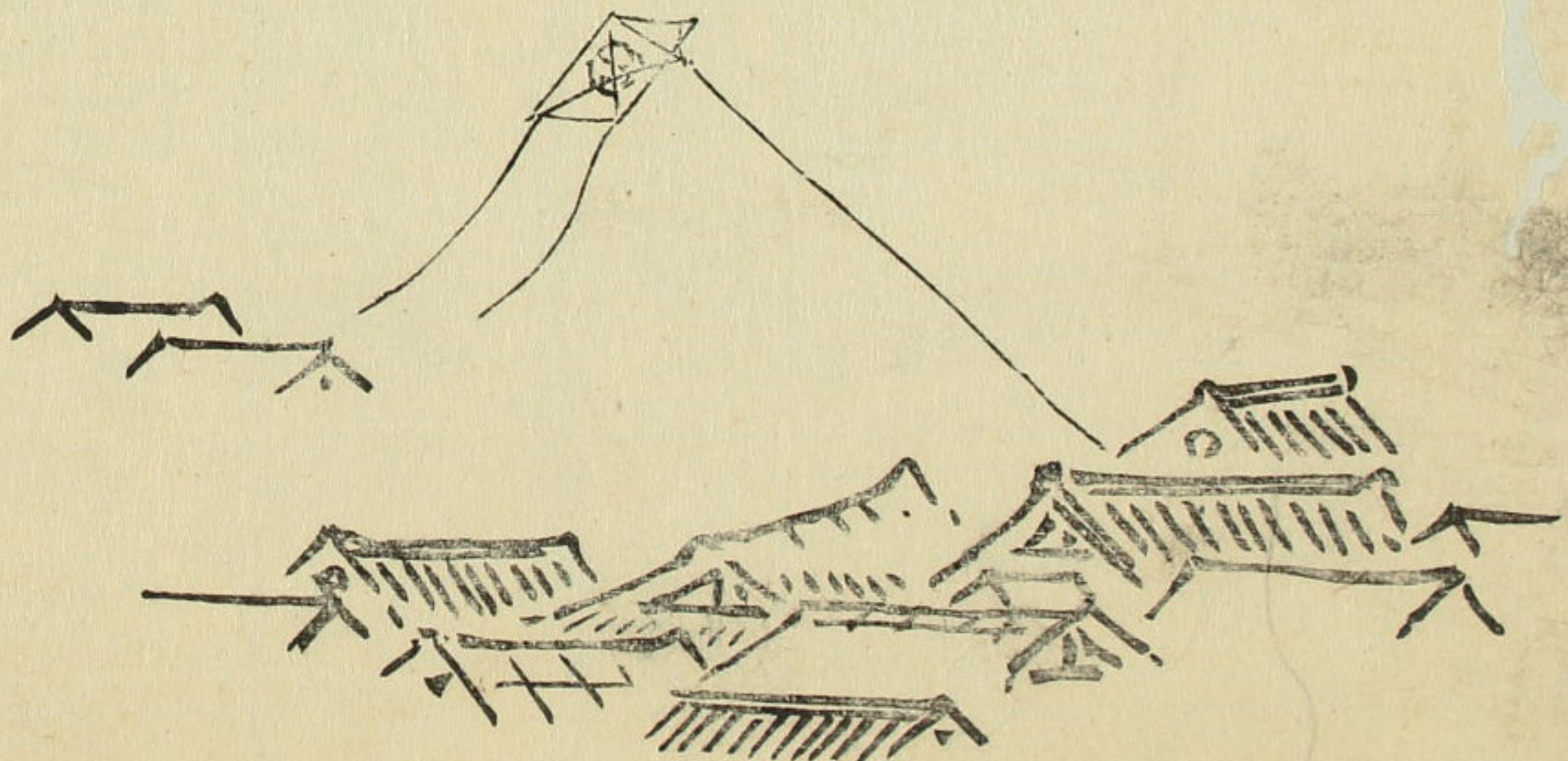
ほろるい熟此

糸糸

雲化武家

とと

いん

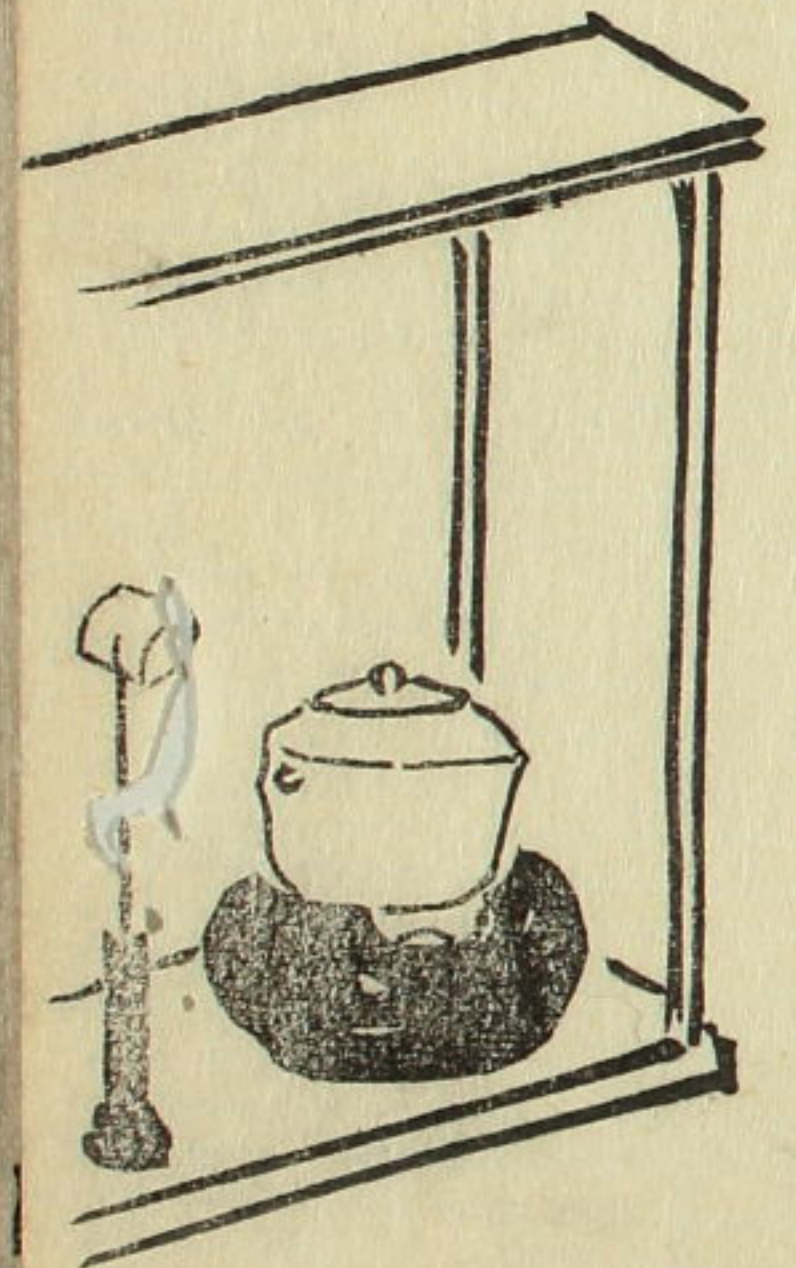


内ニ入名用

く

いん

いん

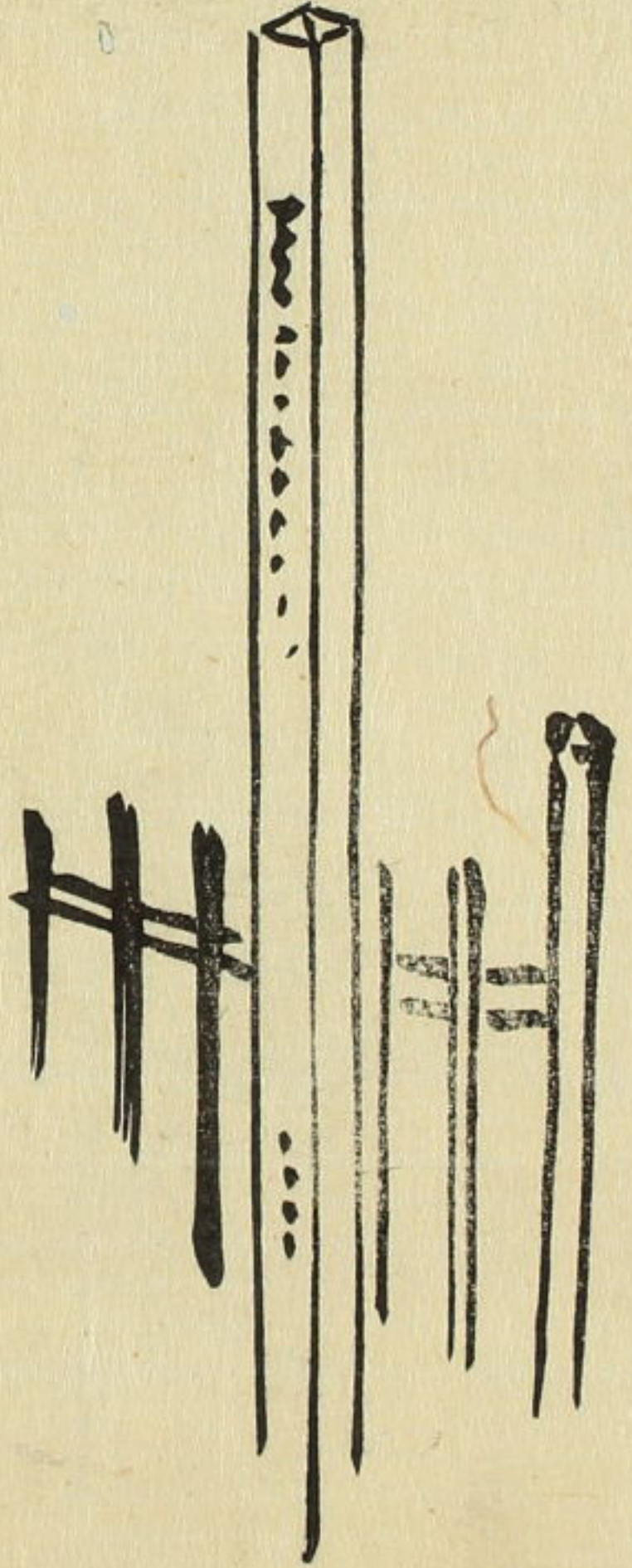
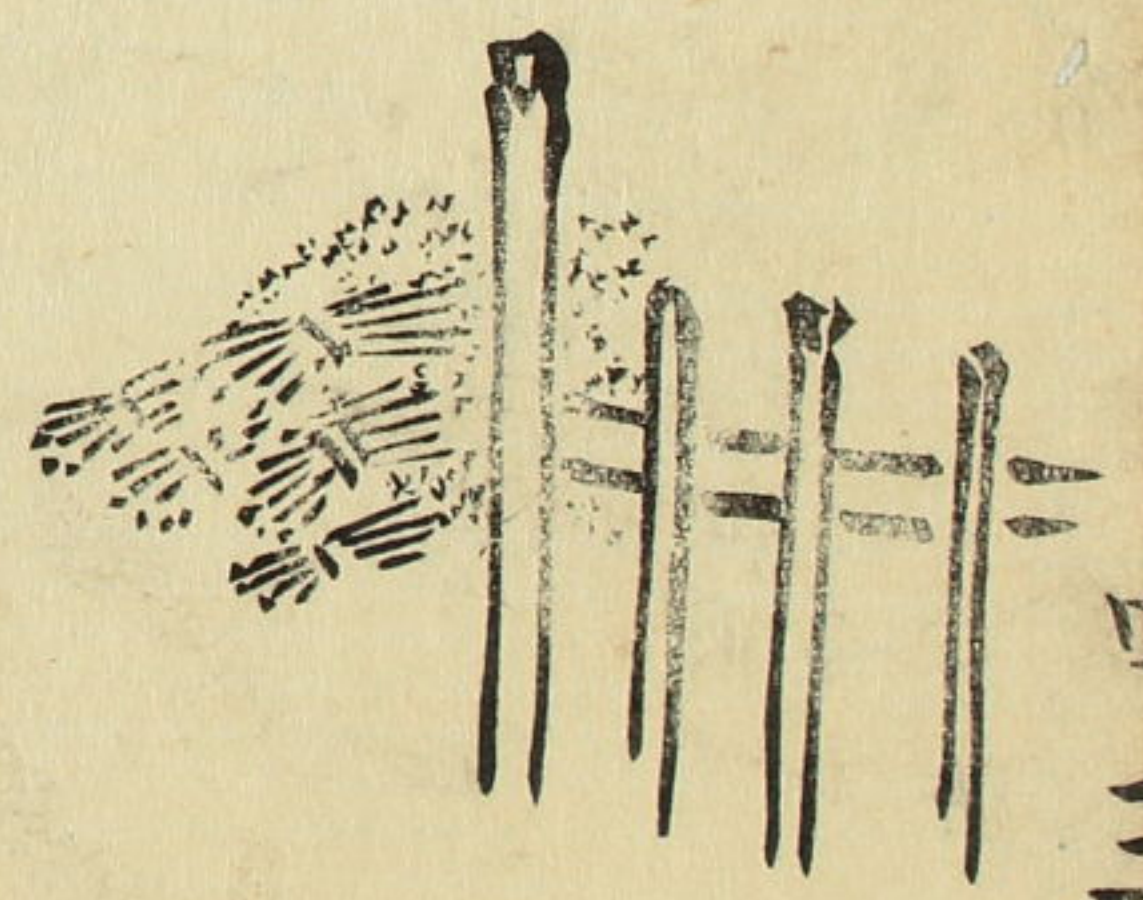


いん

いん

子子子

あつた侍ト  
定ムル降  
西条迄の  
宿の入口



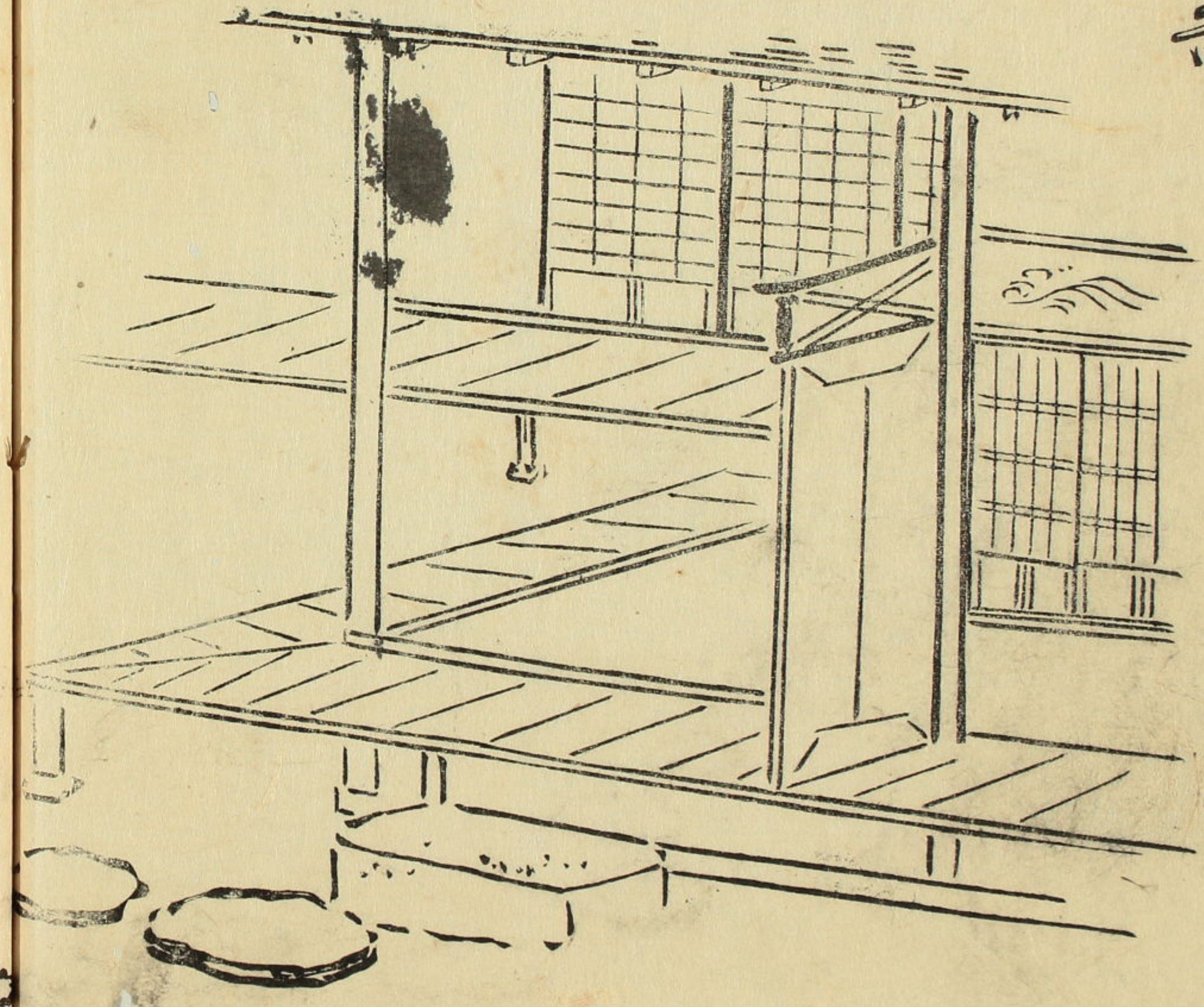
起つて用  
新  
おつた  
とれ  
の風

と人  
角力の  
は  
は



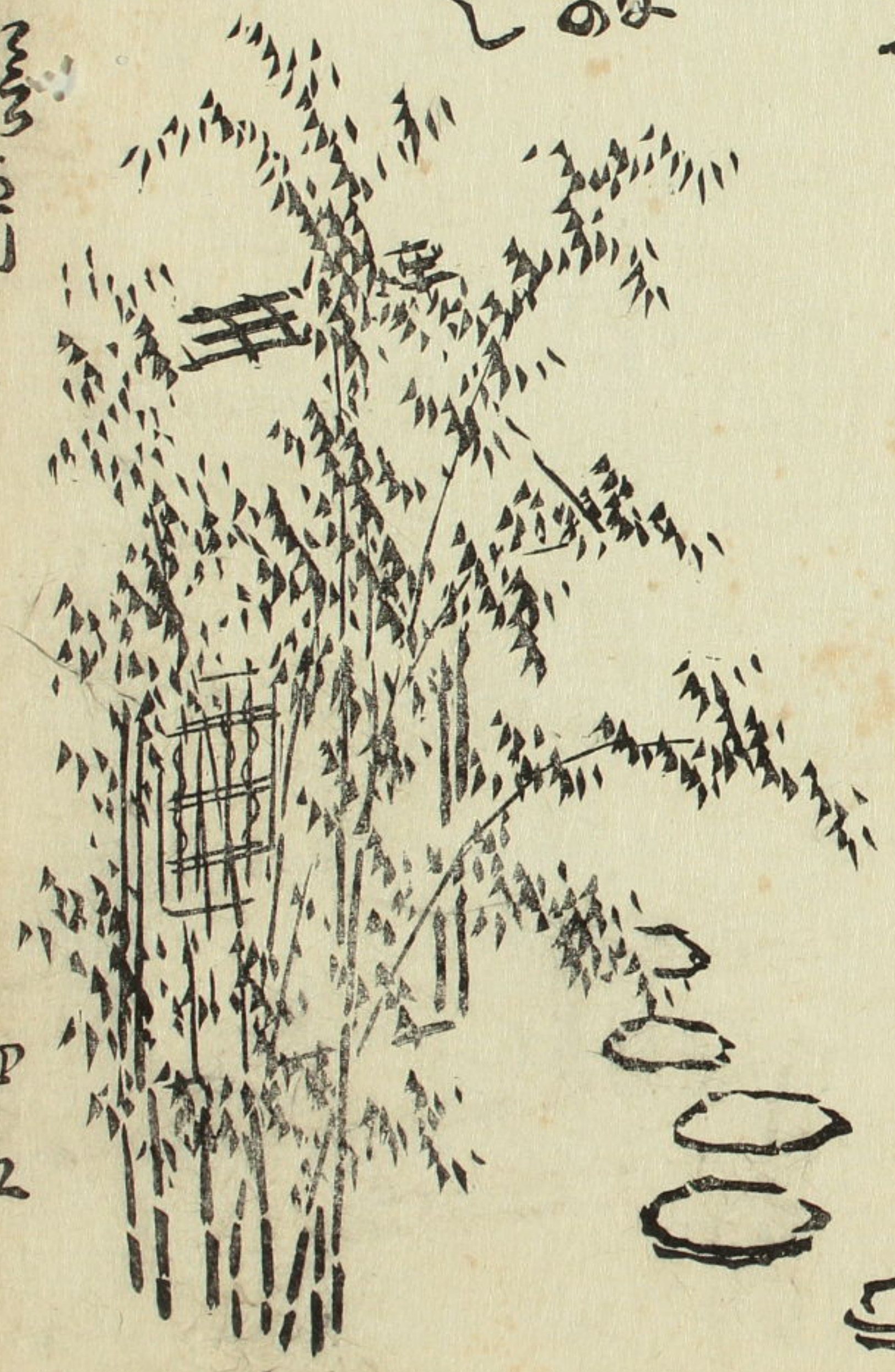
子孫の司

時代ノ變化  
夕風のそよ  
色く移す



内ノ風情  
空行ワ  
竹のそよ風

伸に  
歩むを  
まてみる  
石ぬり  
静し



春の風

22

子子子

之人亦在化ノ場  
伊勢ノ言ノ語  
行禮神ノ言ノ語

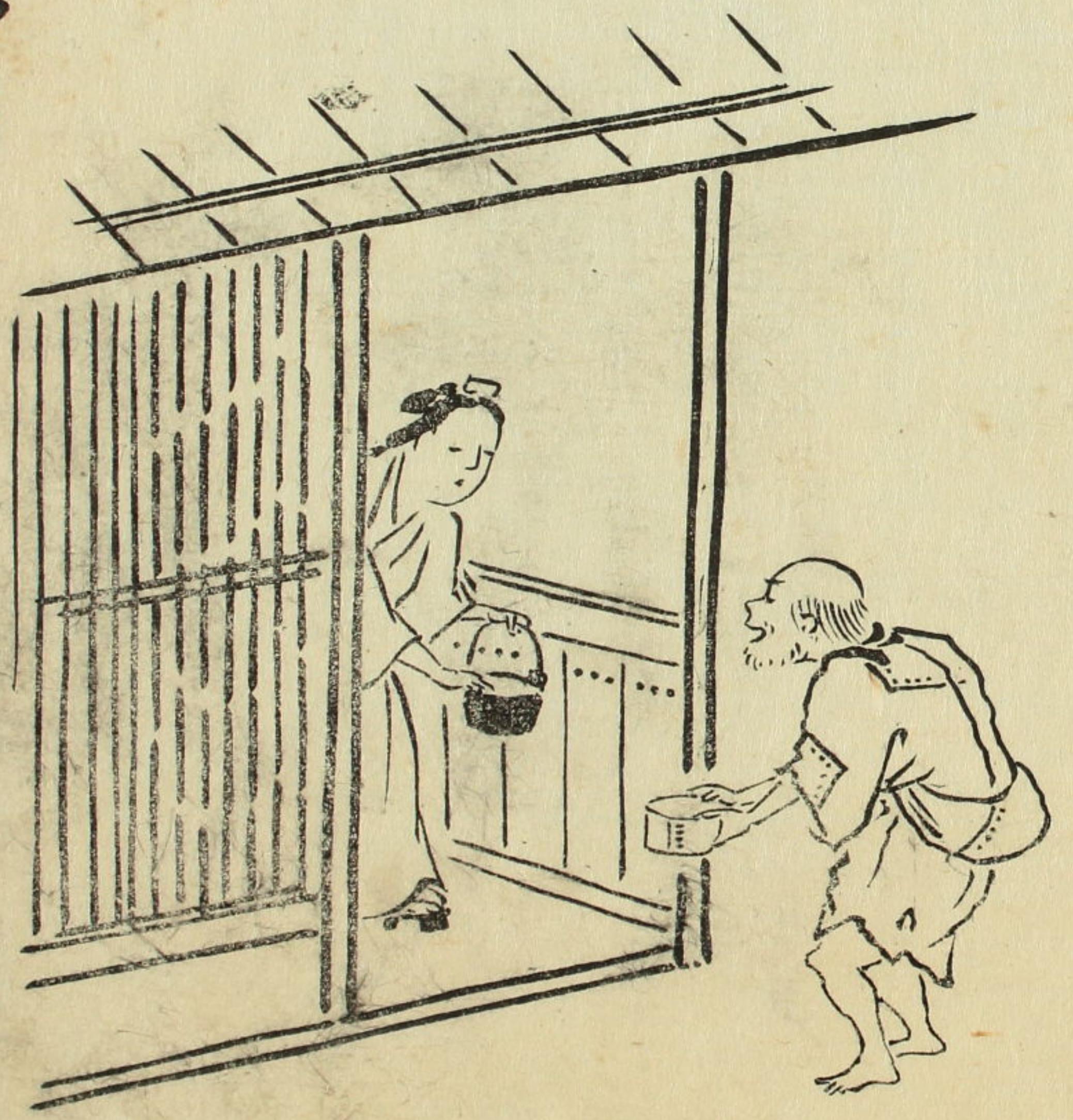
松ノ木  
日生ノ閣



時子  
うちをちく  
石世の石  
てしんか

起博  
京ノ町

騎  
古風  
古風



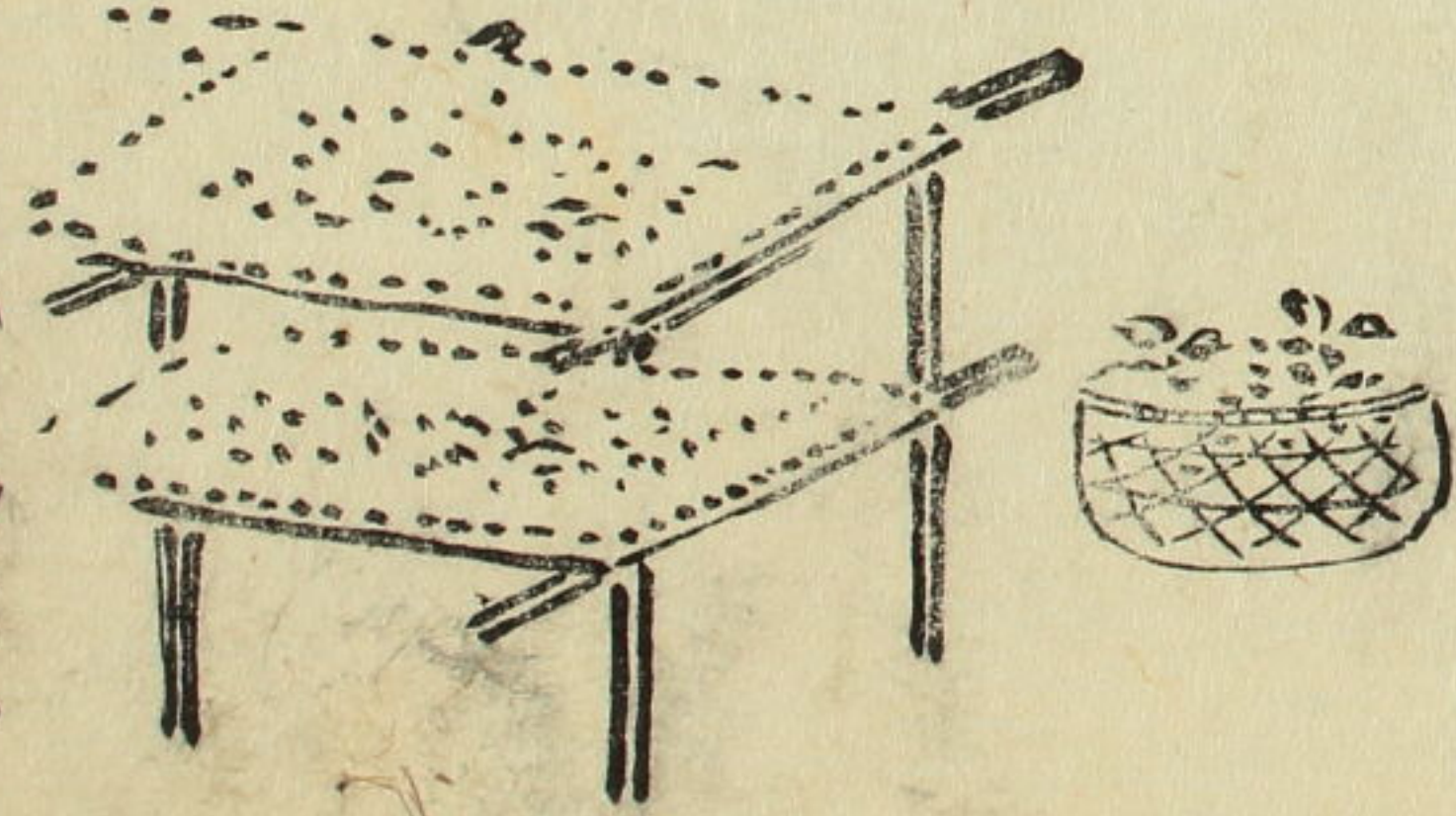
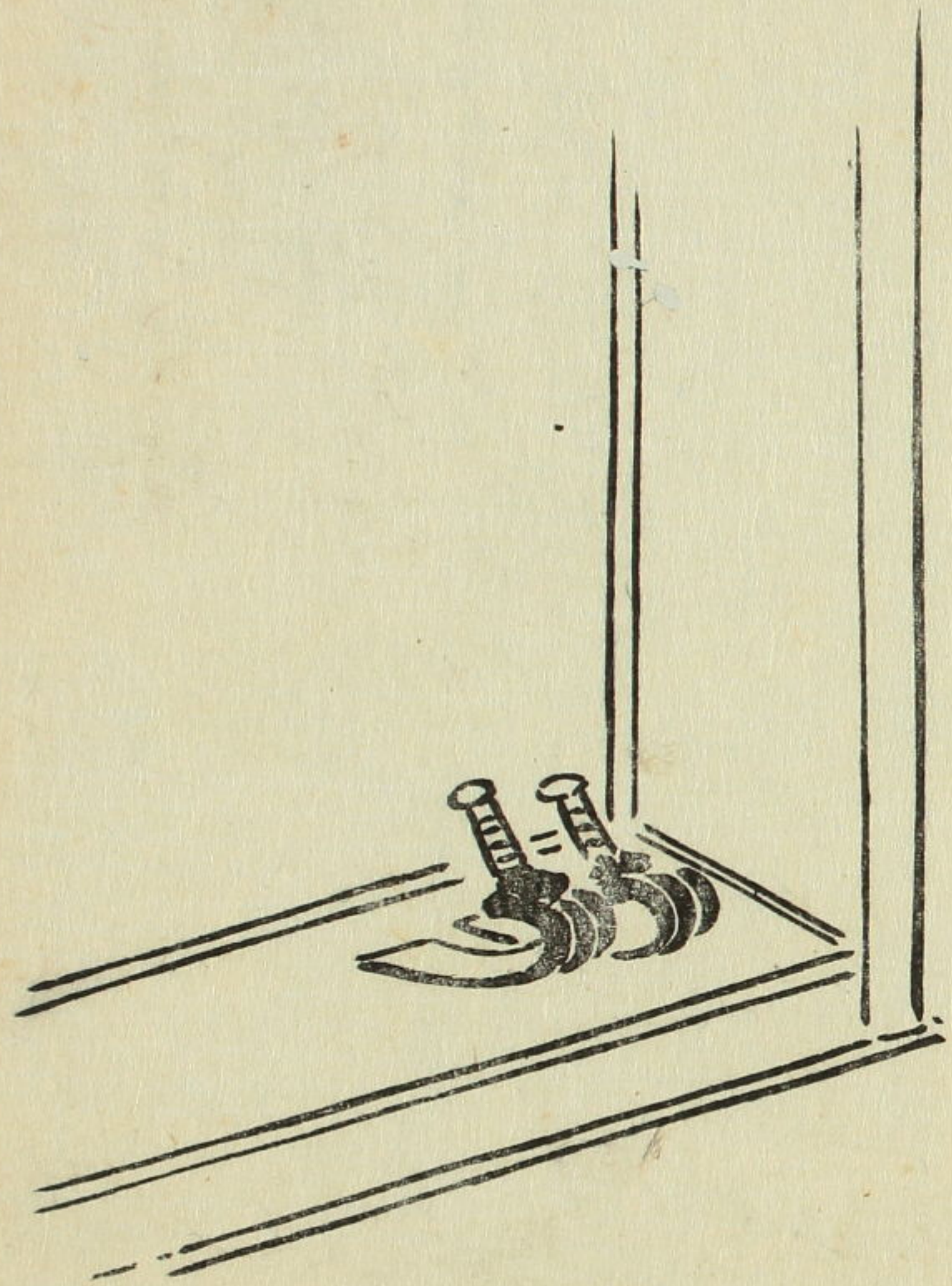
古風

あつゝ、空博  
月を  
あつゝのそは  
子しーを

伸に  
母は、様婿の  
終子よる



内ニ入タル亦る化  
床のつる子  
天虫此内の  
鞆籠

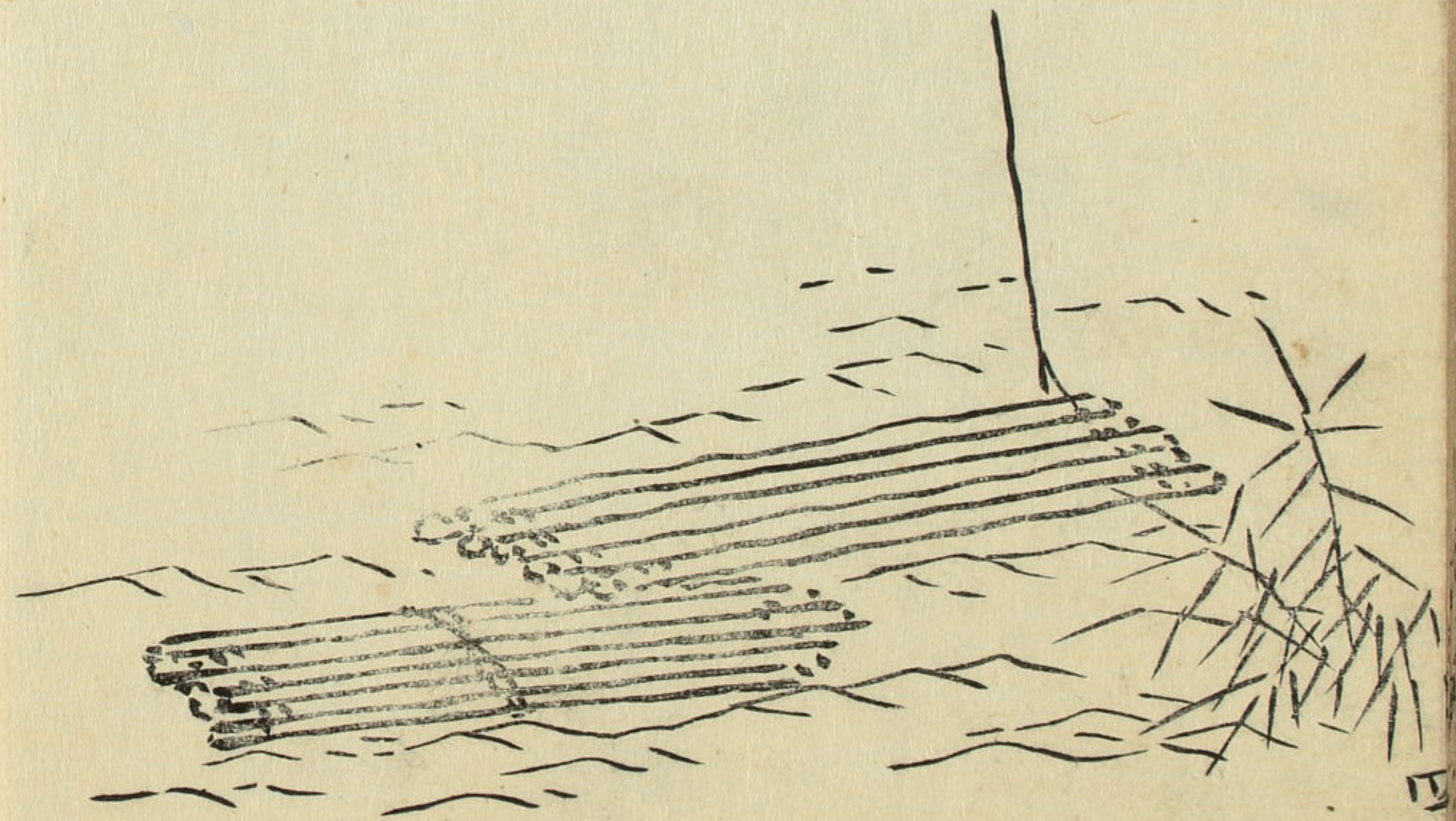




孫子

あつち  
用所

冒し  
竿紐せん



四七

京色  
近水  
谷の  
小橋  
井



孫子

四七

物類記

あまのり起情  
余情湯治

あまのり  
髪を洗ふ  
湯治

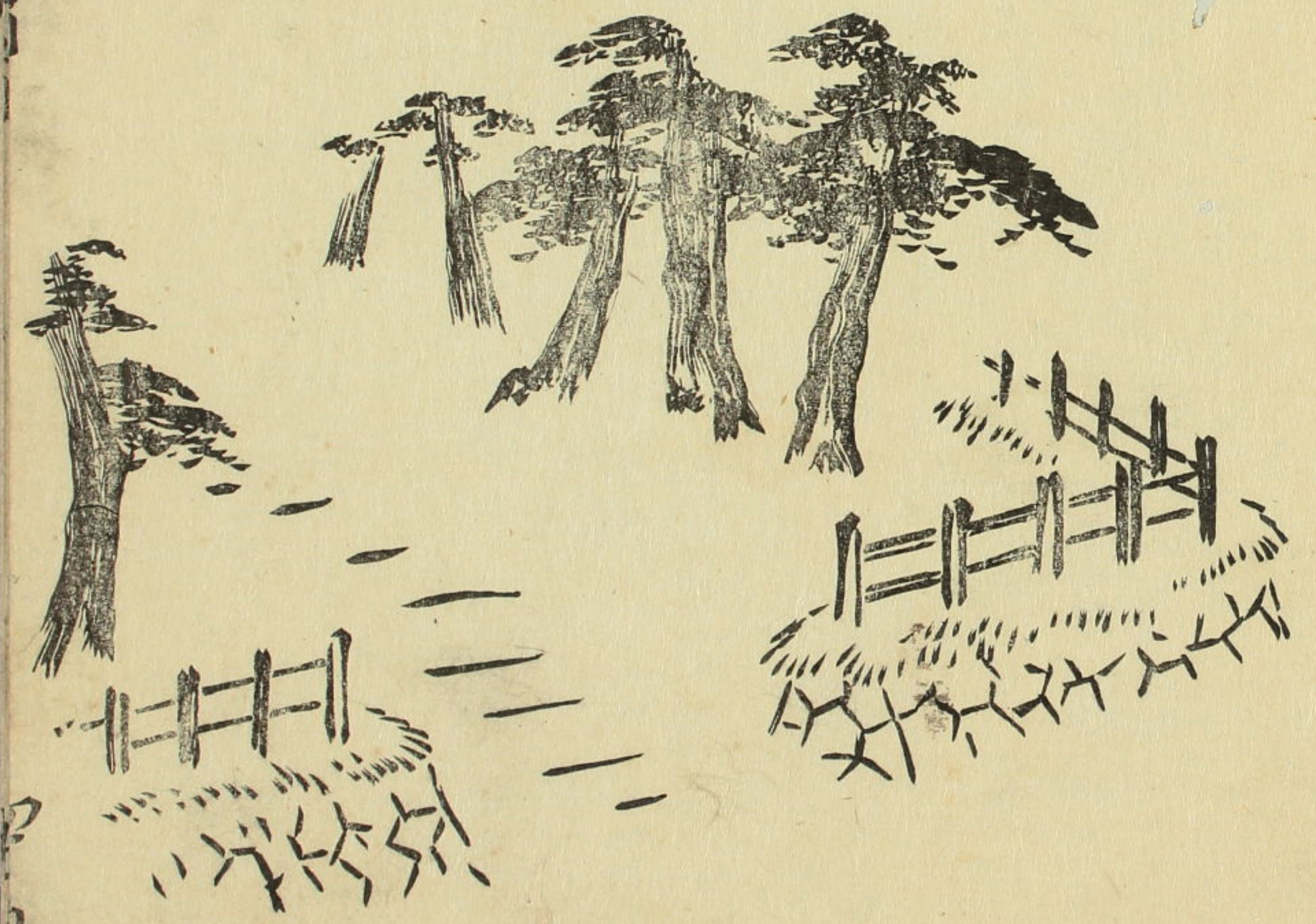
愛化ノ用

霜の月  
踏む  
うらみ



月

こま坊  
木槿の内北  
庭  
門前



木槿の内北

庭

子孫の世

あつりノ屋敷、  
ふま化

行

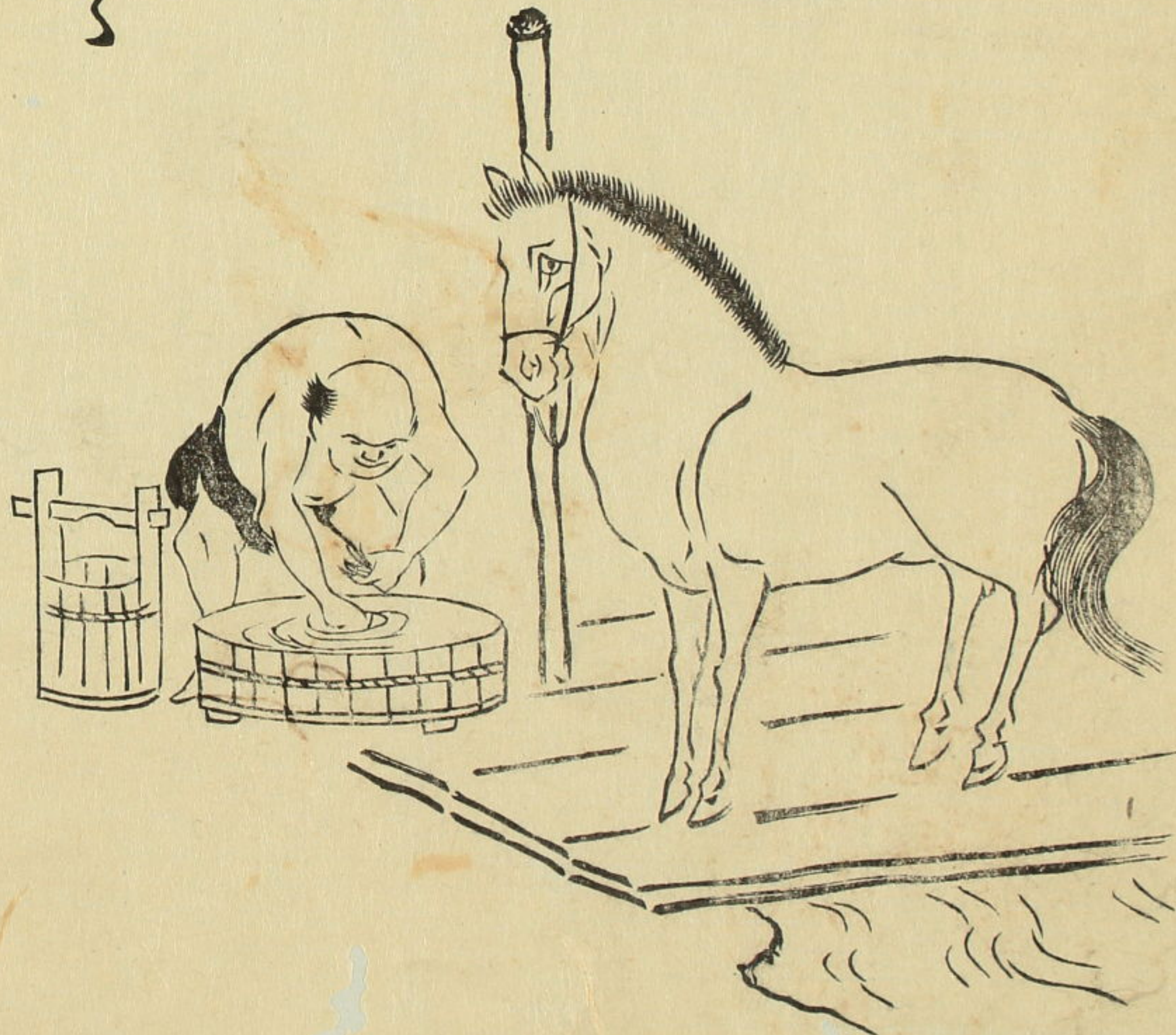
借るも

大盛

世後ノ時

玉の原を

小原買つ



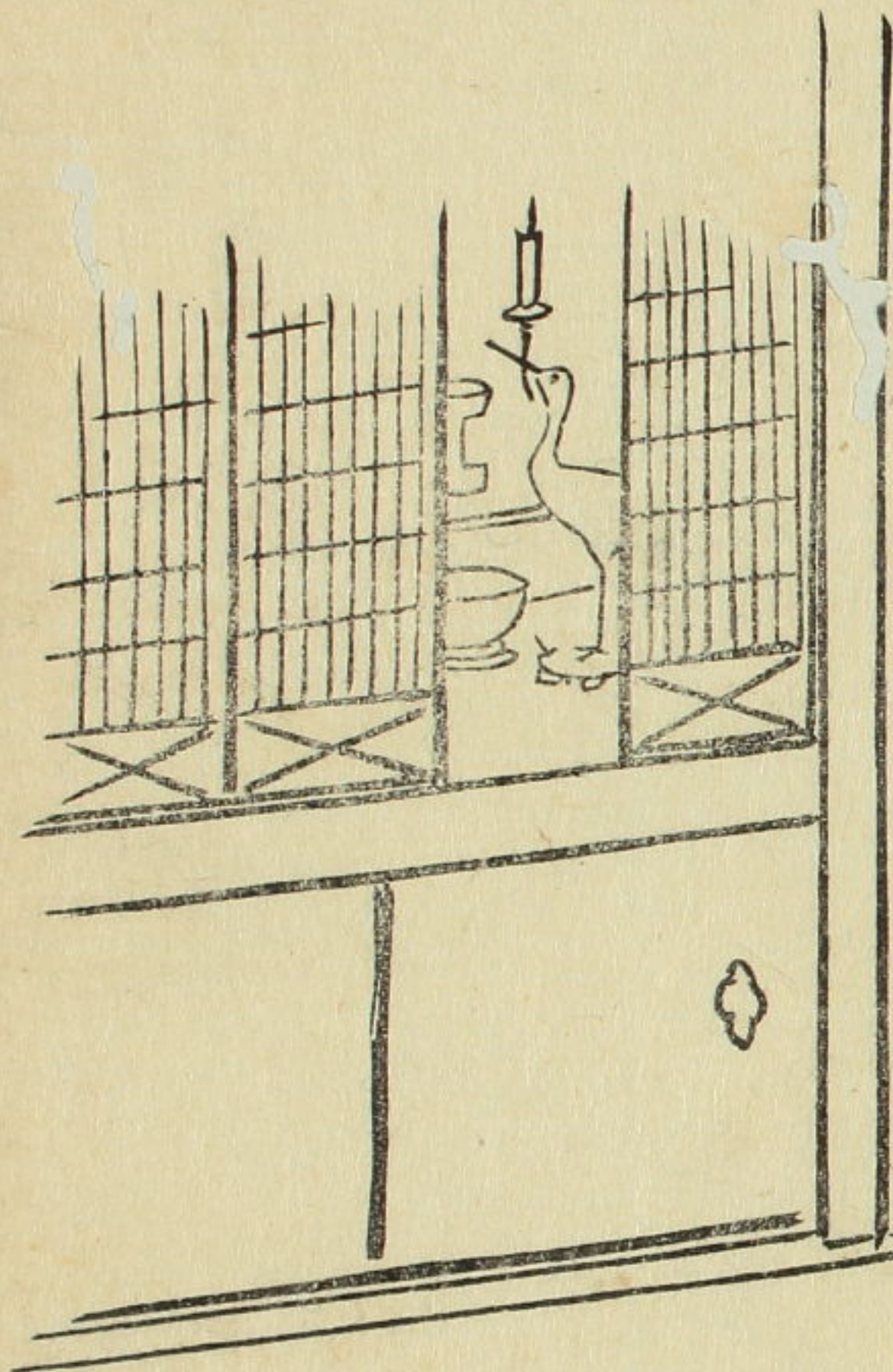
くノ世に

佛檀ふ

こころ

善悪を

たのむか





花ノ用ノ変化

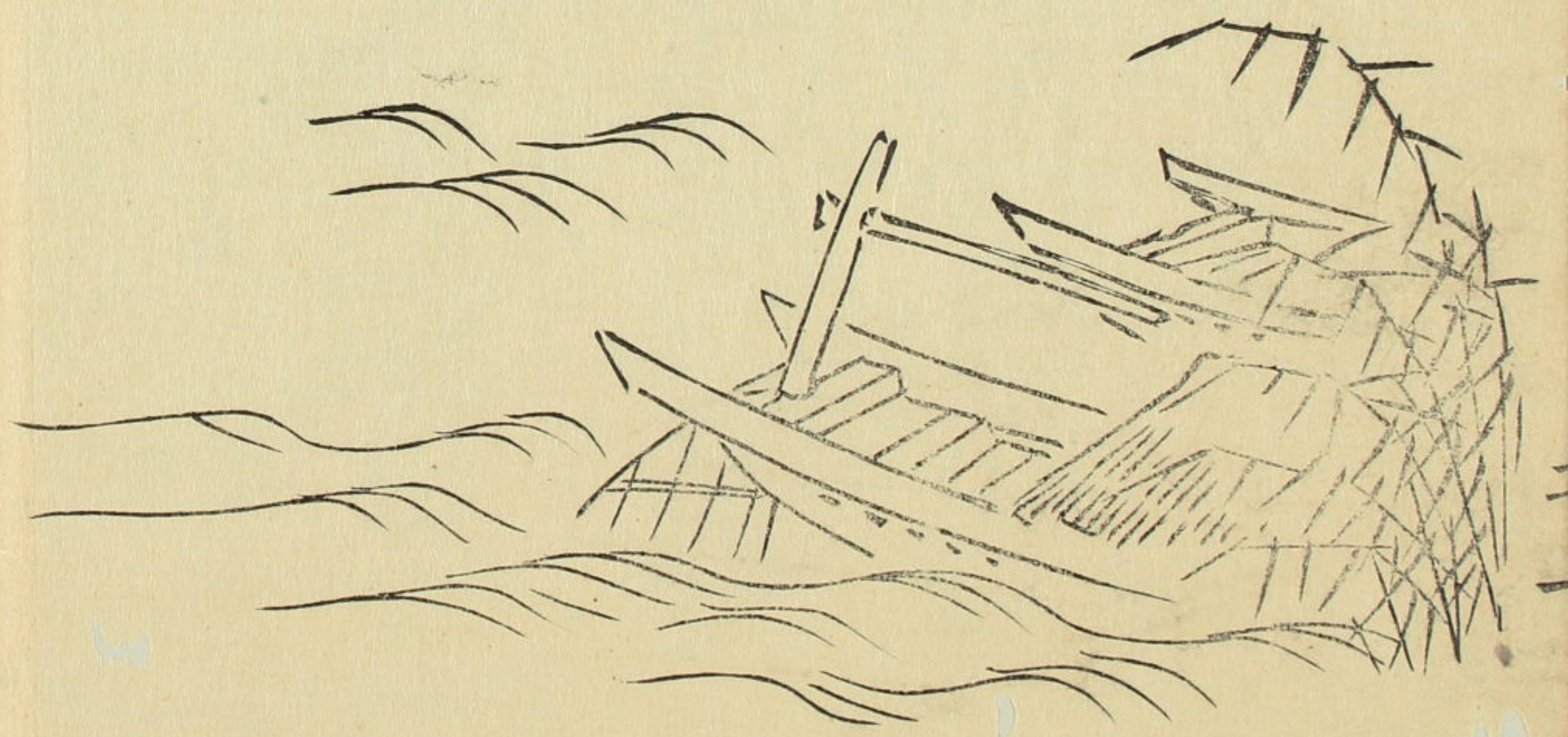
舟ノ舟の

日記五冊

船ノ中ノ書

刺力の書

付録の書



花ノ用ノ変化

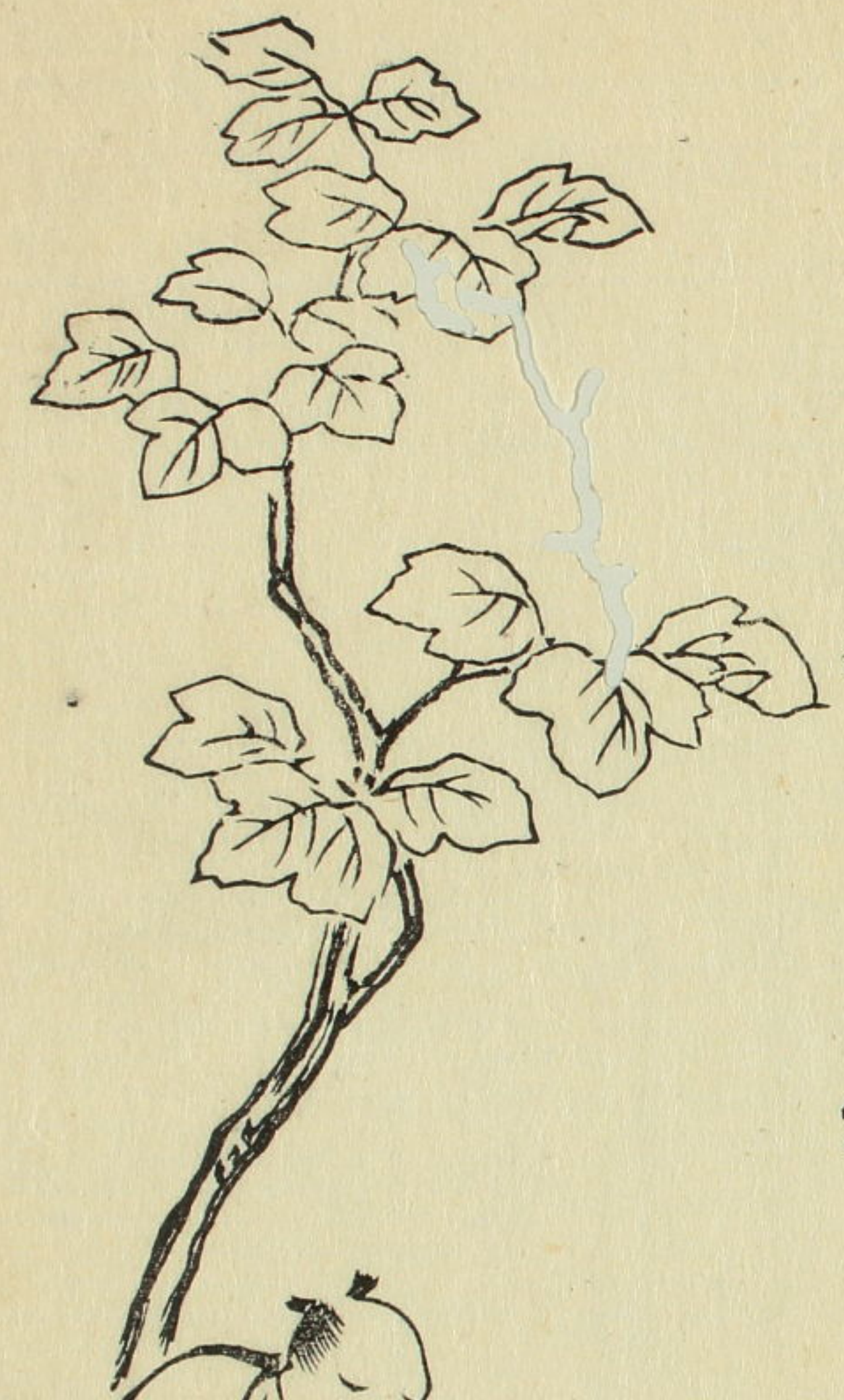
桐の葉

花ノ用ノ変化

花ノ用ノ変化

花ノ用ノ変化

花ノ用ノ変化



とらふ

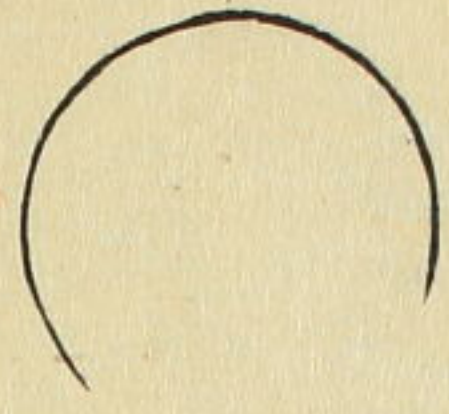
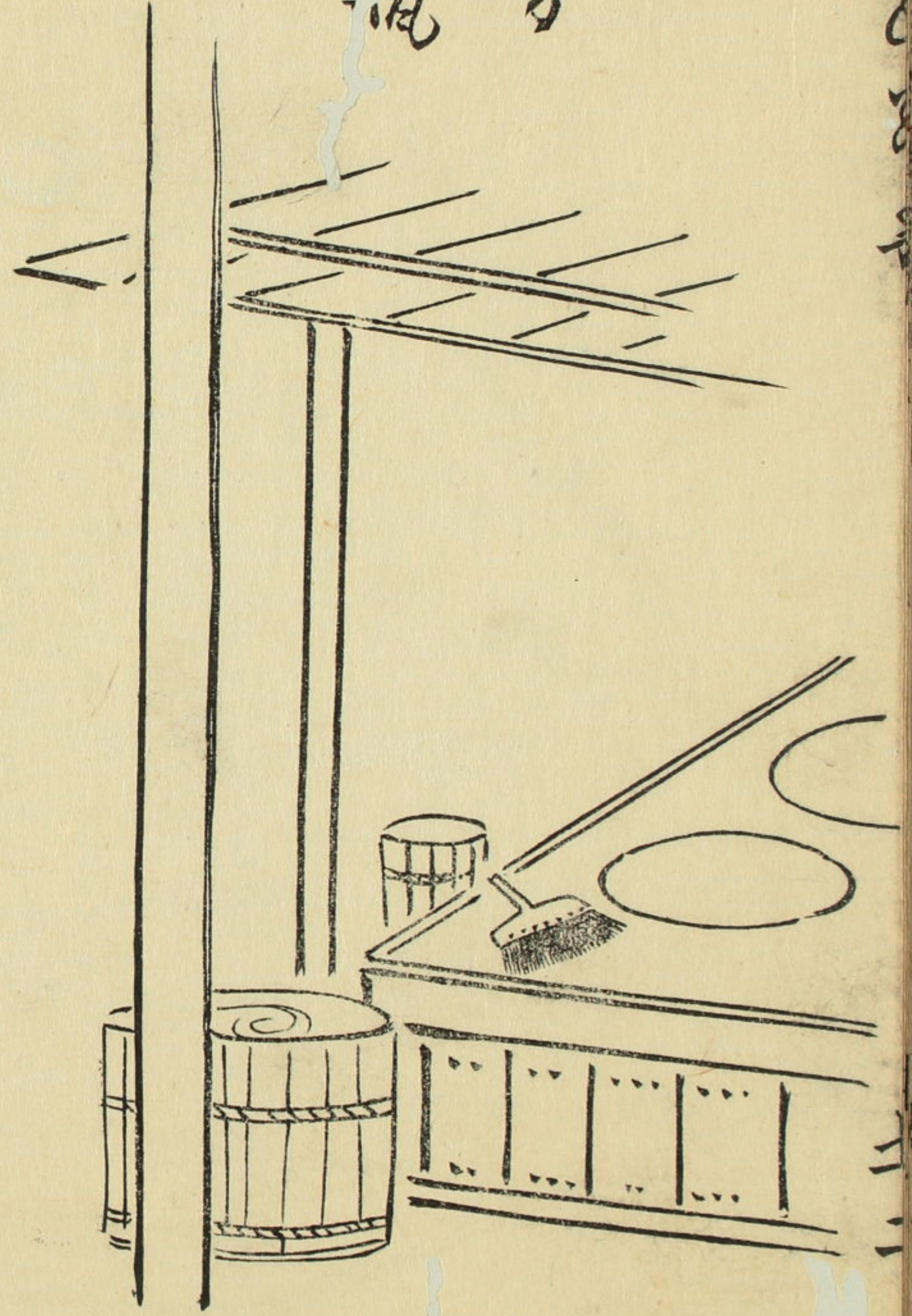
起情

居る用

たふし

たふし

とらふ



雪化中

とらふ

京野の雪化

並道し



雪化中

五三



新し木釣る心とて枝の根  
 右左  
 二角力の肩と後と名乗るに  
 巨を  
 夕風のなきをくし粉板  
 日中  
 空を注いでく竹のなき様  
 松生  
 本てみるう片ぬいたなれ静  
 笠山  
 猿も竹かける星のくう園  
 万鏡  
 うちとちく石地の雲のみま  
 以石  
 猶きうとて古風はきり  
 雲集

月を此方のる法子出て  
 月島  
 母の輝増れ籠るよと  
 未更  
 床にるよと床の内乃鞍籠  
 桂二  
 留もよとと片にせん  
 兵志  
 証ある谷の小枝に打さる  
 守也  
 ちとちの輝をほふ涼か  
 筆明  
 香の月醒れ物まじりの  
 不痛  
 木柱に内の廣を川流  
 隆也

子孫

十四



汗あせ 傳つた 大監おほのさげ 一之

玉たまの便たす 登のぼ 小原こはら 買か 一之 角字

佛ぶつ 檀だん 小こ 角かく 登のぼ 一之 浮風

心こころ のゆゆ 梅うめ と折をり よよ 登のぼ 一之 巴行

桐きりぎりす 移うつ の途みち とをを 此こゝ 表あらわ るる ぬぬ 也や 臥羊

貴たか 幹かん 一ひと と事こと 呼よ ぶぶ 東城

持も 借か ぶぶ 羽は 籠かご のゆゆ 袋ふくろ 二ふた 痛いた 一之 蜀吏

みみ のの 糸いと のの 糸いと 記し 口くち 古ふる 冊ふみ 吐つ 等ら

刺さ 可か のの 袴はかま としし 記し 有あ るる のの 糸いと 三さん 茶

桐きりぎりす のの 糸いと 糸いと 糸いと とと 登のぼ 一之 杖つえ

ここ のの 心こころ とと 糸いと 糸いと のの 糸いと 糸いと 一之 伸の 和わ

杖つえ よよ りり 三さん 言こと 袴はかま とと 一ひと 登のぼ 一之 主しゅ 奥おく

とと ここ とと はは 京きやう 野の のの 糸いと 糸いと 糸いと 糸いと 一之 草くさ 石いし

桐きりぎりす 二ふた 糸いと 糸いと 糸いと 糸いと とと 登のぼ 一之 執しやく 筆ふで

書後記

五十一

彫工朝倉守八

子孫

年

